
魔法少女リリカルなのはA`s ~ Don't Forget Storys ~

ポッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA、s、Don't Forget Story

【Nコード】

N5391P

【作者名】

ポッキー

【あらすじ】

反盲目？の様な眼を持った少年、御崎剣也。

光は感じないけど、すべての感情を理解するその瞳に、何を映す？
忘れられない思い出たちが、作り上げられる…

（この作品は作者の処女作です）

4/12 完結しました！読者の皆様、本当に、ありがとうございました！！

10000ユーザ達成！読者の皆様、ありがとうございます！

プロローグ

プロローグ

・・・俺には、太陽の光を感じることができない。いや、見えないと言った方が楽か。

生れつきから、俺には光を見ることができなかった。

他のものは、ぼんやりとだが形だけはわかる。こんなことは医者にもわからないらしい。

そして、人を見るときはさらに違う。

怒っているときは赤、うれしい時は桃色。かなしい時は青、楽しい時は黄色といった感じで、人の喜怒哀楽を視認できたりする。まあ、便利といえば便利だ。

人の顔をはつきりと見ることができない以上、このへんな目は役に立つ。

普段の人、モノは真白に見える。そのものの場所が分かるだけだが・

「おーい剣也、そろそろ見えてきたぞ」

「父さん、言っても見えないって」

「悪い悪い。海がちょうど見えたもんでな」

車を運転している父さんが、話しかけてくる。

「海は初めてだっけ、剣也」

「うん。それにしても、この目で見たいな、海」

「・・・」

二人の色が青くなった。

「いや、大丈夫だって！これまでもこうして過ごしてきたんだ、気にすることなんてないよ」

「ごめんね、剣也・・・」

「謝らなくても大丈夫！とりあえず、海の匂いってものをかがせてよ」

「あ、ああ！」

父さんが窓を開ける。すると、潮の香りがつんと鼻に来了。・・・

まあ、初めてなんだけどね。

「これが、海の匂いか…なんか塩からそうだ」

「そうよ。今度行けたら行きましようか」

「そうだね、父さん、母さん」

自分たち家族は、この街…「海鳴市」に引っ越してきた。
理由は、父さんの転勤だ。別に気にしちやいないけどね。

「友達、できるといいわね剣也」

「ああ。どんな人がいるか楽しみだよ」

これから、俺の、いやおれたち家族の新しい生活が始まる。

少し不安もあるけれど・・・まあ大丈夫だよな。

でも、俺はまだ知らなかった。

これから、ものすごく大きな事件に巻き込まれることを・・・

そして、生涯かけがいのない思い出ができることを・・・

魔法少女リリカルなのはA、s、Don、t Forget Story

ys、始まります。

プロローグ（後書き）

初めまして、ポツキーと申します。

文才のない自分ですが、期待にこたえられるよう頑張ります。

気にいってくれた方は、感想など送ってくださいさるとうれしいです。

主人公＋家族設定（後日追加あり？）（前書き）

今回は設定のみです。

1 / 2 6 : 主人公の目の色、髪の色追加。

2 / 1 6 : 魔力光についての設定を少し変更。

5 / 1 6 : 自身の魔力光追加。

主人公＋家族設定（後日追加あり？）

主人公設定

御崎剣也：男

年齢・・・9歳

血液型・・・B型

魔力光・・・白金

魔力数値・・・SSS-（知らないうちに魔法を使ったりする）

半？盲目の少年。今作の主人公。

御崎家の一人息子で結構明るい性格。

髪の色は黒、目の色は赤。（SEEDディステイニーのシン・アスカみたいな感じ。ハイライトはない）

物を見ることはできるのでスポーツは普通にできるが、字はまったく見えないため点字で行っている。何気に成績は結構上の方。

この目のせいかわ、いじめを受けることも多々あったが当の本人はあまり気にしていない。

感情を見ることができると、悲しい色（青）の人を見るとすぐに助けに行く。

一応杖を持っており、気づかないところの障害物などを見つけるときに使う。

シグナムの推測と、なのはの魔法により魔力光が見えることが判明。バインドの色や魔力弾の色もわかる。

家族設定

御崎一真

剣也の父親。サラリーマン。

転勤のため、家族で海鳴市に引っ越してきた。

剣也にスポーツを教えた当人で、自分自身もスポーツが得意。暇な時はキャッチボールをするほどの仲。

ちゃんとものを見ることができない息子を結構心配している。

御崎ほのか

剣也の母親。専業主婦。

剣也の目のことを自分の責任と思っている。当の本人は全く気にしていないが・・・

父親よりも息子を心配しており、結構な親ばか。

一真とは今でも新婚気分で、料理などを一緒にしたりする。

主人公＋家族設定（後日追加あり？）（後書き）

次回は原作と少しリンクするかも？

これからもがんばっていきますので、見続けていただけるとうれしいです。

第一話：翠屋（前書き）

第一話です。現在時間としては、闇の書事件の少し前、フェイトが海鳴に来ておらず、なのはの蒐集も行われていない状態です。

第一話：翠屋

第一話：翠屋

「そう言えば、おいしいケーキとコーヒーを出す店があるって言うのを聞いたわね」

「へっ……名前は？」

「「翠屋」っていう店だつて。母さん楽しみだな」

「母さんは甘いものには目が無いなあ」

二人とも楽しそうだ。俺も甘いものは好きな方だ。

「それって、あれじゃない？」

「ああ、それだそれだ」

どうやら見えたそうだ。街の中なのか、真っ白な建物がいくつか見える。この目でみた場合そう見えるだけだが。

「じゃあ、行こうか剣也」

「うん」

この街に来て、初めて入る建物だ。楽しみだな。

「いらつしゃいませ。何名ですか？」

「三人です」

「ではこちらへ」

ウエイトレスだろうか？エプロンを着た人が案内した。

正直な話この目だと誰が男でだれが女なのかはつきりしない。服で判明することがほとんどだが、最初見ただけではまずわからないことが多い。

それにしても、まあ……

「ちいさいな」

正直に言葉が出ていた。

「女の子に向かって悪口を言うのは、ちょっと失礼なんじゃないかな！？」

うわ、赤い・・・怒らせちゃったな。

「ごめん、つい正直に言葉が出た」

「もう、初対面でそんなこと言う人は初めてなの!」

「本当にすみません」

簡単に、目の前の女の子が起こっている姿が想像できた。

「剣也、女の子に対して失礼よ?すみません、うちの子が迷惑をかけて」

「いえいえ、まだ若いですし正直なのはいいことですよ」

「お父さんまで」

「ごめんなのは」

初めて入った店がこんなことになるとは...

「剣也はなに頼む?」

「何があるかわからないとわからないよ」

「あゝごめん。一応シュークリームとかショートケーキとか、一般的なものはすべてあるよ」

「じゃあチョコレートケーキで。飲み物はコーヒーでいいや」

「わかったよ」

父さんは注文を聞くと、店員に伝えに行った。

(落ち着いてて、いいところだな)

賑やかなのも好きだが、どちらかというと俺は静かな方が好きだ。

こんな空間で本を読めば、時間などあつという間に過ぎるだろう...

「おまたせしました」

すると、さっきの女の子がさっきの品を運んできた。

もう機嫌は良くなったのだろう、体の色が桃色だ。

「じゃあ、いただきます」

食べたケーキとコーヒーは、今まで食べたものよりよっぽどおいしかった。

（まあ、それにしても・・・）

女の子はまだ働いているようだ。普通なら、仕事をしている人を見れば白の人が多いのだが…

（なんでずっと桃色なんだ？）

それほどうれしいのだろうか、この仕事が。

（ま、ワーカーホリックって言う人もいるし）

特別気にすることもなかった。

そのまま食べ終わり、自分たちは店を後にした。

第一話：翠屋（後書き）

第一話でしたが、いかだったでしょうか？

もう少しで一年も終わりですが、どのような一年でしたか？
悔いのない一年を過ごせますよう、祈っております。

第二話：深夜の出来事（前書き）

第二話です。まだなのはたちは騎士たちとは出会っていません。
ではどうぞ。

第二話：深夜の出来事

第二話：深夜の出来事

「ふ」

風呂にも入ったし、引越しのものはあらかじめ片づけたからな…

「もう寝よう…今日は疲れた」

そのまま俺は布団に入り、寝た。

「この近くに、高い魔力があるんだけど…」

一人の騎士が、夜空を駆ける。

手にはハンマー、体はゴスロリチックな赤い衣装。帽子をかぶっており、それにはウサギの人形が付いていた。

その目には、強い意思があった。

「封時結界、展開」

その瞬間、周囲一帯が濁った球体に包まれた。

「うぐっ！」

突然、俺は目を覚ました。胸が強く抑えられるような感じ…
もとから体は目以外悪くはない。だがこんなこともごくまれに起こる。

「はあっ、はあっ、はあっ…」

動悸がひどい。汗もかいてきた。

「とりあえず、水だな…」

光は見えないにしろ、ものの形は夜でもわかる。光が無くてものが見えるっていうのは、こういう時以外に役立つ。

「今は…12時か」

深夜だな…階段を下りるのはちとつらい。

その時、俺は妙な違和感を感じた。

「父さん、母さん？」

とりあえず、寝室に入る。ベッドを見ると…

「いない!？」

なんと、二人ともいなかった。

「何が起こったんだ…」

まだ心臓はバクバク言っている。少し怖いが、外に出てみる。

「少し、怖いな」

こんな状況は生まれて初めてなので、正直怖い。

杖を持ってきてはいるので、いざという時は役に立つだろう。

「注意しないと…いつ何が起こるかかわかったもんじゃない」

目を閉じて、視覚を消す。集中力を高めるためだ。

音しか聞こえない、まさに暗黒の世界。

「っ!？」

背後から何かの気配がしたので、前に転がる。

一瞬の無音、そして地面に何かをたたきつけた音。

振り返ると、体を赤に染めた人がいた。

(怒り…相当強い感じか)

「今のを躲わすとは…なかなかだな、お前」

「いきなりあつて、攻撃するのはどうかと思うんだけど!？」

剣を構えるように、杖を構えた。

落ち着いてみてみれば、女性…いや、女の子の様だ。

手にはハンマー。服は…ゴスロリか?なんかでかいスカートきてるし…

「突然だけど、あんたのリンカーコアを貰う」

「はあ？」

リンカーコア?なんだそりゃ。

「えーと、そんなものに聞き覚えが無いんですけど…」

背は低いけど、今砕けた調子で話したら殺されるかもしれない。そう思って敬語で話す。

「なんだって…?」

「あと、自分うまくものが見えないんで・・・形は分かるんですけど」

「そうなんだ（はやてとおなじで、体が不自由なんだな）」
心配しているのかな・・・少し青が混じってきた。

「ところで、あなた少し浮いてませんか？」

「あ、ああ。魔法で浮いてる」

「は？魔法？magic？」

「いやいやそんなもの存在しないでしょ、ここは現実だ。
まあ一応聞き返してみる。」

「本当ですか？」

「ああ」

Orz・・・まじか。

「はー現実にあるんですね」

「それにしても、落ち着いてないか？」

「驚きすぎてこうなってます」
実際そうだ。

「ところで、リンカーコアって？」

「魔力の源の様なものだ。いってみればエネルギーみたいなもん」

「はあ・・・」

「それが、今お前の中にある」

「・・・本当ですか？」

「本当だ」

そんなものが俺の体の中にあるとは・・・信じられん。

「それをよこせと言っただけでしたが、何に使うんですか？」
「・・・」

無言、か。よっぽどつらいことなのかな？

「もしかして、悪いこととかじゃないんですよね・・・」

「っ、そんなことはしねえ！あたしの誇りにかけてもな！」

あ、その服って騎士服だったの。

それにしても大きな声だ・・・よっぽど大事なことらしい。

「あたしの大切な人…はやてを救いたいんだよ。体が不自由で…

」
「自分と、同じですね」

完璧に、その体が青に染まる。よほど、そのはやてという人が大切なんだろうな…

「本当に、悪いことには使わないんですね」

「本当だ。約束する」

その声は、重みのある声だった。

「なら、使ってください。もとからこんなに不自由な自分ですし、こんなことでしか役に立てないのなら…」

「いいのか？」

「ええ。あなたも、その人をよほど大切にしているみたいですし」
「…ごめん」

実際、この体で役に立つってあまりないからな…

あつても力仕事ぐらいだし、いや、場所がわからなければただの足手まといだ。

「そう言えば、名前を聞いてなかったな」

「剣也です、御崎剣也。あなたは？」

「ヴィータだ」

外人か？いや外人なら名字もある。この際気にはしないけどね。

「じゃあ、行くぞ」

「はい」

ヴィータさんが、手を伸ばしてくる。そして

「蒐集」

「っ…」

胸を何かで貫かれるような、鈍い感触。一気に疲労とも何とも言えない脱力感が襲いかかる。

「はあっ！はあっ！はあっ！」

起きた時よりもひどい動悸…やばい。

「大丈夫か、おまえ！」

「なん・・・とか・・・」

かすれた声で、何とか言う。だが、体はそれについていけない。
「すみません…少し、肩貸してくれませんか…」

「あ、ああ！」

すぐに肩を貸してくれた。いいひとだな・・・

「家までは歩いていきますから・・・あなたは、はやてさんのほうに・・・」

「そんな体じゃ無理だ！」

「あなたの大切な人が、待ってるんでしょ？なら、すぐにでも行ってあげてください」

「っ・・・」

すると、突然俺の体が浮いた。

「場所を言え。このほうが早い！」

「え、ええ!？」

仕方ないので場所を言うと、すぐに言ってくれた。風が顔にあたってる…はयी。

「今・・・飛んできます?」

「当然だ」

家の場所を言うと、ものの2分でついた。歩いたらこれの十倍くらいかかってたかも・・・

「ありがとうございます」

「ごめん・・・突然あつて、こんなことして」

「いいですよ。それよりも早く…」

「わかってる。お前の気持ちは無駄にしねえよ！」

すぐに飛んで行った。体の色は赤のまま…自分におこっているのか？
「ねよ…」

きしむ体で何とか部屋までたどり着き、ベッドに入った。

「それにしても、すごい魔力だ…」

手に入れた魔力はおよそ100ページ分。SSSランクほどの魔力

だろう。

おまけにぎりぎりまでとらないでこの数字だ。とつていたら2000は埋まっただろう。

「ヴィータ、お疲れさまだなって・・・なんなんだその魔力は！」先に帰ってきたシグナムが驚いていた。

いきさつを話すと、少し悲しい顔をした。

「いい奴だな。その男は・・・」

「ああ・・・あんな人には初めてあったよ。この闇の書の守護騎士になってから」

御崎剣也：「相当なお人よしの奴だ。」

光を感じれず、ものもぼんやりとしか見えない。はやてよりもきつい生活だろう。

あたしの一撃もよけられた！目の見えない人は、その分他の感覚が研ぎ澄まされるというのは本当らしい。

「そいつの託してくれた分まで、がんばらないとな。あたしたち」

「当然だ。ヴォルケンリッターの誇りにかけてな」

もう一度、その使命の重みを感じた日だった。

第二話：深夜の出来事（後書き）

長期休暇のため、二週間ほど更新をストップします。

活動報告のほうに詳しく書いていますので、そちらの方をご覧ください。

では、よいお年を・・・

第三話：new friends（前書き）

お久しぶりです、ポッキーです。

お正月はどのように過ごされましたか？

こちらは雪がすごかったですね。

では、本編をお楽しみください。

第三話：new friends

第三話・・・new friends

「今日から学校か…緊張するな」

「今までと変わらないさ。普通にすれば大丈夫さ」

「それもそうか」

こつちに来てから…いや、あの人と会ってから1週間か。

俺は学校に行くことになった。目が見えないとはいえ、特段困ることもないしね、この目。

ま、心配事はあるが・・・頑張っていこう。

「ま、がんばって行つて来い！」

「ああ、わかつてるよ父さん」

新しい学校生活が始まる。

「と、言うわけで新しい友達がきます。皆さん仲良くしてください
！」

『はい！』

明るい声が響く。ここは私立海鳴大学付属小学校。剣也が入る小学校だ。

そのクラスでは、今か今かと転入生が入るのを楽しみにしていた。

「じゃあ、剣也君入ってきてください」

ドアが開き、剣也が中に入る。

「今日から、このクラスに転入する・・・」

「御崎剣也です。いろいろと迷惑をかけると思いますが、皆さんよろしく願います！」

「それで、剣也君は少し体が不自由です。困っていたら助けてくださいね？」

『はい！』

また、明るい声が響いた。

「じゃあ、剣也君はその開いている席に」
「はい」

ひとつだけ、空いている席がある。そこに座り、バッグを隣に付ける。

ん？隣の子って、もしかや・・・

「ねえねえ、どこからきたの？」

「何かスポーツできる？」

「ちょ、ちよつと・・・」

確認する暇もなく、俺は質問攻めにあってしまった。予想はしていたが。

「もう、いきなり質問されて困ってるでしょ！少しは考えなさい」
誰かが止めに入ってくれた。

「あ、ありがとう」

「当然のことをしたまですよ。私はアリサ、アリサ・バニングスよ」

「外国人か。よろしく、バニングスさん」

「アリサでいいわよ。肩つ苦しいのは嫌だし」

「はあ」

はじめて話したクラスメイトが外国人とは。まあこんなこともあるんだねえ」

「体が不自由って、何があるの？」

「目、だな。簡単にいえば、光が見えない」

それを言った瞬間、周りの人の色が少し青くなる。まあそうなるよな...

「だけど、ただ単にモノが見えないってわけじゃない。モノとか人とかは、ぼんやりとだけと形だけ見える。字とか絵は見えないけどね」

「やっぱり、不自由？」

「そこまではないかな？見えないとは言っても場所は分かるから、あとこの目は少し変なんだよ」

『変?』

「そ。人の感情がわかるんだよ。現にさっき光が見えないって言うたら、みんなが少し青くなっただし」

そこから、このへんな目について話した。

「これで気を悪くしたらごめん。昔、これで気持ち悪がられたこともあったから…」

「そんなことないよ!」

突然、大きな声がしたので、そちらを振り向く。声の調子から見るに、怒ってるみたいだけど・・・なぜに桃色?

「そんなこと全然気にしないよ。だって、私たちクラスメイトでしょ?」

「・・・ありがとう」

こんなに簡単に受け止めてくれるとは…いいクラスだなあ。

「君、名前は?」

「なのは、高町なのは!」

ん?どつかで聞いた覚えが…って

「ケーキ屋の娘か」

「あ、あの時の男の子!」

やっぱりか。

「なのはちゃん、知り合い?」

「うちのケーキ屋に来てたの」

口調的に落ち着いた人だろうか?高町さんの友達が話していた。

「そうなの。なら私も名前言わないとね。月村すずかです」

「よろしく頼む」

このまま自己紹介が続き、20人ほどの名前を知った。正直、疲れた…

というわけで昼休み。授業はそこまで苦でもなかったし、聞いたことをノートに写すだけだったからな…この体のため、聞いたことを覚えておかないといけない。そのため記憶力は高い。

「昼飯昼飯つと」

確か今日は赤飯だったか？入学祝だそうだ。せめて家でやってくれよ母さん…

「一緒に食べない？」

みると、高町さんが隣にいた。まだ桃色だ。脳内お花畑なのか？この人。

「別にいいけど、どこで？」

「屋上！」

風に当たるのも悪くはないか。とりあえずついて行った。

「それってお赤飯？」

「まあね。入学祝だつて母さんが」

一緒にいたのはバニングスさんと月村さんだった。どうやら三人は友達らしい。

「やつぱり、大変？」

「そりゃね。字が見えないから地図も見えないし、普通の本も読めないし」

他にも結構あるが、行ったらきりが無いのでやめた。

「苦労してるのね、あんた」

「いちいち気にしてたらきりが無いから。特に気にしてはいないさ」
唐揚げを口に入れる。ま、形でわかるし。

「バニングスさんはよくしゃべるね。他の二人は全然しゃべってない」

「アリサちゃん、元気だから…」

「なるほどね」

みたら体が黄色だからな。よっぽど楽しいんだろう。

「そう言えば、高町さんはよほどうれしいことでもあったの？」

「え、なんで？」

「この前会った時もだけど、体がずっと桃色だから」

「そんなことないんだけど・・・」

「ふうん？」

「じゃあなんだろう？まだ自分でもわからないことがあるみたいだな、この目。」

「なんか、剣也君堅苦しいよね」

「そうかな」

月村さんが話してきた。

「入ったばかりだし…まだ友達ってわけでもないし」

「じゃあ、今から友達ってことで」

「ずいぶんと突然だな」

女友達なんて今まで出来たことないぞ・・・

「じゃ、決定だね剣也君」

「まあ、よろしく頼む。月村さん、バニングスさん、高町さん」

「だから、それが堅苦しいのよ！名前で呼びなさいよ」

「じゃあ、すずかさん、なのはさん、アリサさん？」

「「さん」づけもダメ！」

「なのは、すずか、アリサ・・・これでいいんだろ？」

「よろしい！」

こうして、新しい友達ができた。

第三話：new friends（後書き）

年末といえば紅白歌合戦ですね。

水樹奈々さん、お疲れ様でしたっ！

劇場版でもあのラストシーンは感動しますね。DVDも買いました。去年は「深愛」という歌でしたが、そのアニメの「ホワイトアルバム」というのを全く知りません。

どなたか感想で教えていただけるとうれしいです。
では。また次回お会いしましょう。

第四話：図書館にて（前書き）

今回ははやてとの出会いです。

ヴィータがやっていることも知ることになりますよ。
では本編をどうぞ。

第四話：図書館にて

第四話・・・図書館にて

「はい、ここが図書館だよ」

「すみません、ありがとうございます」

その週の土曜日、俺は図書館に来ていた。

地図は点字のものがああるし、それを使えばまあまあのところまではいける。

それでも心配なので、とりあえず近くの普通の人に話しかけ、ここまで連れてきてもらった。

「じゃ、入りますかね」

自動ドアが開く音を聞きながら、俺は足を踏み入れた。

「結構広いな…読み切るのに時間がどれほどかかるのやら」

俺がいたところの図書館の倍ぐらいあるか？

「まずは、点字コーナーを探さなきゃな。カウンターは・・・」

と思い、ふと隣を見ると、本に手を伸ばしている人がいた。車いすに座っているようだ。

「うーん・・・」

「助けますか」

困っている人をわざわざ見過ごすほど、俺はろくでなしじゃない。

「どの本かな？指さしてくれればとるけど」

「え？えーっと、あの本を・・・」

俺でも届くところだったし、そこまで苦労はしなかった。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

関西人か？独特の訛りがある。

「すまないけど、点字の本があるところってわかる？」

「知ってますよ。こっちです」

ついて行くと、その子は一冊の本をとってくれた。

「ありがとう。助かったよ」

「いえいえ、助けてもらったお礼です」

うれしいのだろうか、少し桃色だ。だが、少し銀色が混じっているようにも見える・・・？

はて、こんなことあったか？

「目、見えないんですか？」

「まあね」

俺の目のことを説明すると、その子は驚いたようだった。

「それまた大変やなあ」

「大丈夫。もう慣れたし」

相手も障害者だし、お互い様だろう。

「はやって探したぞ」

「あ、ヴィータ」

ヴィータ？

声がした方を見ると、そこには赤色をした人がいた。

「ヴィータさん」

「お前は・・・剣也だったっけ」

「そうです。久しぶりですね」

「あれ、ヴィータ知り合いやったん？」

「う、うん」

まあ偶然というか、ヴィータさんがいた。あれ？さっきこの子をはやてって…

今は気にしない方がいいか。

「君、はやてっていうんだ」

「うん。八神はやてっていいいます」

「剣也。御崎剣也だ」

しかし真っ赤だな～ずっと怒ってるのか？

「あの、ヴィータさん」

「ん？」

「今、怒ってます?」

「いいや、全然」

おかしいな…今までこんなことないんだけど。

「なんで怒ってるって言っただ?」

「あゝまた説明するのか・・・」

先程はやてさんにした説明をもう一度する。

「なるほど…でもなんで赤色に見えたんだろうな?」

「さあ?自分でもわかりません」

これは本当だ。

「うゝん・・・やっぱり堅苦しいからさ、」さん「づけやめてくんねーか?」

「私もそう思う」

やっぱりさんづけが堅苦しいのは共通らしい。

「じゃあ、ヴィータ、はやて・・・でいいのか?」

「うん」

「また、友達が増えたな」

「なんかいったか?」

「いや、別に」

どうしてこんなに女友達ばかり増えるかな…

俺たちは、そのまま本を読んで過ごした。

「はやて、少し待ってて」

「どうかしたんか、ヴィータ」

「少し、剣也と話してくる」

ヴィータはそう言うと、剣也のもとへと走った。

剣也は、今はやてたちとは離れた場所で読書をしていた。

「なあ、剣也」

「どうかした?」

「見てもわかる通りなんだけど、はやてがあたし…いや、あたしたちの大切な人」

「達つてことは、他にも誰がいるんだな」

それからヴィータは、今自分たちが行っていることを話した。

「闇の書の呪い…それで、今はやては苦しめられているんだな」

「ああ。早く止めないと、最悪…」

それから先は剣也は聞かなかった。想像するだけでも嫌だった。

「それで本題なんだけど、この前剣也の魔力を貰ったよな」

「そうだけど・・・それが？」

「もらったら、ものすごいエネルギーだったんだよ。換算すればページ100枚分」

「そんなに!？」

「少し静かにしてくれ。で、予想するにお前はSSSランクぐらいの魔力がある」

「・・・わかんないけど、馬鹿みたいに魔力があるんだな」

「それで、気をつけてほしいことがあるんだよ」

「なんだ？」

「時空管理局、いつてみれば警察みたいなもんなんだけど…そいつらにあたしたちのことを聞かれたら、教えないでくれ。魔力が高いお前なら注意する可能性があるから」

「? いったら協力してくれそうなもんだけど」

「闇の書つてのは、搜索指定されてるんだよ。それもものすごくやばい奴。そんなものを持つてることがばれたら…」

「はやては助けられず、騎士たちと闇の書は封印…って感じだな」

「それは、絶対に避けたいんだ。だから・・・」

「わかつてる。絶対に言わないよ、約束だ」

剣也は小指を出した。

指切りげんまん嘘ついたらハリセンボンのくまです！

第四話：図書館にて（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

まだ戦闘シーンはありません。書きましたが自分でも下手だなあ…
と思います。

次回はフェイト登場です！楽しみに。

第五話：フェイト・テストロッサ（前書き）

フェイト初登場です。

ここから話が変わってきます。

では本編をどうぞ。

第五話：フェイト・テストロッサ

第五話・・・フェイト・テストロッサ

「また、このクラスに新しいお友達がきます」

はやてと友達になってから数日後、俺以外に転校生が来るらしい。その数日の間、また動悸があった。その時はこれまでよりひどくはなかった。

またヴィータが戦っているのか…と思うと、少し心が痛む。

「また転校生だつて、楽しみだね」

「今度は女の子かな？」

「さあな」

なんでか最近疲れる。結界を張られて、無事なように祈るとなんでか疲れるのだ。

その疲れは少しだけ残っていて、今も少し眠い。そのためこんなぶつきらばうになる。

「じゃあ、フェイトさん入ってきてください」

「は、はい！」

上ずった声が聞こえた。緊張してるのかな？

「今日から転入してきた、フェイト・テストロッサです。よろしくお願ひしましゅ！」

あ、かんだ。ほんの少しだけ青くなる。おそらく恥ずかしいんだろ
うな。

「じゃあ、フェイトさんはその開いている席に」

「はい」

どうやら俺の隣の席のようだ。転入したことがよほど楽しいんだろ
う、黄色を通り越して金色だ。

「よろしく、テストロッサさん」

「うん、よろしく」

でもって、この子にも質問の嵐。やっぱり困っているようだ。

「全く、お前らは学習しろよ？俺と同じことをテストロッサさんに
する気か？」

経験者としては、やはりこれはきついものだ。

「あ、ありがとう・・・」

「いいて、俺もこの前転校してきてな。同じ目にあったから」

「そうなんだ」

「俺は御崎剣也。剣也と呼んでくれ。でもってこっちが」

なのは、アリサ、すずかを紹介した。驚くべきことに、三人はすで
に知り合いだった。

授業でも、そこまで苦労はしていないようだった。外国人なのに、
日本語うまいなあ・・・

そんなもって昼休み、恒例という感じで屋上に向かう。もう道は覚
えた。

いつものメンバーに、テストロッサさんが加わり、少し賑やかにな
る。

「テストロッサさんて、日本語うまいよね」

「そ、そう？」

「うん。とても外国人とは思えないよ」

他愛もない話を、四人と繰り返した。平和、という言葉が一番似合
う空間だ。

その中で、俺の目のことも話す。話し終わると、やはり少し悲しい
ようだった。

話を変えるため、思ったことを話す。

「そう言えば、ふと思ったんだけど」

「なに、剣也君」

「なのははいつも桃色で、テストロッサさんはからだは金色なんだ
けど・・・今までこんなことはなかったんだ。なにか思い当ること
ってない？」

「うーん・・・」

「ない、かなあ」

「そうか」

やっぱり、この目にはまだわからないことがあるらしい。

「剣也、私のことも名前で呼んでくれないかな？」

「三人にも同じこと言われたな…ま、いいよ。改めてよろしく、フ
エイト」

「よろしく、剣也」

また一人、友達が増えた。

「ねえ、剣也君のあの話…」

「うん。おそらく、魔力の色がわかるんだと思う」

帰り道、フエイトとなのはが話していた。

「でも、本人は全く気付いてないんだよね」

「隣にいたから、少し調べてみたんだけど…」

一言区切って、もう一度口を開く。

「剣也は、SSSランクほどの魔力を持ってる」

「!？」

驚きの表情を浮かべるなのは。

「本当に…？」

「うん。初めて見たとき、私も驚いた。SSSなんてめったにないから…」

「本人は…」

「全く知らないと思う。わかっているなら念話がわかるはずだし」
気づいた瞬間、とっさに念話をしたが返答が無かったのである。

ただ返事をしなかった、ということもあるが。

「リンディさんの方には…」

「伝えてはみるけど、そのあとは分からない」

リンディ・ハラオウンは「アースラ」の艦長であり、二人の上官に
当たる。

「安全に、事が進めばいいんだけど…ね」

「うん」

二人の魔導士は、そのまま家へと帰った。

第五話：フェイト・テストロッサ（後書き）

剣也がついに魔力を持っていることがばれてしまいました。
そして何故変な風に見えてしまったのかも。
次は夢のお話です。

第六話：夢（前書き）

指摘されたので、自分度も注意はしてみたのですがやっぱり会話文が多くなってしまう。すみません。

読むかどうかは、読者の皆様にまかせます。
では本編をどうぞ。

第六話：夢

第六話・・・夢

「ごちそうさまでした」

「はい、ごちそうさま」

「さてと、風呂入って宿題して寝るか」

フェイトが転校した日の夜、俺は夕飯を終え、自室に向かった。

着替えとりに行くだけなんだけど、意外と苦勞する。

なぜなら、ものの形は見えても色がわからないからだ。

そのために、俺は普段着とねまき、その他もろもろの服を分けている。

で、いつものところから部屋着をとり、風呂に入った。

風呂は最初はあるのにとっても苦勞した。なんたつて目が見えないんだから。

今ではシャンプーやボディソープの上に点字が表示されているから便利なものだ。

「あゝきもちいい」

オヤジみたい？気にしないでくれ。

「闇の書の呪い、か」

図書館での一件を思い出す。ヴィータから言われたこと・・・正直に言えば、信じたくはない。俺と同じ年の子が、そんなわけのわからない力で殺されるなんて・・・許したくはない。

「何か、手伝えればいいんだけどね」

そう思っても、何もできやしない。リンカーコアの蒐集ができるのは一人一回らしく、これ以上はできないとのこと。

「いつても仕方ないか」

そして風呂からあがり、自室に戻って点字版とノート、教科書を取り出す。

さてやるかと思つた瞬間、この前と同じ感覚がおれを襲つた。

「また・・・かよ・・・」

確か、魔力があるものから魔力をとるって言つたな…

いくらはやてのためとはいえ、少しいやだな。

「気をつけて帰ってこいよ、ヴィータ」

傷つかず、笑顔でまた会えるようにと、祈りを込めて少し目をつぶつた。

所変わつて市街地。

ヴィータは魔導師と戦つていた。

「くそ…なかなかしぶといな」

攻撃自体にあまり威力はないのだが、的確に狙ってくる。

ちりも積もれば山となる…その攻撃は、少しずつだが体力を奪つていった。

「くつそ！」

また攻撃が飛んでくる。とそのとき、

暖かい光が、ヴィータを包んだ。

「え・・・？」

自分は何もしていない。おまけにサポート役のシャルモもない。

じゃあ誰が？

そう思っている間に、その攻撃ははじかれ、おまけに傷も回復した。

（怪我しないように、また笑つてあえるといいけど）

「この声・・・剣也！？」

ちなみに当人はこのことを全く知りません。

「ふっ、あいつにまた迷惑かけちまつたな」

少し笑うと、一気にスピードを上げて突っ込む。

「貴様、傷はどうした！」

「優しい誰かさんが、助けてくれたんだよおッ！」

見事にクリーンヒット。魔導師は倒れ、ヴィータはリンカーコアを蒐集した。

「止まった・・・か」

動悸が止まったので、戦闘が終わったことが分かる。

「なんか疲れたな…寝よ」

寝間着に着換えて、そのまま布団に入る。布団に入る瞬間一番力が抜けるのはなぜだろうか？

「おやすみなさ〜い」

眠っている中で、俺は夢を見た。

なにも見えない、真っ暗な空間、そこに一人だけ人がいた。その人が、俺に話しかけていた。

—— 助けて…

「っ！？」

—— 私と、騎士たちと、主を・・・

「あなたは、誰ですか？」

この夢でも感情は見えるのか、体が青色だった。今まで見たこともないほどに濃い。相当な悲しみを背負っていると見えた。

—— 私の、名前は——

「○○○○」

「え？」

聞き返す暇もなく、その人は消えてしまった。

「うーん・・・」

夢から覚め、目を開ける。寒いので、ゆっくりと布団から出ていく。

「誰だったんだろ、あの人」

「おーい剣也！ごはんできたぞー！」

「今行くー！」

今は、気にしないことにする。朝から夢なんかで悩んでられるか。

でもって学校。夢のことが気になって、どうしてもぼーっとしてしまっ

もう昼時だ。朝は平気だったのだが、時間がたつとやはり気になるもので。

（――助けて）

（私と、騎士たちと、主を・・・）

何度も繰り返す、その言葉。ずっと心の中に残っている。

（なーんか、気になるんだよな）

ハキンコーンカーンコーン

そうこうしているうちに授業は終わる。ちゃんとノートは取ってたよ？

「飯にしよう」

今日は自分で作った弁当だ。昨日のうちに作っておき、冷蔵庫に保存。あとは弁当箱に入れるだけだ。

「屋上屋上つと・・・」

初めて友達ができた日から、いつの間にか弁当は屋上で食べるようになった。

「あれ、なんかいつもと違うわね」

「今日は自分で作ったからね」

「剣也君、お料理もできるんだ…すごいね」

「私は全然だよ」

「家事は基本できるかな。掃除、洗濯、料理なら簡単だ。とはいっても母さんに手伝ってもらっけど」

「……へ……」

四人が感嘆の声を漏らす。こんな体で家事ができると行ったら、そりゃ驚くよね。

そんな声を聞きながらも、夢の事が気になってしまっ俺。

「はあ・・・」

「どうしたの？」

「いや、夢のこと考えてただけ」

「夢？」

「ちょっと聞かせてくれるかな？」

「私も聞きたいわ」

「わたしもー！」

「わたしも、かな」

「・・・くれぐれも夢だからな？」

そして、夢のことを話した。終わると、四人とも不思議だという顔をした。

「助けて、ねえ…」

「私と、騎士と、主って、何かの物語かな？」

「名前がわからないと、何かわからないよお…」

「でも、何かありそうだよね」

「夢だから、気にしなくてもいいさ」

これは自分の問題の様なものだ。やはり自分で考えなくては。そのまま時間は過ぎ、学校は終わった。

第六話：夢（後書き）

どうだったでしょうか？

会話文が多いのはやはり自分の癖といいますが、注意しようとは思っているのですが…

感想、お待ちしております。

第七話：剣の将と湖の騎士（前書き）

今回は剣也が初めてヴィータ以外の騎士と接触します。

そして、なぜなのはたちの色が違うのかのわけ、その理由とは・・・？

会話文が多くなってしまふのはご了承ください。

これからもうこういう風に会話が多いと思います。

読みづらいとは思いますが…すみません。

第七話：剣の将と湖の騎士

第六話・・・剣の将と湖の騎士

「はやて、いるかな？」

あの変な夢を見た週の日曜、俺はまた図書館へと足を運んだ。

一回行ったので、もう道は分かる。

少し探すと、少し銀色に染まった姿があった。

「はやて」

「あ、剣也君。お久しぶりやな」

「ああ。学校のこととかでちよつとね」

少し話していると、近づいてくる足音がした。

「はやてちゃん、ここにいたんですか？」

「あ、シャルマル」

そこには、緑色をした人がいた。緑？今まで見たことのないタイプだ。

「君が剣也君？」

「はい、そうです」

「はやてちゃんとヴィータちゃんから話は聞いてるわ。体、不自由なんですか？」

「ええ、まあ・・・」

それから、俺の目について話す。反応は他の人と変わらないようだった。

「それはまた・・・大変ね」

「もう慣れましたけどね。シャルマルさん、でしたっけ。これからよろしく願います」

「ええ、こちらこそ」

握手を交わす。その後、俺はまた本を読み、はやてと話し、これといってまあ特に何も無い時間を過ごした。ふと時計を見ると、五時を指していた。

「もう五時だし、そろそろ帰るよ」

「あら、もう五時か」

「そろそろ帰らんなあ、シャルル」

「ですねえ」

もう冬だし、日が暮れるのは早い。さつさと帰らないと。

「シグナムも外で待ってるみたいです」

「シグナム？」

「私たちの家族の一人です」

ということは、ヴィータとは別の騎士か。ということはシャルルさんもだな。

大変だな、はやても。

「そうなんや。ヴィータは？」

「家でお留守番だそうですよ」

「ザフィーラがおるから、大丈夫やと思うけどなあ」

「ザフィーラって？」

「私の家で飼ってる狼や」

「・・・そんなもの飼ってて大丈夫か？」

「大丈夫や、問題あらへん。おとなしいし、優しいし」

なら、大丈夫だろう。なんかしろい金髪の人が頭に浮かんだけどさ。外に出ると、紫色をした人が立っていた。

今日は見たことない色の人が二人か・・・不思議なものだ。

「お前が、御崎剣也か？」

「はい、シグナムさん。名前は先程はやてから聞きました」

「目が見えないそうだな・・・苦労しているんだろう？」

「もう慣れましたから。それにしても・・・」

「？」

「自分の目のことはすでに知っているとありますが、シャルルさんは緑色で、シグナムさんは紫色なんです。なんででしょうね？」

「わからないな。お前の眼の事だから・・・」

「ですよ」

やっぱり、調べてみるべきなんだろう。

ちなみに、なぜおれが色のことを知っているかというと・・・
徹底的に、調べられたからです、はい。

こんな目は初めてということ、三歳ぐらいの時にいろいろな大学で調べられたんだよね。

実際にはそのことを覚えていなくて、両親から教えてもらった。

当時の俺よく耐えたな、えらいぞー。

「少し、時間はあるか？」

「ありますけど、少しだけですよ？」

シグナムさんに連れられ、俺はまた図書館に入る。

この人の雰囲気…重いな。修羅場をくぐってきたというか、なんというか…

「先程の話・・・おそらく、お前には人の「魔力光」が見えているのだと思う」

「魔力光って？」

「魔力の光とでもいったところか。現に、言った色はまさに私たちの魔力光と同じだ」

「そうですか・・・」

と、言うことは・・・まさか！？いや、うそだろう。そう信じなければおかしくなるぞ、俺が。

「一つの考えとして参考にします」

「わかった」

そして、俺ははやてたちと別れた。

一つの不安を抱えながら…その不安とは、

なのはとフェイトが、魔法使いであるということ――

第七話：剣の将と湖の騎士（後書き）

魔力光が見えてしまうことが判明？まだ確認はできていない剣也。
これから一気に舞台は佳境に繋がっていきます。

闇の書の運命、主人公は一体どうなるのか？

次回は剣也、切れます。

第八話：漆黒の夢と最悪の事実（前書き）

今回は後半少しシリアスパートになります。

友達が人形という悲しい夢。

そして、友達の事実。

悲しい事実を受け入れることができるのか？

そして、あの推測が現実のものに…

第八話：漆黒の夢と最悪の事実

第八話・・・漆黒の夢と最悪の事実

「また夢か…」

俺はまた夢の中にいた。今回は前回と違い、何も見えない。少し耳を澄ますと、少しずつ声が聞こえてきた。

「その子は…フェイトは、私の娘なんかじゃないわ」

（フェイトの・・・母親？）

「私が作り出した私の命令を、聞くだけしかできないただのお人形」
「やめてよ！」

（この声は、なのは？そして、人形って・・・）

「せつかくアリシアの記憶をあげたのに、あの子はすべてがだめだった」

（アリシア？）

「あの子はアリシアの偽物でただの失敗作。だから・・・」

「もうやめてえ！」

「その子は、もういないわ」

その声とともに、夢は終わった。

飛び上がるように布団から出る。

「なんつー夢だよ・・・」

友達が実は人形でしたーなんて、最低だろ・・・

頭も少し痛い。精神的にもきつい夢だ。

「ま、そんなことあるわけないしな」

所詮夢である。そんなことは気にしないに限る。

「剣也ー！ごはんよー！」

「今行くー！」

いつもの朝は、全く変わらなかった。

「なあ、フエイト」

「なに、剣也」

「いきなり友達が人形でしたー、なんて言われたら、どうする？」

「わからないなあ。そんなこと全くないし、想像もしたことないし

…」

「だよね」

夢の中に出てきた人に聞くのもどうかと思ったのだが、とりあえず聞いてみた。

「で、なんでそんなこと聞いたの？」

「夢にさ、フエイトが出てきたんだよ。それで、人形ってフエイトが言われてた。

いやな夢だったぞ」

「そう、なんだ・・・」

少しうつむくフエイト。体も少し青くなる。

夢とはいえ、こんなこと言われるのはつらいよな、普通。

「気にしないでいいって。夢だぜ、夢」

「そうだよね」

少し、桃色が混じった。だが・・・

（お前には、魔力光が見えている…）

フエイトの体は、いつもと変わらない金色だった。

昼休み。だがぼーっとしてしまい、すぐに飯は食べなかった。

「剣也君？」

「・・・」

「おい、剣也ー？」

「・・・」

「ふうー」

「にゃーーーーー！？」

いきなり耳に息をかけられたので、素っ頓狂な声をあげてしまった。

「あはははは！何よその声！」

「いきなりやられたらこうなるわ！おまけにフェイト、何でやったんだ！」

「えーと、アリサにお願いされて」

「ったく・・・」

「珍しいわね。あんたがぼーつとするなんて」

「気まぐれだ。気にしなくていい」

そのまま、いつもと変わらない昼食を終えた。

でもって放課後。俺はなのはに呼ばれた。

「あの、剣也君？」

「どうした、なのは」

「ちよつと、付き合ってほしいんだけど...いいかな？」

「別にかまわないが、どうした？」

「会わせたい人がいるの」

はて、誰だろう。そのまま、なのはについていった。帰り道が一緒だというので、フェイトもいた。

そのまま、なのはに連れて行かれたのはとある建物。

「ここに住んでるんだ、私」

なるほどね。つまりマンションかなんかだろう。高いからな、これ。

「リンディさん、連れてきました」

「あ、なのはさん」

奥から人が出てきた。少し緑色っぽい人だ。

「あなたが剣也君？」

「そうですか、一体自分に何の用ですか？」

「私の名前はリンディ・ハラウン。話は中でするわ」
いわれたので、中に入る。

中は暖房が利いていたし、暖かった。

ソファーに座り、話を聞く。

「じゃ、話を始めるけど・・・大丈夫？」

「なにがですか？」

「これからの話は、あなたのすべてを変えるかもしれない、それでも聞く？」

「連れてこられて、こんな状況ならいやがおうにも聞きますけど」「周りの空気は、少しピリツとしか感じがした。

「なら、話しましょうか。では最初に、あなたは「闇の書」というものを知っていますか？」

「知りませんけど」

「その闇の書というものは、ものすごく危険なものなんです」

「何か開くととてもなくやばいものが出てくるとか、そんなものですか？」

「そんな感じではないのだけれど、危険なのは確か」

「はあ・・・」

そんなことは、ヴィータは話していなかった。

「そして、その本には『守護騎士プログラム』というものが入っています」

「防衛システムみたいですね」

「近いわね。では本題です・・・あなたは、その「闇の書」の持ち主ですか？」

「知らない本を持っているかどうかを聞くのは、変じゃないですかね」

「じゃあ、なぜその守護騎士のヴィータという人と親しいんですか？」

「何かが引つ掛かる。確かさっき・・・」

（守護騎士プログラム…ってことは）

「人の友達を、プログラム呼ばわりされるのは気に食わないんですがね」

「友達？」

「ええ。図書館で知り合いましたが」

友達になったのは、まぎれもなくあの図書館。忘れやしないさ。

「じゃあ、少し話を変えます。あなたは魔法というものを信じますか？」

「ふざけているんですか？ここは絵本の中じゃないですよ？」

「確かに、ここは本の中じゃないですが、実際にあるんです」

「見せてもらえなければわからないんですが」

「・・・なのはさん、お願いできる？」

「ごめん、剣也君」

一言謝られた、なぜ？

と思った直後、右手に桃色の輪がついた。鉄のように硬く、簡単には取れそうにない。

「ッ、いきなり何を！」

「ごめんなさい。実際にやらなければわからないと思ったんです。目のことは、既に聞いていますから」

「乱暴すぎやしないか、これ」

でもって、ごめんといったなのは…

「黙っててごめんね、剣也君」

「こんな力あるの、そう簡単に言えるわけあるか。俺でも言わないぞ」

右手の拘束感は解けた。

「その闇の書は、魔法でできたものなんです」

「信じますが、それがいったいどうしたんですか？」

「あなたには、高い魔力があることが分かっています」

「ウィータから聞いてはいたけど、やっぱりわかるんだ」

「SSランク、普通ではありえない数値です。それだからこそ、あなたに疑いがあるんです」

「持っていないと言ってるでしょ？」

俺は席を立つ。

「どこに行くんですか？」

「帰ります。聞けば聞くほど頭にきますから」

玄関に向かう。だが、見えない壁に阻まれる。

「意地でも出さないってわけか。おとなげないねえ」

「こちら、事情がありますから」

「・・・ふざけてやがる。」

「大人の事情なんか、知ったことはないんだが。第一、俺がなんでヴィータと親しいことを知っている？」

「そ、それは・・・」

「あなたがどんな組織かは知らないが、少なくともこの世界のもんじゃないことぐらいわかる。なら、こっちの法つてもものにしたがつてもらわなければ、話が通らない」

「それはそうですが、こっちにも抱えてるものがありますから」

「抱えてるもののためには、なんでもするってか・・・信じられん」

「この世界が、失われるかもしれないですよ!？」

「だとしても、俺は納得いかない。ヴィータがプログラム？ふざけんな」

いつの間にか、俺は感情のままに話していた。言葉づかいも荒くなる。

「私にも、時空管理局としての責任と、正義がありますから」

「そんなもの・・・俺は全力で否定する」

それをまさに現すかの如く、俺は全力でその壁を殴る。・・・堅い。拳全体にしびれがある。

「簡単には、壊れませんよ?」

その言葉は、嘘ではないだろう。言葉に含まれている感情：それでわかる。

リンディという人の体は、少し赤くなっていた。

「剣也君、正直に言ってくれない? 私たちなら、その闇の書を救えるかもしれないから」

「・・・信じていいのか。大人の都合だけで、自分たちの正義のために動く組織を」

「私にはわからないよ。だけど、リンディさんは信じられるから」
こついうやつだったな、なのはは。まだ出会ってから少ししかたっ

ていないが、自分の思いは最後まで貫き通す精神というものは、感じていた。

「悪いが、俺にも抱えてるものがある。あんたたちのことが本当に信じられるようになったら、もう一度来る」

さっき破れなかった壁。それを壊すようなイメージをする。

大きな力、ふざけている正義を、吹き飛ばす力・・・

「せいっ！」

正拳突き。壊すまでにはいかないと思ってはいたが...

ピシッ！

という音とともに、ひびが入った。

「もう、一撃・・・」

こぶしに、鈍い痛みが走る。血が出たか？

「また、撃つ気...？」

「駄目だよ剣也君！そんなことしちゃ・・・」

「言っておいてやるよ。男には、絶対に負けられない瞬間があるって」

同じところを、さっきと同じぐらいの力で殴る。すると...

ガラスが割れるかのように、壁が砕けた。

その先には、フェイトの姿があった。

「え、剣也...その手は？」

「悪いフェイト、また明日な」

入ってきた玄関をくぐり、学校に向かう。そうでなければ家に向かう道がわからないからだ。

その道で、俺は涙を流した。

受け入れたくない事実を、受け止められないままに...

第八話：漆黒の夢と最悪の事実（後書き）

剣也の目が、魔力光を判断できることが判明しました。
それにしてもリンディさんのランクがSなのに、それを壊してしま
う主人公って…自分でも少しやりすぎた感があります。
次回は自宅に思わぬ人物が、そして一つの提案をします。
それにより、事件はどういった方向に向かうのか…
次回をお楽しみください。

P・S：主人公設定少し変えました。

第九話：まさかの来訪者（前書き）

リンディからの報告、それによって剣也の心は大きく揺れる。
事実を受け入れたくなくて、全力で走る。

これからどのように変わっていくのか——
本編をどうぞ。

第九話：まさかの来訪者

第九話・・・まさかの来訪者

「・・・ただいま」

「お帰り、剣也・・・ってどうしたのこの手！」

「少し、転んだ」

「すぐに手当てしなきゃ。ちょっと待っててね」

とりあえず、いすに座る。まだ、気持ちの整理はついていないが・

・

「ちょっとしみるかもしれないけど、我慢してね」

「っ・・・」

消毒液が傷に染みる、傷が深いんだろうな。

それにしても、プログラムか…パソコンとかと同じなら、プログラムの変更で人間にできたりとか、そのバグの消去とかできないのだろうか。

「ガーゼをして、包帯を巻いて・・・これで良しと」

「ありがとう、母さん」

「どういたしまして。それほど痛かったのね」

「なんで？」

「なんでって、剣也泣いてるから」

「あ・・・」

すっかり忘れていた。自分が泣いていることに気づかず、家に入っただのだ。

「ふふっ、まだまだ子供ねえ」

「からかわないでよ」

そのまま、階段を上がって自室に入る。

「はあ・・・」

こぶしは、まだ少し痛む。まさか壊れるとは思っていなかったから

な…

（シグナムさんの推測は、おそらくあたりだろうな）

と、言うことはフェイトも魔法使いということになる。はやてもその可能性が高い。

まあ、闇の書の主だしな。

「俺は、これからどうすればいいんだ…」

ベッドにうつ伏せになる。

グイータ達守護騎士が、人間ではなくプログラムなんて、信じたくはない。

楽しく笑い、話していたあの姿が、すべて作り物だった、なんてな…

「くそ・・・」

もし、プログラムということを変える力があつたらと思うと、俺は悔しくなった。

力のない自分を呪った。そうすると、また涙が出てくる。

（助けてくれ、私と、主と、守護騎士を・・・）

夢に出てきた、あの人。

「助けられねえな…」

ぼつりとつぶやく。すると、ドアからノックがした。

「どなたですかー」

「あの、剣也？フェイトだけど・・・」

「っ!？」

まさか、フェイトが来るなんて思ってもみなかったのだ。

「剣也が女のこと友達とはねえ。母さん知らなかったわ」

「とりあえず入れてくれよ、立たせとくのも悪いから」

フェイトを部屋に入れる。母さんは飲み物とお茶菓子を持ってきていた。

「じゃ、ごゆっくり」

部屋から出て行き、階段から降りたのを確認すると、とりあえず聞いた。

「なんで、俺の家がわかったんだ？」

「魔力の波長でわかったんだ。あんな高い魔力は、なかなか見ないから」

「なるほどね・・・」

何でもありだな、魔法って。

「気づいてると思うけど、私も魔法使い」

「やっとわかったよ、フェイトとなのはがいつも同じ色のわけがな」
飲み物を飲み、少し気持ちを落ち着ける。じゃあ、聞くか…

「その調子なら、もうあの二人から話を聞いてると思うんだが・・・」
フェイトはどうなんだ？」

「私も、あの人たちを救いたいって気持ちは変わらないよ」

「・・・そっか」

静寂の空間。こんな空気じゃ、あまり話したくはない。

「剣也は、シグナム達とかと会ったことはあるの？」

「シグナムっていう人と話をしたことはあるが、そっちが知っているシグナムかどうかは知らん」

「じゃあ「特徴とか言っても無駄だぞ。俺形しかわからんから」そう・・・」

実際そうなんだから仕方がない。特徴は？と聞かれてもこう答えるしかないのだ。

「そっちは、『守護騎士プログラム』ってもんを救いたいって言うてたよな」

「もちろんだよ。その主もだけど」

「じゃあ、少し提案なんだが、聞いてもらってもいいか？」

「いいけど」

帰って、治療をしている間少し考えたことを言った。

「うーん・・・話してみないとわからないかな」

「そっちの組織を信用したわけじゃない。ただ魔法ならそっちの技術が使えると踏んだだけだ」

「これができれば、信用してくれるかな？」

「本気で助けるつもりがあるのなら、の話だが」

「わかった」

フェイトは、そのまま家を後にした。

「送っていかなくていいの？もう外も暗いし」

「大丈夫です。突然おじゃましてすみませんでした」

「平気よ。また遊びに来てね」

外は、もう薄暗くなっていた。

（剣也の言っていたこと、もしそれが実現すれば・・・）

剣也が提示した提案。それはこういうものだった。

”もしプログラムならば、バグのプログラムだけを除いて正常に戻せるのでないか”

ということ。

パソコンとかと同じなら通用するかもしれないが、魔法が相手ならさっぱり分からない。

これが剣也の案だった。

「実現すれば、戦いなんかしなくてもあの人たちを救える」
とりあえず、リンディさんに報告しないとな。

その夜、俺はまた夢を見た。

「またか・・・今度は何だ？」

今回はいつもの目だ。形しかわからない目。

「君は、もう病気なんだ・・・」

「もう、治らないんだよ？」

（この声は、なのはとフェイトか？）

だが、一瞬で違うとわかる。体の色が違うからだ。

「壊れちゃったものは、もう戻らないよね」

「ヴィータを・・・返してえッ！」

（はやてもいるのか？）

偽物？の二人の間には、いつも見る赤い少女…ヴィータがいた。
「だから…消えなくちゃ」

（っ！？）

ヴィータが…消える？

そして、うつすらと色が消えていく。

（うそ…だろ？）

「やめてえっ！」

悲痛な声が響く、しかし、その願いは届くことなく…

ヴィータは、消えてしまった。

「…！」

飛ぶように起き上がる。そして、夢ということに気づく。

「・・・ねよ」

そしてまた、俺は眠りについた。

第九話：まさかの来訪者（後書き）

フエイトに託した一つの案。それは闇の書をどう変えていくのか。次回は受け入れるべき事実との出会い。

それを受け入れ、前に進むことができるのか？
次回をお楽しみに…

第十話：受け止めるべき事実（前書き）

今回はヴィータとお話。

先日のリンディの話にあった「守護騎士プログラム」という言葉。その真意を問うために、剣也は図書館に向かう。果たしてのその事実は嘘か、真実か――

第十話：受け止めるべき事実

第十話・・・受け止めるべき事実

「あの、剣也？」

「昨日のことについては話さないぞ。あくまで提案だから・・・まだそっちを信用しきったわけじゃない」

「そ、そう。でも、アイデアくれてありがとね」

翌日、フェイトがいきなり話しかけてきた。

昨日の案を話してみたところ、ロストログアが相手だからわからない、そんなことが通用するかはやってみなければわからないといったところ。

「もう授業始まるぞ、準備しとかないと」

「あ、そうだね」

そう言つて、自分の席に戻るフェイト。あんなまっすぐな子が魔法使いとはねえ。

この世には、まだわからないことがたくさんあるらしい。

でもって昼休み。俺は一人で食べたいと言つたのだが、アリサに引きずられるように屋上に向かった、というか向かわされた。

「時々、アリサが女に見えなくなるんだが・・・」

「なにかいった？」

「イイエ、ナンニモ」

いつものメンバーで食べるんだが・・・まあ食べづらい食べづらい。昨日あんなことがあつて今日である、しゃべる気にならない。

「なのはちゃんとフェイトちゃん、剣也君何かあつたの？」

「・・・なんにもないよー」

そろつたように話す。おまけに棒読みだ。

そんな空気のまま、昼は過ぎて行つた。

そして放課後、俺はまた図書館に行っていた。

「よ、はやて」

「剣也君」

「ヴィータは？」

「どっかにいるとはおもうけど、わからんなあ」

「そうか」

図書館の中を探す。あの赤い姿なら簡単に見つかる。

「あれ、剣也？」

「よう、ヴィータ。少しいいか？」

「いいけど、どうかしたのか？」

「聞きたいことがある」

外に出て、話し始めた。少し肌寒い。

「昨日、時空管理局とかいうところの人に会った」

「ほんとか！？」

「で、こんなことを言われた。『守護騎士プログラム』って・・・

正直に答えてくれ。ヴィータは、人間じゃないのか？」

「・・・」

その無言の返答で、俺はすべてを理解した。

ヴィータ、そして守護騎士は、人間ではないんだということを。

「今まで、黙っててごめん。傷つけたくなかったんだよ、優しいお

前を」

「・・・なんで」

「え？」

「なんで最初に言ってくれなかったんだよ！言ってくれば、俺は

こんな気持ちにならなくてすんだのにつ！」

「・・・」

「人じゃない？それがどうしたよ！お前は『ヴィータ』っていう一

人の人物だろ！」

思いのたけをぶつけるように、言葉が出た。

「今まで明るく話してくれたお前が作りもんなんて、信じたくねえ

んだよ・・・」

「ごめん・・・剣也」

「なんで、なんでなんだよ・・・」

地面に崩れ落ちる。目からは涙がとめどなくあふれ、嗚咽が漏れる。そつと、誰かが頭をなでってくれるような感触があった。

「許してくれ、剣也。私たちも、お前の気持ちを踏みにじるようなまねはしたくなかったんだ」

「シグナム・・・さん」

腕には、紫色の光がともっている。見間違えることはない。

「偶然通りかかってな・・・泣き崩れているお前を見て、何事かと来てみたんだが・・・」

「もう、わかったことですから」

「そうか」

まだ心臓はバクバク言っているが、立ち上がる。涙をぬぐい、正面を見る。

今はしっかりと前を見よう、事実は事実。それでも、俺はヴィータとは友達だから。

「闇の書って、あとどのくらいで完成します？」

「あとわずかだな。年内には完成しそうだ」

「じゃあ、少し話を聞いてくれますか」

この前、リンディさんから言われたことを話す。このままでは、この世界が滅びる可能性があることを。今まで、いくつも世界が滅んだことを。まあ少しフェイトからも聞いたんだが・・・

「今まで、知らなかったんですか？」

「知らないな。もしかしたら、記憶が飛んでいるのかもしれないが・・・」

「世界が滅んじやったら、はやてもろとも消えちゃうじゃんか！」

「こつちだつてまだ信じられないけど・・・あつちはある提案をしているんです」

あのプログラム改変の案を、二人にも話した。

唾を飲み込んだような音がわずかに聞こえた。実現すれば最高の終わり方だからな。

「実現すれば、全員まとめて救うことができる。だから、少し待っててくれますか？」

「考えておく」

その日は、はやてとほとんど話すことなく帰った。

まだ、頬には涙が流れた感触が残っていた。

第十話：受け止めるべき事実（後書き）

剣也大号泣の巻、いかがだったでしょうか？

今回の話は結構悩みました。事実をしつかりと受け入れて、再び前を向ける少年の姿を描くのは少し難しく、書いてみたはいいがうまく表現ができなかったりと…

さて、少しお知らせです。土曜日からテスト前ということで、更新を一時ストップします。明日連続で投稿を行ったのち、2月10日くらいまでストップします。

読んでいただいてる皆様には申し訳ないのですが、集中しなければ…とてもやばいです。

ご理解のほど、よろしく願います。

第十一話：その運命を変えられるなら（前書き）

衝撃の事実を受け入れ、前に進むことを決めた剣也。

そしてクリスマス前日、剣也は今まだ自分がしてきたことを両親に告げ、さらにこれから何をするかを宣言する。

悲しい連鎖を、運命を、断ち切るために。

第十一話：その運命を変えられるなら

第十一話・・・その運命を変えられるなら

あの衝撃の事実から少したち…明日はクリスマスという日である。
もう学校は冬休み。俺もゆっくりできるわけだが…

こんなときにも変な夢が来る。

「・・・こんにちは」

「もう夜なんだけどな、こっちは」

前前回と同じく、形しかわからない。

「私の名前は、『アルトリア・ウィーゼル』・・・闇の書、いや『
夜天の書』を作った本人です」

「はあ・・・」

「あなたは依然、夜天の書の管制人格と会っています」

「自分に「助けて」といった人？」

「そうです。それで、あなたにお願いがあるのです」

「お願いとは？」

「夜天の書を、元の姿に戻してほしいのです」

それから、俺はなぜ夜天の書が闇の書になってしまったかの経緯を
聞いた。

何でも、時代を経ていくにつれてプログラムが書きかえられ、今の
ような状態になってしまったということである。

「・・・どうやったら戻せる」

「これを渡します」

すると、俺の目の前に腕輪が現れる。その腕輪だけははっきり見え、
中心に変なマークが刻まれている。

「あなたなら、この力を使いこなせるはずです。だから・・・」

「わかりました。その依頼、受けましょう」

誰かを助けられる力があるんなら…受けてやらない義理はない。

「じゃあ、頼みましたよ」

そして、夢から覚めた。

「まあ、夢なんだよね」

ベッドから出て、机を見ると…

「・・・夢じゃなかったのかよ」

あの腕輪が置いてあった。おまけにはつきりと見える。

「ここにちは」

「しゃべったあ!？」

なんということか、その腕輪は話し始めた。

「あの方からあなたに贈られたデバイスです。名は「ネクサス」」

「はあ」

もう魔法とかそういうたぐいのものにはあまり驚かない。

いきなりしゃべりだせばそれは驚くけどさ…

「ウィーゼル様から「これからとてつもなく大きな闇が迫るから、注意するように」と」

「やばいことが起こる、ってことか…」

それは嫌だ。絶対にさせるわけにはいかない。

思い出がたくさんできたこの場所を、傷つけたくなんて無い。

なにかあるかわからないので、一応腕輪をはめて、下に降りる。さて、これから俺が何をするかを話さないとな・・・

「今日は休みも撮ったし、準備にはしっかり付き合えるな」

「そうね、父さん」

「あのー、お話のところ悪いんだけど・・・」

「「?」」

「少し、話してもいいかな」

もう、振り返ることなんてしない。

自分で決めたこと。夜天の書の悲惨な運命を、壊すために…

そして、俺は両親に今まであったことを話した。

「まさか、そんなことが…」

「今まで黙ってごめん。正直、信じてもらえないと思ってさ」

「未だに、信じがたいが… 真実なんだよな、剣也」

「うん」

「そうか・・・」

「で、これからが本題」

そして、一番話したかったことを切りだす。

それは、

夜天の書を元に戻すために、俺の体が必要ってこと――

あの案を出してあら一週間したある日、俺はフェイトに「この前の家に来てくれる？」と連絡された。どうやらこの前の案について話したいことがあるらしい。

案を出したのは自分なので、仕方ないが行くことになった。またあの人に会うかと思うと、気が沈むのだが。

「誰かの体がいる？」

「そうなの。たとえばプログラムを抽出したとしても、それが落ち着ける場所が人の体しかなくて・・・」

「そうか・・・」

やはり普通のプログラムではなかったらしく、このような結果となつてしまった。というかよくわかったな、調べてすらいらないのに。ちなみに俺は敬語は使っていない。こんな人たちに敬語なんて使つてられるか。あつちは気にしてないようだし。

あつちのほうでも悩んでいるそうだ。ふと、俺は思った。

「それって、例えば俺とかでも行けたりするの？」

「それはできると思うけど。もとから魔力値が高いあなたですから・

・・・」

「なら、俺の体を使ってくれ」

「正気？」

「もちろんだ。なのはやフェイトには任せられないだろう」

「だからって、あなたが背負うことじゃないわ」

「こういうことだからこそ、俺がやるべきなんだよ。まだ光を見れる二人には、こんな重みを背負うべきじゃない」

「・・・そう」

「だから、やらせてくれ」

無言が、空間を満たした。

「あなたが、そこまで言うのなら」

「感謝する」

「でも、両親にはちゃんと連絡してね？」

「わかってるよ」

「・・・」

「勝手に決めて、悪いとは思ってる。だけど、これがおれの決めた道だから」

「剣也、本気なんだな」

「はい」

「途中で、投げ出すことはないんだな？」

「もう、決めてるから」

「なら、行つて来い」

「あなた!？」

「ここまで真剣な顔は、見たことが無い。それほどまでに救いたいたいんだろ？」

「当然。曲げる気なんて毛頭ない」

「もう、剣也つたら・・・」

母さんはあきれていたが、すぐに俺を抱きしめた。

「必ず、元気に帰ってくるのよ」

「わかってる」

「クリスマスに、剣也の悲しい顔なんて見たくないから」

「元気に帰ってくるから、心配しないでくれ」

そして、俺はリンディさんの元へと向かった。

かなしい運命を、ぶち壊すために――

第十一話：その運命を変えられるなら（後書き）

明日からテスト前なので投稿を一時ストップします。
集中しなければ・・・数学と英語と物理が大変です。
すみませんが、テストが終わるまでご了承ください。

第十二話：俺自身の正義（前書き）

両親に自分のすることを伝え、リンディの元に走る剣也。

そして、ある人に会ってほしいと頼まれる。そこで明かされる、闇の書のこととは・・・？

話もついにクライマックス！最後までお付き合いしてくださいとうれしいです。

第十二話：俺自身の正義

第十二話・・・俺自身の正義

「両親から、許可は取ってきた」

「そう、大丈夫だった？」

「笑顔で帰って来いって言われたよ」

「いい両親ね。今度会ってみたいわ」

「歓迎する」

「それで、あなたには一度会ってほしい人がいるの」

「誰だ？」

「私たちの上官に当たる、ギル・グレアム提督よ」

「わかった」

そのまま、俺とリンディさんはその人のところに向かった。

転送ポート、というものを使うらしい。魔法って便利だねえ。

入った部屋は、少し空気が重かった。

「初めまして、かな」

「初めまして、御崎剣也です。なのはさんとフェイトさんとは、友達という関係です」

「そこまで堅苦しくなくていい。まあ座りたまえ」

「失礼します」

ソファに座る。感触からして、高いんだろう。

「リンディ君、少し席をはずしてくれるかな」

「了解しました」

ドアが開く音がして、二人だけになる。ピリツとした感じだ。

「まずは、君に謝らないといけないな」

「なぜです？」

「君は、八神はやたと親しいのだろう？」

「ええ。もう友達ですね」

「あの子を、闇の書の主にしたのは…この私だ」
「っ」

それから、なぜはやてが主になってしまったかを聞いた。
そして、なぜこのようなことをしたのかも。それは、リンディさんの夫であるクライド・ハラウンが闇の書によってなくなったことの責任だった。闇の書に取り込まれてしまった船を、自分が撃つたということだった。

「あの子には、家族がいなかった。一人ならば、そこまだ悲しむこととはないと踏んだんだ」

「・・・」

「だが、あの子は守護騎士を家族のように扱い、君とも親しくなった。その姿を見るうちに、私は後悔したよ。『私はなんということをしてしまったのだろう』とね」

「・・・話は、それで終わりですか」

いつの間にか、俺はこぶしを握りしめていた。

「ああ」

「最初に言っておきます、無礼なことをして、すみません」

そして、立ち上がってこぶしを構え…

グレアムさんの顔を殴った。ためらいなんて無い。

「があっ！」

「あんたは…はやてを自分の都合だけで利用したってのか。ふざけるんじゃない！」

「仕方…なかったんだ。私たちの正義のために」

「正義だと？幼い少女を犠牲にするのが正義だというのか、あんたたちは！」

「・・・」

「そんなもの、俺は信じない。もしそれが本気なら、俺はあんたたちを絶対に許さない」

「・・・なら、君の正義とは何なんだ？」

「・・・俺が信じる正義なんて、自分だけです。言ってみれば・・・」

・俺が正義です」

「そうか。ふふっ、君のような若者は初めてだよ。ここまで自分の気持ちをはっきり伝えてくれるのはね」

突然、アラームが鳴り響いた。なにがあった？

「グレーム提督、闇の書の起動を確認しました！」

「なんだと！」

「おい、これもあんたが仕向けたことなのか！？」

「いや、私はやっていない・・・なら誰が？」

俺はドアのもとに走る。

「どこに行く気だい？」

「止めてくる、その闇の書とやらを」

「無茶だ！あれは簡単に止まるものじゃない！」

「「簡単には」でしょ？なら難しいやり方でも、絶対に止めてくる」

そして、俺は部屋を後にする。

「リンディさん！」

「剣也君！大変なの、闇の書が・・・」

相当あわてているようだ。無理もないだろうな...

「起動したんだろう？急いで向かう」

「本気！？」

「ええ。それに、頼まれてるんだよ」

腕輪を見せる。そして笑う。

「夜天の書を、元の姿に戻してくれってな」

第十二話：俺自身の正義（後書き）

お久しぶりです！テストは疲れました・・・

いよいよ話も終わりに近づいてきました。更新スピードも一気にあげていきたいところです。

感想を下さった方、ありがとうございます。誤字脱字は気をつけたと思います・・・

では、また更新するときに。

第十三話：守りたいという願い（前書き）

提督に自分の正義を伝え、海鳴市へと向かう剣也。
闇の書は既に起動。その闇を救うことができるのか？

初めての連日投稿です。では本編をどうぞ。

第十三話：守りたいという願い

第十三話・・・守りたいという願い

転送ポートを使わせてもらい、海鳴市に戻る。すると・・・

「ぐあっ！」

結界内に入った時の動悸が、今度は衝撃となって体に襲いかかった。

「やばいな・・・」

ものすごくやばい、というのは肌で感じた。辺りに人は一人もおらず、空気も気持ちが悪い。

「誰か人がいればいいんだけど・・・」

とにもかかわらず、俺は人を探して走りだした。

10分後・・・

「あれ、あの姿って・・・」

「剣也！こっちこっち！」

「その声は・・・アリサ！そっちはすすずかか？」

「うん」

声が聞こえたほうに向かうとアリサとすすずかがいた。どうやら無事だ。

よかった・・・人がいて安心した。おまけに知り合いとは運がいい。

「一体あたりはどうなってる？人がいないのは分かるんだが」

「空が変な色になって、遠くでは何かが光ってて」

「さっきから空気がやばいっていうか、おかしい感じで」

「そうか・・・」

これはおそらく闇の書の影響だろう。一体誰が起動させた？

一番考えられるのははやてだ。主はあいつだからな。だが、なぜこんなことをしたのかの説明がつかん。

それ以外なら守護騎士ということになるが、それも怪しい。

つまり、第三者の影響で起動させられたことになる。

「くそが・・・」

頭に思いついたのは管理局だった。さっきの提督とやらは知らないと言っていたが、嘘をついている可能性もある。

「とりあえずここから離れるか。すまないけど連れて行ってくれ」

「オツケー」

「じゃあ今すぐ・・・っ!？」

後ろを振り向いた。背中にとてもやばい感覚があったからだ。遠くにぼんやりと輝いているものが見える。

「桃色の・・・玉か？」

「確かに、見えるね」

「ってどんどん大きくなってきたくない!？」

「原因はそれか!」

桃色ならばなのはが思いつくのだが、それを俺たちに向かって撃つ意味がわからない。

「今は握りこぶしより少し小さいぐらいか？」

「でも、なんか怖いよ・・・」

「言っても仕方ないわ、急いで離れましょう!」

それから俺たちは、全力で走りだした。

「咎人たちに、滅びの光を・・・」

こんにちは、フェイトです。私たちは今、全力で距離をとっています。

仮面の人たちが強制的に起動させてしまった闇の書。はやてまでとりこんでしまった。

「ねえフェイトちゃん、ここまで逃げなくても・・・」

「あれを至近距離で受けたら…防御の上からでも落とされる!」

撃った当人は分からないかもしれないけど、受けたこっちは思い出しただけでも怖いんだから!

「周囲に人の反応を確認」

「「ええ!？」」

まさか、結界内に残り残された！？

「ユーノ、アルフ、急がなきゃ！」

「わかってる！」

「スピード上げて探すよ！」

「なのは、こっちも！」

「うん！」

早く見つけないと、大変なことに・・・

「スターライトブレイカー」

『！？』

非情にも、その光は放たれてしまった。

「げ、なんか近づいてきた！」

「巻き込まれるよ！」

「なら一歩でも早く逃げるぞ！」

あれから５分ほど走った。やはり女子二人だと走る距離にも限界がある。

結構走ったはずなんだけどな…これでも駄目か。

助けるって言ったのに、約束破っちゃったな。

父さん、母さん、ごめん。

せめて、この二人だけは守りたいんだけど…な。

「もう１００メートルくらいよ！」

「間に合わないっ！」

「二人とも、後ろに立ってろ！」

一秒でも、一瞬でもいい。せめて長く生きてくれ・・・っ！

その思いで、二人を下がらせた。

「駄目よ、このままじゃ三人とも！」

「俺よりも長く生きる。闇に生きてる俺にとってできる最後の役目だ」

「この馬鹿！なんでそんなこと・・・」

「じゃあな」

受け止めるかのように、両手を前に突き出した。何の役にも立たないが、最後のあがきってやつだ。でも・・・

「死にたく、ねえな・・・」

ぼつりと、そうつぶやいた。

へなら、私が助けましょう

そう、声が出たと思った瞬間・・・

俺の腕に、衝撃が走った。

第十三話：守りたいという願い（後書き）

闇の書から放たれたスターライトブレイカー。それは非情にも剣也たちに向かう。果たして彼らの運命は？

ついに最終決戦がスタートします。戦闘は次の次の回からになります。戦闘描写は全然かけないのですが・・・努力したいと思います。では、次回また会いましょう。ドライブイグニッション！

第十四話：女物は似合わないと思う（前書き）

闇の書から放たれたスターライトブレイカー。それは無情にも剣也たちの元へと向かう。身を呈して守ろうとする剣也に語りかけたその声、果たして彼らの運命は？

題名がこんなのですが、ギャグ回ではありません。

第十四話：女物は似合わないと思う

第一四話・・・女物は似合わないと思う

「・・・」

どれくらいの時間が経ったのか、さっぱりわからない。

30秒か、1分か、それとも1時間か…手にかかる衝撃はいつの間にか消えていた。

「あれ・・・？」

どういうわけか、俺の体はしっかりと残っていた。はて、なぜに。後ろを振り向くと、二人の姿もちゃんとあった。よかった、生きてたか…

「剣也、無事！？」

「腕がびりびりするけど…ちゃんと生きてる」

「えと、剣也君ってそこまで髪長かったっけ」

「え？」

頭に手をやってみる。すると、いつもの短髪からセミロングぐらいになっていた。

「なんでだ？」

ん？なんか違和感がふつふつと…

「スカートにあってるじゃない、剣也」

「す、スカートお！？」

あわてて下の方を抑える。あれ。ない、ないぞ…

「ごめん、ちょっと後ろ向いてて」

「・・・」

確認のためもう一度チェックする。・・・やっぱりない。

大切なところが、ない。一応胸も触ってみる。少しだけが膨らんでいた。

「俺、女になってる！？」

「「ええ！？」」

「あなたが望んだからですよ、マスター」

「「しゃべったっ!？」」

「ネクサス、だったっけ」

「あなたが「この二人を守りたい、長く生きてほしい。そして生きたい」という願いから、私のメモリーの中にあつたバリアジャケットを装着させました」

「どうやらこの服はバリアジャケットというらしい。」

「なんで女の子になるんだよ。俺は女になりたいなんて願ってないんだが」

「わかりませんね。製作者にでも聞いてください」

「ならしかたないか」

「えと、なんで腕輪が？」

「あゝ・・・とりあえず後にしてくれ」

「なんで？」

「また何か来たから」

「拳を構え、気を張る。また厄介な奴が来るといやだからな…」

「つてあの体の色は・・・」

「なのはに・・・フェイトか？」

「アリサちゃんにすずかちゃん！」

「あれ、もう一人いるけど…」

「見ないでくれ!俺の姿はできるだけ秘密にしたい!

背を向けて立つ。顔なんて見れもしない。

「なのは、フェイト!」

「二人ともいたんだ・・・ってどうしたの?その格好」

「「あ」」

「あの二人も変な格好してんの!？」

「ところで、その女の子は？」

「「剣也(君)」」

「言うなよ!あゝまた顔が熱い・・・」

「えええええええ!」

「あの、本当？」

「本当だよ・・・」

しぶしぶといった感じで顔を見せる。

「うわ、ほんとだ」

「かわいい」

「言うな！そして見るなあ！」

とりあえずあの二人は安全なところに転送された。これでまきこまれる心配はほとんどない。

「単刀直入に言う。今何が起きているかを簡潔に言ってくれ」

そして、俺はとてつもなくびっくりした。

はやては仮面の男たちに強制的に闇の書を起動され、それに取り込まれてしまったというこそして、その影響でこの街ほぼ全域が結界に入っていること。さっきの光は、その闇の書が発動したということ。

「何っ！もん撃ってんだあの本は・・・」

「あれを防御して耐えられる初心者なんて、どこにもいないと思うけど」

「にやはは…結構頑張って作ったからね、スターライトブレイカー」
あれはなのはの魔法らしい。二人も魔力の徴収を受け、その技をコピーされた可能性があるとのこと。

というかなのは、お前は何と言うものを作りだしたんだこの野郎！

「いたっ！」デコピンをした。

「恨みだこんちくしょう」

「なんで？」

「小学三年生があんなもの考えるな！」

「考えたのは私ですよ」

「えーと、それがなのはのデバイスってやつなのか？」

「レイジングハートと申します。このたびはどうもすみませんでした」

「なのは、今からそのデバイスを握り潰さ「駄目なのっ！」ですよ

ね」

「とにかく今ははやてを助けないと、大変なことになる。シグナム達だって…」

「ヴィータまで取り込まれてんのかよ！」

「なんてこつたい。いち早く動かなければならないな。」

「ネクサス、俺に戦う力はあるのか？」

「もちろんです」

「なら俺も行く。女の子二人だけにまかせてられるか」

「そんな、無茶だよ！」

「いくらあの砲撃を止めたって言っても、実力が無さ過ぎる！」

「後悔したくないからな」

「「え？」」

「この手に力があつて、それを使わないまま、手を伸ばさないまま
でいるのは、俺一生後悔すると思うからさ」

「「・・・」」

「無茶を言っているのは分かってる。だけど今は「いいよ、そこま
で言うなら」フェイト！」

俺の言葉に、OKをくれたフェイト。

「ちよつと、フェイトちゃん！いくらなんでも・・・」

「ここまで真剣な顔してるのは、初めて見たから。だから、許して
あげてくれないかな、なのは」

「うーん・・・フェイトちゃんが言うなら」

「ありがとう、二人とも」

頭を下げた。よく許してくれたもんだ。

「なのは、フェイト！」

「大丈夫だったかい？」

「ユーノ君、アルフさん！」

あれ、また誰か来た。体の色は・・・緑とオレンジ？

「君がなのはが言つてた御崎君かい？」

「御崎剣也つていいいます。この腕輪はネクサス」

「こんにちは」

「あのリンディさんの結界を破ったんだって？すごいね」

「いや、あのときは無我夢中でしたし…」

声を聞くと、どうやら同年代の様だ。

「女なのに剣也って、おかしい名前だねえ」

「アルフ、その子は男の子だよ」

「ええ！そんな格好してるのに？」

「今は訳あって女の子だな」

今にも精神的に崩れそうです。誰か助けて・・・

「ごめんごめん。剣也だっけ？フェイトから聞いてるよ」

「あなたがアルフさんってことは、先ほどの方がユーノさんですか」

「呼び捨てでいいよ。別に気にしないし」

「ならそれで」

聞くとユーノはなのはが魔法に会うきっかけの人で、アルフはフ

ェイトの使い魔…言ってみれば相棒の様なものらしい。

「高速でこちらに飛来するものがあります、注意を」

「バルディッシュ、ありがとう」

「そっちがフェイトのデバイスか」

「バルディッシュといいます」

「よろしく」

こっちの方は物静かな感じだな。

さて、どんな人が来るのやら…

第十四話：女物は似合わないと思う（後書き）

今回の話を作るに至って、私はもう少しアニメを見ておくべきだったな・・・と思っています。

けんぷファーというアニメがあるのをご存知でしょうか？そのアニメ、まさに男が変身して女になるんです。おまけに腕輪という部分も一緒。

私はそのアニメの存在すら知らず、友達に設定を話したところその存在を知りました。

嘘じゃありませんよ？真実です。

それでもこの設定は崩さないつもりですが・・・作者の知識不足です。すみません。

次回からはついに最終決戦！頑張りたいと思います。

P・S・ 前回連続投稿と言っていましたたが、間違いました。テスト前に一度連続でやっていましたね。ごめんなさい。

第十五話：戦闘、開始（前書き）

ついに戦闘開始です。ド素人の剣也は、一体どこまでついていけるのか？

戦闘描写がうまくないですが、よろしくお願いします。

第十五話：戦闘、開始

第十五話・・・戦闘、開始

「来たよ」

「・・・魔力光が真っ黒ってわけか」

一分ほどたって、その人が来たらしい。

黒の中に黒を混じらせたなら、そりゃ分らない。位置把握ができないと厄介だな…

すると、いきなりネクサスが話した。

「夜天の書、あなたはまた悲しみの歴史を繰り返すつもりですか！」

「私はただ、主の願いをかなえるだけだ」

「相変わらずの性格ですね…仕方ありません。マスター。この夜天の書をたたき起してください」

「言われんでもわかってる」

やっぱり相手は夜天の書だった。夢であったことはあるらしいが、ここまで暗いイメージではなかった。

念のため拳を構える。まさか父さんに教えてもらったのがこんな形で役に立つとはな…

剣術、空手は教えてもらったから、いざという時には使えるようにはしてある。

「相手は今どこにいる？」

「空中…って見えないの？」

「どうやら相手の魔力光は黒だ。位置把握はネクサス任せだよ」

「でも、飛行魔法なんて知らないんじゃない？」

「マスター。鳥が翼を広げるようなイメージを」

「いきなり言われてもな…」

とにかくイメージしてみる。大空にはばたくような、大きな翼を。「だりゃあっ！」

思いつきり地面をけた。すると、体がふわりと浮くような感覚に

襲われる。

「成功、か？」

「へですね」

「一発目で成功！？」

「なんて男だよ、あの子」

ユーノとアルフが驚いていた。そこまですごいことやったのか。

「天使みたいだね」

「ほんと。きれいだよ、剣也君！」

後ろを見ると、白と金色を混ぜたような色の二枚の翼があった。なぜここまで女らしい恰好なんだ。見てて悲しくなってくる。

「話はすんだか？」

「夜天の書・・・それが本来の名前らしいですね。とっとはやてを返してもらいますよ」

「主は私の中で眠っているよ。この世界が夢であるように、とな」

「はやてはそんな子じゃない！」

叫んだ。それも今まで出したことのない大声で。

「あいつは障害者で、病気を抱えていてもいつも笑顔で接してくれた。そんな優しい子が、こんなことを望むわけがないっ！」

こいつは本当にたたき起こしてやる必要があるな…

「行くぞ、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ」

「いつでも！」

「友達の頼みなら、断れないからね」

「サポートしかできないけど」

「できる範囲で頑張ってみるよ」

さーて、いきますかっ！

「だあっ！」「甘い」

正拳突きを放つが、壁に阻まれた。

結構本気で殴っただけだな…リンディさんの壁より硬いぞ。

先程からユーノとアルフにサポートしてもらい、なのはとフェイト、

俺で攻撃を仕掛けているのだが、全く攻撃が通らない。

バインド？という拘束の魔法でも全く効かず、なのはの砲撃もフェイトの高速斬撃も全く効かない。

「攻撃魔法、何かないのか？」

「ありますよ」

「なら適当に威力のあるものを出してくれ」

「了解しました」

右手に力がたまっている感じがする。打ち出せばいいのかな？

「相手の位置は」

「右五七度」

「自信ないけど…とりあえずぶっ飛べ！」

翼と同じ色のレーザー？が敵に当たった。反動で少し後ろに下がる。

「あたりましたね」

「あの、ネクサスさん？何を選択した？」

「パーティクル・カノン。簡単にいえば白い砲撃を飛ばす魔法です」

「SSSって、恐ろしいな」

馬鹿みたいに魔力があるということ、そこまで疲れがある気はない。つまり、このレベルの攻撃なら何発も打てるわけだ。

「っ！？後方より大威力砲撃の反応！」

「飛んで逃げる！」

まだ危なっかしいが、とにかく今は上に逃げた。すると、足をかすめるように何かが飛んで行った。ちっ、時間稼げると思ったんだけどな。

「ほう…素人がこれをよけるとはな」

「ネクサスのおかげだ。俺の実力じゃない」

「だが、それ以外はどうか？」

「ッ！なのは、フェイト！」

後ろを見ると、ふらふらと飛んでいるなのはの姿が。フェイトはぎりぎり回避したらしい。

「はは、油断しちゃった…」

「笑ってる場合じゃねえ！早く回復を・・・」

「させると思うか？」

「くそっ！」

なのはを抱えて飛ぶ。横を何かが通りすぎる感触。

くそ、魔力が黒だとよけづら過ぎる！

「なおれ、なおれ、なおれっ・・・」

「ふえ・・・？」

なんでか知らないが、手の中に暖かい感触がする。たとえるならば、太陽の光のような感じだ。

「マスターは、魔法陣展開なしで回復魔法を使えるようですね。一種のレアスキルの様なものでしょうか？」

「すごいよ剣也君！けがが全部治っちゃったよ！」

「それはどうも」

手を離し、再びこぶしを構えておく。

「剣か何かあればいいんだがな」

「作れますよ？魔力刃ですけど」

「早くいつてくれ！」

「ではちよつとお待ちを・・・プログラム展開」

今度は左手に力の感触。手の甲から、剣のように刀の部分だけが飛びだしている。

「ハシャインブレード。二刀流もできます」

「きれい…太陽の光みたいだよ」

「これなら斬撃もできるか」

とにかく武器はある。今度はこっちから仕掛けるか。

「さあ、第二ラウンドの開始だ！」

戦いは、さらに激化する。

第十五話：戦闘、開始（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

前回感想を下さった方、本当にすみません…自分が見ただけで直したのですが、まだここが間違っているという部分があれば教えてください。

次回もまた戦闘です。

P・S：剣也の設定を少し変更し、それにあたりリンディとの話し合いの話とスターライトブレイカーのあたる場面のシーンを少し変えました。

第十六話：夢の中で（前書き）

本編は残り三話で終了させる予定・・・です。今回の話を含めて。戦闘描写がうまくできない・・・どなたかコツを教えてください。とうれしいです。

では、本編をどうぞ。

第十六話：夢の中で

第十六話・・・夢の中で

「デイベイン・・・」「プラズマ・・・」「フェザー・・・」

「こい」

「バスター!」「スマッシュャー!」「スラッシュャー!」

見えない壁に止められた。なんて言うチートだこの野郎!攻撃受けるよ!さっきからこればかりだ。

こつちが攻撃を仕掛けても全部消されるか止められる。このままじやじり貧すぎる・・・

「超至近距離で砲撃が打てれば、ダメージが入る可能性があるかな」

「できれば最初からやってるよ。だけど近づいても撃つ隙が無い」

「チャージしてからなら?」

「その時点で相手にばれる」

「つつちもさつつちもいかなえなこの野郎!たかどうすれば・・・

「隙だらけだな」

「ツ!くそ、油断した!ぐあっ!」

「きゃあ!」

「不意打ち!?予想してなかった・・・っ!」

突如、地面から生えてきた触手の様なものにつかまった。まとめて三人とも・・・一人でも残っていればよかったんだが。

「あんたは・・・はやてがこんなことを望んでいても思ってたのか!」

「私は、主の願いをかなえるだけの、ただのプログラムにすぎない」

「じゃあ・・・なんでそんなに悲しんでるんだよ!」

目の前にいた姿は、黒から青に変わっていた。

「これは、主の感情だ」

「いいや、違うね。俺の目は感情が見える。たとえばやてがその中

にいたるとはいえ、そんなことになるとは思えづらい」

「・・・」

「おそらく、あんたは・・・今涙を流してる」

「剣也君、なんでわかるの？」

「感だ」

「この涙も、主のものだ」

「いい加減にしろよ…あんたもこの最悪の輪廻を止めたくはないのかよ！」

「貴様に・・・私の何がわかる！」

全方位から攻撃が飛んでくる。逆切れか…上等だ。

「シャインブレード、ツインモード」

そう告げると、右手にも刀身が現れる。意識が少し変だな…さっきの攻撃のせいかな。

「う、おおおおおおおおおおおっ！」

体全体に力を込める。すると、はじけるように触手は消えた。

一気になのはとフェイトも開放する。

「ブレード・・・ペネレート！」

青い姿に向かつて特攻を仕掛ける。今はこいつをぶんなぐらないと気が済まなかった。

だがなにも気にすることもなく止められる。

「私の中で眠れ、愚かな少女よ」

「誰が…」

特攻は当たった。だが急に脱力感に襲われる。手を見ると、粒子のようになっていた。

「夢の中で、静かに眠れ」

そして、俺は意識を手放した。

「うそ…」

「剣也君！」

触手を切り裂いて、私たちを助けたと思ったら即闇の・・・いや、

夜天の書さんに突っ込んで言った剣也君。

だけど、障壁に当たった瞬間に…光の粒になって消えた。

「剣也に…何をしたっ！」

「この本の中で眠っているだけだ。永遠にな」

「…!？」

「私の主と同じように、終わらない夢を見続ける」

「フェイトちゃん…」

「わかってる。二人とも助けないと！」

レイジングハートを構えて、夜天の書さんに向き合う。

「待っててね、剣也君」

すぐに、助け出すから――

「ここは、どこだ？」

真っ暗やみ、というかいつもの世界だな。俺にとっては別にどうでもいい。

だが、違う部分があった。空気が違いすぎる。そして腕にあったネクサスが無い。

「血の匂い、なのか…？」

鉄の様な匂いが、そこら中を埋め尽くしていた。周りを見ると、倒れている人がこれでもかという風に広がっていた。

「戦争でも起きたつてのかよ!？」

死んでいる人を踏むのは申し訳ないのだが、それでも俺はとにかく前に進んだ。

すると、三人の人影が見えた。虹色、翠色、そして、紫に黒を混ぜたような色の人。

「来たか、少女よ」

「あなたは？」

「クラウス・G・S・インクヴァルト。こっちの二人が…」

「オリヴィエ・セーゲブレヒトです」

「イクスヴェリアといいます」

「すみません、ここはどこなんですか？」

「ここはベルカの地。戦争が行われている。そして、これは闇の書
が作り出した夢の中だ。僕たちの過去の世界さ」

「私たちはその時、戦っていたの」

「自分たちの国を、守るために」

「だからこんなに人が・・・っ」

吐き気がした。無理もない…こんなに血のにおいをかぐなんてめっ
たにないからだ。

ふと、語りかけるように言ってきた。

「君は、自分の命をかけてでも大切なものを守る意思はあるかい？」
クラウスさんの言葉、これはとづくに決まってる。

「あります。曲げることもないです」

「自分が死ぬ覚悟と、何かを殺す覚悟は？」

死ぬ、か…殺すのも、死ぬものいやだけど、大切な物なら・・・

「覚悟しないと、戦いなんてできないですから」

「どんなことにも絶対に負けない心は？」

これはもう考えるまでもねえ。

「いつでも、心にあります」

そう、俺はもう心に決めてある。

はやても、夜天の書も、守護騎士たちもすべて助ける。

たとえ自分の命が消えても、すべて守ってみせる。

負けるなんて、絶対に嫌だ。

「ならもう大丈夫だろう。僕たちの役目はここまでだ」

「アルトリアさんも、考えたわね。『この子は絶対に負けないから』
って。ふふっ」

「それから、きみにこれを」

渡されたのは、ネクサス。俺に力をくれたもの。

「マスター。もう時間です」

「ネクサス…ああ。いってきます！」

クラウスさんが教えてくれた場所に走る。いい人たちだったな…

でもってきたのは血のにおいもない真っ黒な場所。

「さっきあの人は夢って言ったな……なら早く抜け出したいもんだが」
あれ、あの銀色の姿は……まさかな。

「あれ、だれや……？」

やつぱりはやてだった。

「剣也だ。今はいろいろあつて女の姿だけだな」

「はあ……ってええ！？」

「とりあえず今はここを脱出しないと」「いや、それは無理だ」

割り込んできたその声は、先ほど戦っていた夜天の書だった。

「夜天の書……あんたまで来てたとはな。どこまで邪魔をする気だ」

「いや、この子にはもう名前があるで。強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール「リインフォース」って」

「いい名前じゃん」

魔力光が真っ黒なので、どこにいるかは分からない。

「さっきまでお前が戦っていたのは防衛プログラムだ。本体は私だ」

「とはいってもどこにいるかがわからん」

ネクサスに教えてもらい、正面に立つ。

「無理ってどういうことだ？」

「プログラムの改変で、防衛プログラムの制御がきかない。今は魔導士が外で頑張っているが……」

「ちっ……」

それじゃだめだ。とにかく今ははやてと騎士たちを救わなければ話にならん。

プログラムっていうんなら……

「なあ、プログラムってことは、主の権限とかで治せないもんなの？」

「それなら……主が管理者権限を使えば、動きは止められます」

「私が役に立つんなら、何でもやったるで」

「なら……リインフォース、でいいんだよな。管理者権限使用許

可を出して、動きを止めさせてくれ」

だがここをどう脱出すればいいんだ？

すると、いきなりでかい衝撃が襲ってきた。外からか？

「はやて」

「なんや？」

「今までリインフォースは耐え難い痛みを、つらさを感じてる。だから、ここで終わらせよう」

「わかつとる。誰かがなくのは、私だつて見たくあらへんから」

「主、そして・・・」

「御崎剣也だ」

「剣也、本当にありがとう・・・」

「大丈夫だつて。とにかく今は、このうざったい夢から出ることだ」

「管理者権限使用可能、外部との通信、いけるで！」

「ナイスだはやて！」

「あの、外部の方、聞こえますか？」

「あの、外部の方！聞こえますか！？」

「はやてちゃん！？」

あのあと何度も攻撃を仕掛けたんだけど、全然きかなかつた。

最終形態のザンバーも発動した。なのはもエクセリオンモードを使つてる。

すると突然、夜天の書の動きが止まった。そして聞こえてきたのははやての声だった。

「今は私の権限が使えるようになったから、このこの動きを止めとる」

「二人とも、聞こえるか？」

「「剣也（君）！」」

聞こえてきたのは剣也の声だった。よかった、無事だったんだ。

「今から内部から砲撃を撃つ。こっちだけじゃ足りない可能性があるから、そっちからもでかいの打ってくれ！それでおそらく脱出で

きるはずだ」

「任せて！」

「砲撃なら、私の得意分野だから！」

カートリッジを使い、威力を上げる。

「いくぞ・・・シューティング・・・」チャージを開始する声。

「エクセリオン・・・」

「スプライト・・・」

タイミングを計り、一斉に攻撃を仕掛ける！

「ブレイザーっ！」

「バスターっ！」

「ザンバーっ！」

一瞬だけ音が消えたと思うと・・・剣也は外にほっぽり出されていた。

「おわあ！」

「姿勢制御！」

浮いていなかったのかな？体制が不安定だ。

「はやては・・・」

見ると、闇の中におおきな銀色の球体があった。そして

「おいで、私の騎士たち」

四人の騎士と、最後の夜天の主が、今ここに降臨した。

第十六話：夢の中で（後書き）

本編とは違い、剣也を夢の中に入れてみました。

ゲストキャラクターとしてクラウドさん、オリヴィエさん、イクス
ヴェリアさんに出ていただきました。設定として、夜天の書の作者
とつながりがあったということにしています。

デバイスの設定はおそらく総攻撃が終わった後になるかと思っています。
では、また次回。

第十七話：Tの終わり／ファイナル・アタック（前書き）

*これまでの、魔法少女リリカルなのはA、s、Don、t For
f e t S t o r y s は・・・

「俺、女になつてる!？」

「私は、主の望みをかなえるだけだ」

「君は、自分の命をかけてでも大切な物を守る意思はあるかい？」

「おいで、私の騎士たち」

いよいよラスト二話！最後までお付き合いください。

第十七話：Tの終わり／ファイナル・アタック

第十七話・・・Tの終わり／ファイナル・アタック

「はやて・・・」

「ごめんな、ヴィータ。心配かけて・・・」

「はやて、はやてえ！」

よっぽどうれしいんだろう。桃色になっているヴィータ。

「感動の再会、ってやつだな」

「これも剣也君、なのはちゃん、フェイトちゃんのおかげや。ありがとうな」

「ええ！？この女って剣也だったのか！」

「バリアジャケット装備した瞬間からこうだよ。解除すれば戻るとは思っけど」

「でも、かわええな。カメラない？」

「撮るな！」

「話してるところいいかな、みんな」

声のした方を見ると、うすい青色の人がいた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。君のことは艦長から聞いている」

「ハラオウンってことは、リンディさんの家族？」

「艦長は僕の母だ。それで、今から話したいことがある」

「手短に頼む。暴走プログラムの暴走があるからな」

初対面の相手に対して言葉使いが荒いとは思ったが、焦っているの
で仕方がない。

「今から防衛プログラムの破壊を行う。一つは強力な凍結魔法で封印する。もう一つはアルカンシエルで吹き飛ばす方法だ」

「最初のほうはたぶん無理かと。コアがある限り復活しちゃいます」
こっちはシャルさん。

「アルカンシエルも絶対だめだ！そんなことしたら、はやての家ま

でぶっ飛んじまう！」

これはヴィータ。

「ところでアルカンシエルって？」

「直径百数十キロを空間を歪曲させながら消滅させる魔導砲……
って言ったらわかるかな」

「そんなもん撃ったら家どころか日本が消えるわ！撃つな！」

地殻津波が起こってどえらいことになるぞ……明日のアメリカあたりで
『日本、なぞの爆発により消滅！』とかいうニュースが出るだろう。
考えるだけでもぞっとするわ。

「じゃあどうすればいいんだ？守護騎士たちからヒントが何かあればいいんだが」

『うん……』

全員で考える。どうにかして別の場所に移せばいいんだけど……でも
どのくらいの大きさかわからない以上、難しい可能性が高い。中心
部的な物だけ飛ばせないのかな？

「あーもう！一気にズバツとぶっ飛ばすわけにはいかないのかい？」

「アルフ、そんなアバウトな……いや、それでいいんだ！」どうい
うことだ？

さっき考えたことを言ってみる。

「俺のリンカーコアを取り出したように、中心部的な物を取り出し
て、それを別の場所でぶっ飛ばす、ってのはできないか？」

「わからないな……」

「今アースラは宇宙空間内のはずだ。そこまでコアを持っていけれ
ばアルカンシエルは打てると思う」

「エイミィ、いけるか？」

「いけますよー！宇宙だろうが、どこだろうが！」

「コアの摘出も、私の力ならどうにかできるかもしれせん」

あら、意外といけるものらしい。というかさっきの声はどこからだ？

「モニターだ。君には見えないだろうが」

「なるほどね」

「剣也君、すごいの！」

「ぶっ飛ばすだけで、よく思いついたね」

「私には考えられへんわ」

「いや、とっさに考えたことを言ってみただけだ。はやて、暴走プログラムのは分らないのか？」

「それは私が説明しよう」

「リインフォース」

話によると、そのプログラムとやらは4層に分かれたバリアを持っており、さらにその本体をたたかないとコアの抽出は無理らしい。

「ここにいる全員でフルボツにすれば大丈夫じゃね？」

「物騒なこと考えるな、君は」

「別にかまわないだろ。とにかく今は目の前のことを片づけることが重要なんだから」

こうして、暴走プログラムの破壊作戦が実行されることとなった。

「シヤマル、三人の治療できる？」

「任せてください」

緑色の光に包まれたかと思うと、体力、魔力ともに回復した。

「さすが湖の騎士、といったところですね」

「デバイスに褒められるなんて、初めてね」

「ありがとうございます、シヤマルさん」

「どういたしました。今は・・・剣也ちゃん、ってところかしら」

「あなたにまで言われるともう心が・・・」

戦う前に精神崩壊してしまう。俺のためにも早くけりをつけねば。

「みんな、来るよ！」

「夜天の書を闇の書と言わせた、本当の闇」

さーて、どんなもんが出てくるのか…ってなんだありゃ。

いろんな色が混ざって何が何だかわかりやしない。とにかく聞いてみる。

「なのは、何が見える？」

「えーっと、何が何だかわからない怪物？かな」

見えなくて良かった気がする。

ちなみにサポートはユーノ、アルフ、ザフィーラさん。

一層目がヴィータとなのは。二層目がフェイトとシグナムさん。

三層目がおれとはやて。四層目がクロノで、本体攻撃は俺、なのは、フェイト、はやての一斉攻撃でやるということになった。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「縛れ、鋼の軛！であああああっ！」

まずは周りの触手を止める。

「一陣目、なのはとフェイト！」

「タイミング会わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんこそね！」

「鉄槌の騎士ヴィータと、黒金の伯爵、グラーフアイゼン！」

「G i g a n t F o r m」

「轟天爆碎！ギガント・シュラク！」

馬鹿でつかいハンマーが見えない壁にあたり、大きくひびを入れる音がする。

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン、行きます！」

「Load Cartridge」

「エクセリオン・・・バスターアツ！」

桃色の閃光が直撃し、一層目が壊れる。それにしても、あの砲撃の威力は戦艦級だな…

「次は、フェイトとシグナムさん！」

さて、どんな技を見せるかな？

「烈火の将シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

「B o g e n F o r m」

剣が柄と合体し、弓に変わった。

「駆けよ、隼っ！」

「Sturm falke」

一本の矢が飛び、壁に当たって爆発を起こす。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー…行きますっ！」

雷が鳴ったような音が響く。カートリッジがロードされる音も一緒だ。

「うちぬけ、雷刃！」

「Jetzamber」

金色の大剣が、バリアを切り裂いた。

「次は俺とはやてだな。しっかり決めてくれよ？」

「もちろんや。いけるな、リインフォース」

「はい、我が主」

「御崎剣也と、光を紡ぐものネクサス。押して参る！」
体のそこから魔力を引き出した。

「神の名を持つ炎の力よ、今我に力をもたらせ。災厄の根源よ、神の炎に焼かれて消えろ！」

「Noa inferno」

詠唱が終わった瞬間に、大爆発が起こる。俺が今打てる二番目に威力がある魔法、ノア・インフェルノ。対象物に対して直接爆発を起こす魔法だ。ありや、まとめて三層目破っちゃった。

「かなたより来たれ、ヤドリギの枝。銀月の槍となりて、うち貫け…」

杖を大きく振りかぶった。

「石化の槍、ミストルティン！」

ぴしぴしと何かが固まる音がしたかと思うと、怪物の動きが止まり、一部が瓦解した。だが、即砲撃性能を持った触手が復活する。

「盾の守護獣、ザフィーラ！砲撃なんぞ、撃たせん！」

白い槍が、見事に触手を貫通して言った。

「行くぞ、デュランダル」

「OK、BOSS」

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ！」

水が凍っていく音が響く。ああ、ここは海の上か。だから潮の香りがしたんだ。

「凍てつけ！」

「Eternal Coffin」

バリアを破り、さらに本体まで凍て行つた。大きく壊れていく怪物…だが、まだ動きは止まらず、さらにごちゃごちゃになった。

「うわぁ・・・」

「だめ。ダメージを与えても、すぐに回復しちゃう！」

「なら、回復する間も与えないだけだ。だろ？クロノ執務官」

「そのとおりだ。最後は任せたぞ」

「任せとけ」

「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん、剣也君！」

なのはの言葉に、こくりとうなずいた。

それと同時に、両腕に力を込めていく。

「全力全開！スターライトオオオ…」

「雷光一閃！プラズマザンバーアア…」

「ごめんな、おやすみな…」

「ここで楽にしてやれ、はやて」

「わかつとる…行くよ、終焉の笛、ラグナロクっ！」

甲高い音が周囲を満たしていく。そして――

『ブレイカーアアアアアアアアアアアッ！』

桃色、金色、銀色の大威力魔法が飛んで行つた。

「神の光よ、今我に力を。いくぞ、ネクサス！」

「いつでもどうぞ！」

「シャイニング・ノア・ブレイカーアアアアアアアアッ！」

両腕をクロスさせ、白金の光を三人に続けるように放つ。

「コア、露出…捕まえたっ！」

「長距離転送！」

「目標、軌道上！」

怪物はどこかへと消えていった。あとは頼みますよ、リンディさん。

「アルカンシエル、バレル展開！」

せつかくあの子たちが作ってくれたチャンスですもの。こんなところで無駄にするわけがない。

「コア、なおも回復を続けながら浮上中！」

「すごい速度です！」

「さすがはロストロギア、と言ったところね」

最後の力ぎを取り出す。

「ファイアリングロックスシステム、オープン！アルカンシエル発射後、すぐに安全なところまで退避します。準備を！」

『了解！』

そして、そのコアがアースラの前に現れる。その体はなおも再生を続けていた。

「アルカンシエル、発射！」

主砲がコアに直撃し、そして空間の歪みとともにその姿を消した。

「コア、完全消滅…作戦、成功です！」

「ふう……」

みんな、お疲れ様。

「コアの反応は完全に消えた。作戦は成功だ！」

『やったー！』

「やっとおわったか……」

少女三人はハイタッチを交わしている。そんな中、俺はこの先のことを考えていた。

（「あとはリインフォースのバグの解除、そして俺への転送…とにかく早く話をつけないとな」）

話をしようと思い、はやてに声をかけようと思った瞬間…

その姿が、急に倒れた。

「はや……て？」

「おい、はやて！はやてえ！」

まだ、終わってないのか？闇の書の呪いは――

第十七話：Tの終わり／ファイナル・アタック（後書き）

次回、魔法少女リリカルなのはA、s Don、t Forget Storyは

「剣也君が、リインフォースさんを取り込む？」

「なんでそうやって一人で抱え込もうとするの？」

「影の仕事は、光の见えない俺にこそ適任」

「最高のサプライズやったよ？ありがとうな」

第十九話：Tの終わり／闇の終焉？

これで決まりだ！

某仮面ライダー的にしてみました。平成ライダーは特に好きです。ウルトラマン要素も少し入れました。ネクサスはドラマ風で、見た当時は少し怖かったです。が面白い作品でしたね。

次回で本編は最終回！少し間をはさんで、今度はゲーム編です。

BOAは全部クリアしました。シャマルさんのストーリーがきつかったなあ・・・

GODはいつ発売されるのかはわかりませんが、とても楽しみです。では、また次回。

本編最終回：Tの終わり／闇の終焉？（前書き）

魔法少女リリカルなのはA、s、Don、t Forget Story
y、s、今回の依頼は・・・

「夜天の書を、元に戻してください」

「あんたも、この最悪の輪廻を止めたくないのかよ！」

「ごめんな、おやすみな・・・」

「シャイニング・ノア・ブレイカアアアアアアッ！」

本編最終回！果たしてリインフォースの運命は？そして剣也は？

本編最終回：Tの終わり／闇の終焉？

本編最終回・・・Tの終わり／闇の終焉？

「単なる大威力魔法による一時的なショックか」

「ああ。もう少ししたら目覚めるだろう」

「よかった・・・」

はやては今、ベッドに横になっている。リインフォースは今はやての体の外に出ている。

現在は「アースラ」という船の中。リンディさんたちの本拠地だ。

「もう、何もないのか？」

「いや…防衛プログラムは、簡単には消えないんだ」

何でも過去でめちゃくちゃにされたせいで、いくら倒しても復活するらしい。

「まあ、私たちが消えれば大丈夫なんだけど」

「そうなるな」

「いや、お前たちは消えないよ。書き換えたときに、お前たちはプログラムから切り離れた」

「と、いうことは・・・」

「消えるのは、私だけだ」

「ま、消えないんだけどなあ、実際の話」

「・・・は？」「・・・」

こうなるよね、絶対に。

「剣也君が、リインフォースさんを取り込む？」

「どういうことですか？」

現在、なのはとフェイトはリンディから今後やることについて説明を受けていた。

「防衛プログラムっていうのは、何度でも復活するんだ。本来なら、彼女に消えてもらうはずだったんだけど・・・」

「プログラムなら、切り離して行うことが可能って剣也君が言ったでしょ？それは実現することはできるんだけど、切り離した正常なプログラムを入れるものが人間に限定されてて・・・」

「それで、彼が立候補したというわけだ。まだ9歳だというのに、よく決断したな」

「そんなぁ・・・」

「失礼します」

「ちょうどいいところに來たわね。あなたの話をしていたところですよ」

「こつちもリインフォースさんに話を終えたところだ」

「「剣也（君）！」」

二人が、剣也に近づいていく。二人の顔は驚きと悲しみでいっぱいだった。

「なんで、相談してくれなかったの!？」

「行ったら、お前ら絶対に反対するだろうが。頑固だし」

「だけど!」

「まだ9歳の女の子二人に、そんな重責かけるわけにはいかないだろ？こういう時こそ、男の出番なんだよ」

「っ・・・」

「だから、今は「ふざけないでよ!」!？」

剣也がフェイトに思いつきりほほをはたかれた。

「なんでそうやって一人で押し込もうとするの!？私たち友達ですよ？」

「友達だからこそ、やらせたくなかったんだよ」

「友達って、一緒に悩んだり、わかりあったりするものでしょ？・・・少なくとも、私はそう思ってる」

「フェイト・・・」

「剣也がそこまで決めてるなら、私は反対はしない。だけど・・・」
「だけど？」

「これからは、一人で抱え込まないこと!いい?」

「わかったよ。今度からは一度相談する」

「じゃあ、もういいのね？」

「いつでも」

「なら、行きましようか」

「なら、二人ともはやてを頼む」

「「わかった」」

リインフォースは『ユニゾンデバイス』というらしく、一種の道具の様なものらしい。

まあこんなに人間そっくりなら道具とは思わないけどな。

そう思いながら向かったのは、デバイスの管理をしている人の部屋。

「マリエル、いる？」

「いますよー。あなたが剣也君ですか？」

「はい」

「私はマリエル・アテンザ。デバイスマスターだよ」

「御崎剣也です。でもってこっちが」

「リインフォースです。今回はよろしくお願いします」

「こつちこそよろしく。今回の案を出してくれたのはあなたらしいけど・・・本当に大丈夫？」

「ええ。もう覚悟はできてますから」

「リインフォースさん、かしら。融合したときに、その体が浸食される可能性は？」

「ほとんどないと考えてもいいでしょう。あつたとしても影響は最小です」

「そっか…なら始めちゃおうか。二人とも、そのベッドに寝てね」
目の前にはベッドが二つ。辺りにはいろいろなものがごちゃごちゃとしていた。

「あなたの中に、デバイスの記憶や意識、データなどを入れる。そ
うとう脳には負担がかかるとおもうけど・・・」

「データなどは、私の方でもサポートがききますので、大丈夫かと」

「悪いな、ネクサス」

「じゃあ、頭にこれはめて」

帽子にコードが大量にくつついたものをかぶる。こんなもんでいけるのか？

不安に思いながらも、ベッドに横になる。

「目つぶってー」

「「はい」」

「じゃあ・・・スタート！」

その声の瞬間、俺の意識は闇に葬られた。

「あれ、みんな？」

「はやてちゃん！」

「よかった、起きたんだね」

二人の少女は、はやてに寄り添っていた。

守護騎士たちは、現在事情聴取を受けている。

「あれ、剣也君は...？」

「それは・・・」

「リインフォースも消えとるし...どこにいったんや？」

時間は過ぎて現在12月25日の早朝、というか深夜だ。

なのはは両親に「今日は帰れない」と連絡はしている。

「そのことは、私から伝えるわ」

「リンディさん」

それから、剣也が今行っていることを話すと、はやては仰天した。

「そんな！あの子のために、剣也君は自分の体を使っただんですか！？」

「ええ、「影の仕事は、光の见えない俺にこそ適任。光の見える彼女たちには、負担をかけたくない」だそうよ」

「剣也君、そんなこともいつてたんだ」

「影の仕事、か。一人で背負うことないのに...」

「リンディさん、終わりましたよ」

「そう、どうだった？」

「プログラムの切り離しは成功、きちんと体には送りました。今は眠ってますね」

「そう」

「今はバグプログラムの破壊ですね。一日もしないうちに終わると思います」

「頑張つてね」

「了解です」

通信が終わり、それを聞いていた三人もほっとする。

「よかった、無事なんだ・・・」

「早く目ざめてくれるとええけど」

「そうだね」

俺が目覚めたのは、その日の朝7時。別の部屋のベッドだった。というか俺の部屋だな。誰が運んだんだろう？

「ん・・・」

「おはようございます」

「どれくらい寝てた？」

「十時間ほどですよ。あれほどの魔力を使ったというのに、もうほとんど回復していますよ」

「そうなんだ」

体を起こそうとすると、何かが布団をつかんでいた。おまけに二つ。

「おいおい・・・」

そこにはなのはとフェイトがいた。

「昨日、この部屋に運ばれてからずっとそばにいたんですよ」

「全く、風邪ひくぞ？」

起こさないように、そっとだっこしてベッドの上に乗せる。

「いい夢を、ご兩人」

そうして、俺は部屋を後にした。

「おはよう、父さん、母さん」

「ここは『ただいま』じゃないのか、剣也」

「それもそうだな・・・じゃあ、ただいま!」

「おかえりなさい!」

いきなり、母さんがおれを抱きしめてきた。苦しい…

「ちよ、母さん!」

「もう、心配したんだからあ…」

「悪かったって、ちゃんと笑顔で帰ってきたろ?」

そんなこんなで、おれはちゃんといえにかえってきた。

「おはようございまーす・・・」

「おはよう、二人とも」

「父さん、なんで二人を泊ませた?」

「いや、『そばに居させてくださいっ!』で強く言われたもんだから、つい」

「おいおい」

そんな感じで話していると、いきなり二人から抱きしめられた。

「おい、お前ら!」

「もう、心配したんだから…」

「起きてこないかと思ったんだよ?」

隣では両親がくすくすと笑っている。つゝゝゝゝ!

「とりあえず離れるー!」

クリスマスの朝は、こうやって始まった。

「はやて、いるかー?」

「剣也君!もう体は平気なん?」

「もう大丈夫だ。そっちは?」

「もう検査入院だけやな。今日だけは特例で外に出るけど」

「じゃあ、その前に時間あるか?」

「あるけど、何をするん?」

「クリスマスプレゼントだよ」

でもって、丘の上にある公園に向かう。雪が降っているため、肌寒い。

「はやて、ちょっと目をつぶってくれるか？」

「わかった」

目をつぶったのを確認し、一言つぶやく。

「モードシフト、『ナイトスカイ』」

そして……

「はやて、もう目を開けていいぞ」

「うん……って」

そして、はやての目の前に現れたのは、

「お久しぶり、というのは少し変ですね、我が主」

「リイン、フォース……？」

夜天の書、もといリインフォースの姿があつた。

（「あなたとの合体は、ちゃんと成功しています」）

（「なら、もう暴走することもないし、これからは普通に暮らせるわけだな」）

（「へえ。それで、非常に言いづらいんですが……」）

（「どうしたの？」）

（「あなたの体を主に使う場合と、私の体のデータを主に使う場合、ひとつ、注意しなくてはいけないことが出てきたんです」）

（「それって？」）

（「体が、入れ替わってしまうんです。言ってみれば、あなたの体が私の体になる、といった感じでしょっか」）

（「……俺の体が女性の体になるってか」）

これは、はやてに会いに行く前の俺とリインフォースの脳内会話。まあ、俺の体が女性になるって聞いた瞬間、背中に悪寒が走ったけどな。

バリアジャケットで姿が変わるときよりは楽だけどさ、意識も変わるわけだし。

（「まあ、受け入れてしまったんだから仕方ない。気にはしないで
おくよ」）

（「すみません・・・」）

（「いいって、そんな暗い感じだったら、はやても心配するだろ」）

（「それで、もう一つ驚くことがあったんですよ。あなたにとって
は最高のことだと思いますが」）

（「今度は何なんだ」）

（「それは・・・」）

その答えは、俺のすべてを覆すようなものだった。

「本当に、リインフォースなん…？」

「ええ。私はちゃんと、ここにいます」

そつと、はやての頭を撫でる。

その瞬間、はやては抱きつき、泣き始めた。

「…泣かないください」

「そんな…言われてもっ」

「（感動のご対面、つてやつだな）」

ちなみに俺はどこにいるかというと、体はリインフォースに代わっ
て（上書きされて）いるので、意識と感覚だけをネクサスに飛ばし、
こうやって一部始終を聞いている感じだ。

「そう言えば・・・剣也君はどこいったん？」

「一応ここにいる」

「うええ！」

泣き顔でめっちゃびっくりしていた。理由を話すと、まあびっくり
した様子だった。

「でも、ごめんな。このこのために・・・」

「いいって。それに、デメリットばかりってわけじゃない」

一回俺の姿に戻す。そして

「視覚共有」

そうつぶやく。

「・・・どうしたん？そんなにぼーっとして」

「いや、はやての顔ってそんなだったんだなーと」

「ええ!？」

（「感覚の共有？」）

（「はい。あなたと私は、ずっとユニゾン…合体といった方がわかりやすいですか。そのためか、不思議なことに感覚を共有できるんです」）

（「まさか、それって・・・」）

（「気づきましたか。ええ、つまりものを見ることだってできるんですよ」）

「やってみましようか？と言われたので、それに従う。すると・・・」

はつきりと、見えた。現在車の中、父さんと母さんがはつきりと見える。今までまったく見たことのない人の顔。それが、今現実で見えている。

「母さん、少しこっち見てくれる？」

「どうしたの？」

「こっちを振り向いた。・・・しっかりと見る事ができる。そのことに、俺は感動した。」

「今まで光のない俺に、光が見えたのだ。」

「少し、車とめて」

「どうしたんだ、剣也」

「いや・・・俺、これのおかげで…光が見えるよ。母さんの顔も、父さんの顔も、景色だって、はつきりと・・・」

「本当か!？」

「本当…?」

「ああ。・・・ってあれ？」

「景色が通常の状態に戻る。どういうことだ？」

「いい忘れていましたね。まだしっかりと制御ができないので、わ

ずかな時間しか行えないんですよ

ネクサスから声がする。リインフォースの声は俺の体の時はこつちから出る仕様だ。

「あなたがリインフォースさん？」

「はい、このたびは、あなたたちの子供に迷惑をおかけしました」

「いや、君のおかげで剣也は少しだけ光に出会えたんだ。こつちとしては何とお礼を言ったらいいか…」

というわけで、俺はまだ少しだが…光を取り戻した。

「ま、まだ持って1分少々か。今まで見てないものが見えるから、いいんだけど」

「ほえ、そんなことが」

「で、どうだった？俺からのクリスマスプレゼントは」

「・・・最高のサプライズやったよ、ありがとうな」

今度は俺に抱きついてきた。こんなことは初めてなのだが・・・まあ悪くない。

こうして、俺、もといたくさんの人を巻き込んだ「闇の書事件」は終了した。

あの時現場にいたアリサとすずかには、俺たちから話をして、まだ家族に言っていなかったなのは、リンディさんを交えて話をした俺は、まだどうするかわからないけど…とりあえずいろいろと頑張っっていくつもりではある。

管理局からのお誘いもきてはいるのだが、それはまだ保留ということでありまして…

とりあえず、この事件は終わった・・・かと思っただが、まだ続きがあることを、誰も知らなかった。

魔法少女リリカルなのは Don't Forget Memories
く本編 完

「終わったらしいな」

「助けに行かなくて良かったのか？相棒」

海鳴市の隣町のビルの屋上、一人の少年が何かと話していた。

「闇の書・・・ここまで魔力の波動は伝わっていたが、それが消えたってことは、事件が終わったってことだ」

「だが、それが消えてもあとが残る可能性がある、ってこともある」
少年の首には、Φの字が入った銀色のプレートがネックレスのようにかかっていた。

「この世界にいる魔導士は、あいつらだけじゃない」

「そのことを、しっかりと伝えないとなあ！」

足元に、蒼く光るΦの文字。

（「出会っのを楽しみにしてるぜ？剣也」）

本編最終回：Tの終わり／闇の終焉？（後書き）

ふう・・・終わりました！

12月から書き始め、ほんの2ヶ月ほどですね。初めてということ
でドキドキしながら書いていましたが、なんとか終わることができ
てほっとしています。

ただまだ終わりません。前回も言った通り、次からゲーム編が開始
します。

まだ描き始めたばかりなので、更新するのは少し遅くなると思いま
す。

もう少ししたら春休みも始まりますので、更新が止まりますが、そ
の時はまたご連絡します。

では、また会う時に。

ちなみに総合PVが38000件越え、ユニークは5000件越え
でした。ありがとうございます。

デバイス設定&魔法の設定（追加あり）（前書き）

今回はお話ではなく設定編です。

続きの話はかいているのですがあまり進んでいません・・・

デバイス設定&魔法の設定（追加あり）

デバイス設定

・ネクサス：インテリジェントデバイス

夢の中で剣也に託されたデバイス。製作者は「ウィーグル・アルトリア」。

銀色で、表面には剣十字が刻まれている。

夜天の書とほぼ同等のデータ量を記憶できるので、あらゆる情報を取り込める。

管制人格は女性型。剣也の良き相棒。

剣也がなぜ「光を紡ぐもの」と言ったのかの理由は、「二人に生きる光をつないでくれた」とのこと。

バリアジャケット設定

イメージとしてはリインフォースのジャケットを全体的に白くした感じ。

中のシャツは黒、クロス状にラインが入っており、色は赤。

上着は白の長そでで、ふちどりは赤。黒い手袋をはめている。

半ズボンをはいており、腰にはかまの用にスカートが付いている。ズボンは黒、スカートは白で。上の方に少し金属のプレートが付いている。

靴下は両方はいており、ハイソックス。靴は金属製で色は黒。

なぜかセットアップすると剣也の性別が女になってしまう。

髪も長くなり、セミロングぐらいになる。決戦後、髪は髪留めでまとめるようにした。

（髪留めは、ハヤテのごとく！マリアさんをイメージしてください）

魔法

・パーティクル・カノン（威力AAA-）

簡単にいえばスバル版デバインバスター。だが威力がけた違い。

- ・シャインブレード（威力AA）

手首あたりから刃を出す。長さは大体日本刀くらい。二刀流も可能。

- ・フェザースラッシュャー（威力AAA+）

シャインブレードを振り、衝撃波を相手に飛ばす。連続で振ることにより連射もできる。

- ・ブレード・ペネライト（威力AA+）

二本のシャインブレードで敵に突撃する。貫通能力が高いが闇の書に止められた。

- ・シューティングブレイザー（威力S）

強化版パーティクル・カノン。中に込める魔力の密度を上げて威力を上げている。

- ・ノア・インフェルノ（威力SS）

剣也が現在使える中で二番目に威力のある魔法。対象物に対し大爆発を起こす。

最終決戦では爆発を起こしたが、パーティクル・カノンのように砲撃として打つことも可能。

- ・シャイニング・ノア（威力SSS）

剣也が使える最大威力の魔法。両腕に魔力を込め、それを十字にクロスして放つ砲撃。

莫大な熱量を誇るため、打つ際に空気がプラズマ化してしまう。

なのはのスターライトブレイカーを超える威力を誇り、見た人の感想は「化け物」らしい。

ただ撃った後は魔力消費が大きいため、簡単な魔法しか使えない。

- ・インパクト・シュラーク（威力S-）

蒐集行使でヴィータの力を使った時に出した技。破壊力は本編にもある通りシュテルの防御をやすやすと貫くほど強い。

- ・ラグナロク（威力SS+）

はやての撃ったものと同じ大威力魔法。特に変更点はない。

- ・白金の祝福（威力SSS++）

リインフォースとのユニゾンで出せる現時点での最高威力を誇る魔法。

魔力で特殊な空間を作り、対象に向かって魔力で大ダメージを与える。特殊空間を作るのは威力がすごいので周りのものに被害を与えないようにするため。

レアスキル

・蒐集行使

はやてと同じで、蒐集した魔導士の魔法を使うことができる。

・サイレント・ヒーリング

魔法陣展開なしで回復魔法を発動させることができ、その回復量も折り紙つき。街中でのヴィータの回復、最終決戦でのなのはへの回復はこのおかげ。

（ヴィータの時は偶然防御魔法も追加された）

・リインフォースについて

剣也の体に取り込まれ、防衛プログラムも体から離れた。

（そのプログラムはマリエルの手によって破壊された）

それにより、感覚を共有することで剣也の目が見えるようになった。他にも湯船

に入った時の温かさや、味覚を共有することで同じ味を感じることができる。

それをネクサスはうらやましく思ったりしている。

（但し今は共有できる時間が短いので、訓練が続いている。だが目はそこまで訓練していない）

デバイス設定&魔法の設定（追加あり）（後書き）

厨二っぽい設定になってしまいました・・・まあ大丈夫でしょう。技のほとんどは「ウルトラマンネクサス」から取っています。

この前の映画にも出たそうですね。（ノアが）見にいていないので今度DVDでも借りようかと思っています。

では、また次回。

通算PV40000件突破！ありがとうございます。

50000件を超えたら記念で座談会的な物を開く予定です。

BOA編第一話（第十九話）：リインフォース、考える。（前書き）

と、いうわけではじまりましたBOA編。

一話目は戦闘はなく、リインフォース中心のお話です。

ちなみに第十九話というのは本編を含めた話数です。
では、どうぞ。

BOA編第一話(第十九話)：リインフォース、考える。

BOA編第一話(第十九話)：リインフォース、考える。

「ふっ！はあっ！」

事件が終わって、5日ほどたった。事情聴取や身体検査などたくさんのがあったのだが・・・まあ大丈夫だった。はやてやその守護騎士も一緒だったから、つらくもなかったからな。

それでおれは、庭で木刀を振っている。現在朝6時：30分ほど前から振り続けている。

(「まだ俺は弱い・・・いくら魔力があつたって、それを使いこなせなければ宝の持ち腐れだ」)

一撃一撃に、心をこめ、実際に敵を切るように鋭い一閃を繰り出す。

「これで・・・ラストっ！」

横、縦に連続で降り・・・終了した。

「お疲れ様です、マスター」

「ああ。少しシャワー浴びてくる」

机にネクサスを置き、浴室に入る。汗をかいたままほおっておくと風邪をひくからな。

(「リインフォースは…寝てるか」)

(「すう・・・すう・・・」)

昨日まで管理局ですつといういろいろ聞かれたからな・・・精神的にも身体的にも参っているんだろう。

(「起きるまでそつとしておこう」)

そんなことを思いながら、汗を流した。

「ふう・・・さっぱりした」

「お疲れ様、剣也」

母さんがホットココアを出してくれた。寒い朝にはちょうどいい。「精が出るわねえ。事件が終わってまだ少ししかたってないのに」

「まだ俺は弱いからね・・・強くならなきゃ」

「それはわかるけど、力の使い道を間違えないことと、無茶だけはしないでよ？」

「わかってる」

「私もそばにいますので、心配しないでください。母様」

「信頼してるわ」

父さんが起きて来たので、みんなで朝食をとる。ちなみにメニューはご飯に塩じゃけ、みそ汁にホウレン草のおひたしと言った感じの典型的な和食だ。

『いただきます』

質素かと思うかもしれないが、これくらいの方が俺にはちょうどいい。

「ふみゆう・・・あれ？」

「おはよう、リンフォース」

「おはようございます。朝食の時間でしたか？」

「ああ。一緒に食べるか？」

「ええ」

感覚を共有できるので、味覚を共有すれば同じご飯を食べることもできる。

「夜天の書がうらやましいです・・・」

「仕方ないだろ、ネクサスはインテリジェントデバイスだし、何より俺と一体化してないし」

塩じゃけの塩加減がちょうどいい。やはり母さんはすごいな・・・

「そういえば、今日はどうするの？」

「そうだなあ・・・宿題はちまちまつぶしてたから、もうほとんどなくなってるし」

リンフォースが主人格として動くということは、その間俺は何もしなくてもいい。つまり休憩中なのだ。それでおれは帰って来た後夜に宿題をつぶしていた。

「他のみなさんとの予定は？」

「年末だからな、忙しいと思って予定はなにも入れてない」

「じゃあおとなしくゆっくりしておけば？」

「そうするかな」

素直に、その言葉に従うことにした。

（「平和だな、この世界は」）

剣也は今すやすやと寝ている。何でも6時前から剣を振っていたそうだ。

（「悲しみが連鎖していたあのころとは違う・・・そうだな、暖かい世界だ」）

いくつもの世界、人々を苦しめて来た自分。それがついこの間、自分の主とその守護騎士、友に救われた。

（「私は、幸せになってもよいのだろうか？」）

私はロストロギアで、今でもその恨みを持っている人がいて、そんな自分がこんな生活を過ごしてよいのかと・・・

「ん・・・」

（「起こしてしまったか？」）

と思ったが、寝返りを打っただけだった。すると、もぐもぐと何かをつぶやいた。

「助けてやるからな・・・」

（「私を助けるときの夢でも見ているのだろうか？」）
と思っただが、そのあとの言葉に驚いた。

「恨みとか・・・つらさとか・・・そんなのから」

（「誰のことなんだろうか」）

「だからさ・・・楽に生きてくれよ・・・リインフォース」

（「！？」）

それで、寝言は終わった。

（「夜天の書、あなたは深く考えすぎなんですよ」）

（「考えすぎ？」）

（「この人は、自分のことよりもまず他の人を助けるような人なんです。それこそ自己犠牲の精神ですね」）

（「確かに、自分の身を使って私を助けたが・・・」）

（「あなたがスターライトブレイカーを撃った時、この人は自分の身を使って二人の少女を守ろうとしました。まだセツトアップもできなくて、魔力なんて全然使ったことすらないときに」）

（「そんな・・・」）

（「だから、もう少し甘えてもいいんじゃないですか？そして、気持ちを楽しんでみたらどうですか？」）

（「そうか・・・」）

確かにそう考えた方がいいかもしれない。だが・・・

（「せめてこの少年を、いや・・・もう一人の主を守ろう。「祝福の風」リインフォースとして」）

そう、心に誓った。

BOA編第一話（第十九話）：リインフォース、考える。（後書き）

リインフォースが起きるときってどんな感じなんでしょうか？
寝ぼけている感じを出すために少しかわいらしくしてみました。
この後の話は戦闘が多くなりますが、番外編も書いています。
では、また次回。

BOA編第二話（第二十話）：星光vs白金（前書き）

最初は星光の殲滅者とのバトルです。

BOA編とかいつときながら、若干GODの言葉も入っています。
では、どうぞ。

BOA編第二話(第二十話)：星光vs白金

BOA編第二話(第二十話)：星光vs白金

「ふああああ・・・」

「お目覚めですね、マスター。調子はどうですか？」

「ばつちり。ところで今何時？」

「えー・・・現在午後10時です」

「はあっ!？」

さつき寝てからそんなに寝てたのか!うわ、夜ごはん食べ損ねた・

・

「なんか冷蔵庫にあればいいんだけど・・・」
「と思い、下に降りようとした。」

「おや?管理局の方から通信が」

「?とりあえず出してくれ」

こんな時間に一体何だろう。

「ごめん剣也君、こんな夜遅くに」

「いや、自分も昼からさつきまで寝てました」

相手は・・・エイミイと言う人だったか。確かクロノ執務官の知り合いだっただ人だ。

「へそなんだ。で、要件なんだけど・・・海鳴市に結界が張られているの、それも何個も。他の世界にもあるらしくて、今守護騎士のみんなやなのはちゃんたちがいつてるんだけど」

「今からすぐに出ます、結界の場所をネクススに」

「ごめんね、こっちもできるだけサポートするから」

通信を切り、即座に着替える。コートを羽織って下に駆けおりた。

「剣也、こんな時間にどうしたの？」

「魔法がらみでちよつとね。すぐに片づけてくる」

「気をつけるんだぞ?」

「了解!」

こんな時間ならあまり人もいない。正直助かる。

「ネクサス、セットアップ！」

長い髪は髪留めでまとめるようにした。リインフォースに認識疎外の魔法をかけてもらい、空に上がる。

「さあ、行くぜ！」

「海鳴市のあるビルの屋上」

「・・・始まったか」

「俺たちも動いた方がいいんじゃないか？いくら実力があるとはいえ、あの数じゃ・・・」

「その時が来たら動くさ。別にここに来たのはあいつに会うためだし」

「そうだけだな・・・まあいいか、相棒らしい」

「理解がよくてよろしい」

「結界の数は3つ。市街地に一つ、海に一つ、山の方に一つです」

「今ここにいる魔導士は？」

「はいませんね・・・皆さん別の世界のほうに向かわれたようで」

「一つずつぶして行けつてことか・・・」

結界の中に入ったようだ。もうひどくはないがほんの少しだけ動悸を感じる。

「大丈夫か？」

「ああ。心配するほどじゃない」

魔力量は完全に回復しているし、無駄のないようにネクサスとリインフォースがサポートしてくれている。これほどまでに楽なのは初めてかもしれない。

「原因を作り出している奴が必ずいるはずだ。ネクサス、周囲一帯の魔力反応を探してくれ。俺の要素が当たってれば俺を抜いて一人のはず」

「わかりました。ワイドエリアサーチ展開・・・ここから約1km

離れた場所に、高町なのはさんと似たような魔力反応があります」
「偽物？もしくは同じ波長をもったやつみたいのがいるのか・・・」
とにかく行ってみよう。

「視覚共有」

相手との距離は100mほど・・・その姿は、まさになのはだった。
髪型と服装を除けば、の話だが。

「確かに似ているな・・・魔力光の色も同じ。敵だったら攻撃しづらいな」

「話しかけてみましょう」

もう少し近ずいて見ようかと足を踏み出した瞬間、

「っ、プロテクション！」

砲撃が飛んできた。とつさにシールドを張って受け止める。あつぶね、あと一秒でも遅ければやられてた・・・

「さすが闇の書の闇を破壊し、夜天の書に戻しただけありますね。
『白金の騎士』」

「そんな変な二つ名を持った覚えはないんだが？お嬢さん」

「マテリアルか・・・目的は闇の書の闇の復活と言ったところか」

「よくお分かりですね、管制人格。あなたからうまれているので、
わかるのは当然のことでしょうが」

「リインフォース、あいつは？」

「あれは私の中にいた『理』のマテリアルです。闇の書の闇を破壊したときのかけらが集合し、意思を持ったんです。マテリアルはほかに『力』『王』の二体がいます。もしかしたら別の世界に・・・」
「あいにくですが、全員この世界にいます。三人そろったらあなたなど一瞬で終わるでしょうけど」

「そーかい、ならそろう前に倒すまでだ。戦う前に名前を聞いておこうか」

「シュテル・ザ・デストラクター。またの名を『星光の殲滅者』」

「御崎剣也。こっちはデバイスのネクサス」

「そうですか、一応覚えておきましょう。倒したところには忘れてそうですね」

「倒される気は髪の毛一本ほどもねえ」

少し強い風が吹いた。風の音が響く。

「いざ、尋常に」

「パイロ…シューターっ！」

「フェザーバレット、ファイア！」

一瞬たりとも気が抜けない戦闘が続いている。戦闘開始から15分…両者一步も引かないという構えだ。

「なかなかやりますね！」

「そりゃどうも！」

空には二本、桃色と白金の線が踊っていた。時にぶつかり、離れ、数多もの魔力弾が飛び、砲撃が飛ぶ。

「すごい」

二体のデバイスはそう感じていた。まだ魔導士になって一週間もたっていない超素人が、相手の動きにしっかりとついていき、時に追いついて抜こうとしているのだから。

（一般的な魔導士では到底無理でしょうね・・・おそらく一瞬でかたがつくでしょう）

（「確かに・・・だが、なぜ剣也はあの攻撃についていけているんだ？」）

その理由は、今まで培ってきた鋭敏な感覚にある。

最初にヴィータとあった時、剣也はその攻撃をかわしている。それは周囲の音の変化を瞬時に読み取ったからだ。普段盲目の剣也は、それ以外の感覚を鋭敏にさせることで補ってきた。

だからこそ、この攻撃をかわし、受け止め、反撃できるのである。

「シャインブレード！」

手首から光の刃が出る。

「フェザースラッシャー、ガトリングショット！」

ガトリングの名にふさわしく、10連続で衝撃波が相手に向かって飛んでいく。

だが相手もそれでやられるほど甘くなく、それを避け、自分のところに飛んできたものは短い砲撃で消していった。

「うーむ・・・なのはと同じ砲撃タイプなんだが、機動力が高いな・・・」

「フエイトさん並みの機動力なら・・・」

「確かにそうなんだが、動きがわからない」

ふと、剣也があることを提案した。

「リインフォース、確か俺のスキルに「蒐集行使」ってのがあったよな」

「ええ。蒐集した魔導士の能力を使える能力ですが・・・まさか」

「そのまさかだ。フエイトの機動力で詰めた後、ヴィータの破壊力でノックダウン。あとは高速系の魔法で終わり・・・って感じだろう」

「この短時間でよくそこまで・・・あなたはどこかの戦場にでもいたんですか？」

「俺にとって、毎日が戦場の様なもんだ。一瞬たりとも感覚を途切れさせず、集中してその場の状況を判断する。俺がこんな体だからこそここまでできる」

「お話はすみしましたか？」

「ああ。お前を倒す作戦がな」

「笑止・・・あなたほどの素人に負けるほど、私は甘くありません」

「試してみるか？お嬢さん」

「望むところ！」

一気に距離を詰める星光。

「走る手間が省けた」

腰にこぶしを構え、一言。

「蒐集行使『鉄槌の騎士』インパクト・・・」

右腕にまとうは、赤い魔力光と三角形の魔法陣。相手の後ろに回り

込み、腰のひねりをつけ、一撃。

「シューラクッ！」

「な………っ!？」

防御をやすやすと貫き、空中にあった体は一瞬で地面にぶつかった。

「ふう……無駄な大技使わんですんだ」

「へす、すごい破壊力です……さすが『鉄槌の騎士』の力だけあります」
「背骨とか折れてないかな……できるだけ治療しておこう」

お人よし、と言われそうだが、これが俺なりの正義。たとえ敵でも、心配する心という音は必要だと思う。まあ極悪人は除くけどね。

落ちた場所には、あの子を中心にしたクレーターができていた。そこまで力を込めたと思ってないんだけどなあ……さすがヴィータの力だ。

「……そこまででかい傷はないな。骨折とかもないし。一応回復させておこう」

反撃されると大変なので、デバイスは預かっておく。

「マスターの回復魔法の力はすごいですね……あの『湖の騎士』の力を超えているんじゃないですか？」

「力はあってもコントロールとか、運用技術とかの面で大幅に負けてるよ。攻撃魔法とバインド系の魔法を覚えたら、シャルマさんに教えてもらうけど」

そう言いながら回復させていくと、目を覚ました。

「……なぜそんなことをしているんですか？」

「俺の勝手だ。気にすることじゃない」

「お人よしですね。戦場では真っ先に死ぬようなタイプです」

「今生きてるけどな。で、こんなことをした理由を話してもらいたいんだが？」

「仕方ないですね……負けたからには話します」

で、その理由というものが……早い話闇の書の闇、あの化け物の復活ということだった。

「だがあれは破壊しちゃったし、データも残ってないぞ？夜天の書は俺の中だし」

「マテリアル、いやシュテル。お前はもうその気はないのではないか？」

「・・・」

「私たちの旅は終わった。繰り返されてきた闇ももうなくなっただ。これからは普通に・・・」

「暮らせるわけありませんっ！たくさんの人を苦しめて来た私が、いまさら何を・・・」

「いいんじゃないかな」

「え・・・？」

「守護騎士とその主は、自分たちの罪を受け入れて、それを償うために働くつもりだ。そりゃ自分たちがしてきたことはたくさん苦しみを与えたかもしれない。だけどそれでよくよしてたら何も始まらない。過去じゃなくって、今を見ることが大切だと思う」

「この人はこんな性格なんだ。私ももう過去を振り返るのはほんの少しだ。だから、私たちと一緒に頑張ってみないか？シュテル」

「私、は・・・」

「なーに甘ったれたこと聞かされてんのさ、シュテル」

背後に、強い殺気を感じた。視覚を共有しておく。

「今度はフェイトの偽物か・・・名前は？」

「レヴィ・ザ・スラッシャー。もう一つの名前は『雷光の襲撃者』」

「ちっ・・・シュテル、だったな。どっかに隠れてる。巻き込む可能性がある」

「は、はい」

フェイトと同じなら、高速機動型・・・いや、超高速機動型と言った方がいいかもしれない。さっきの子と同じように性能の追加があれば、当たり前前に強いだろう。スピードを出すことはできるが・・・コントロールが難しいし、使いこなせなければアウトだ。

「お前を倒して、僕はあの血の怨嗟が続く闇を取り戻す。さっさと

倒させてもらっよう！」

「そんな物騒なこと取り戻させるか！行くぞっ！」

第二ラウンド、開始。

BOA編第二話（第二十話）：星光vs白金（後書き）

いかがだったでしょうか？次回は雷光vs・・・？
ついに正体不明のあのキャラが参戦します。果たしてその実力は？
では、また次回。

s t a n d i n g b y . . . c o m p l e t e !

祝！50000PV突破記念番外編：記念のR／トクって意外と難しい？（前

題名にもある通り、50000PV突破しました！

本当に、ありがとうございますっ！！！！

これも読者様のおかげです。今回は記念の番外編です。
では、どうぞ！

祝！50000PV突破記念番外編：記念のR／トクって意外と難しい？

祝！PV50000件突破記念番外編：記念のR／トクって意外と難しい？

作者「祝！PV50000件突破記念！」

剣也「魔法少女リリカルなのはDon't Forget Radio～！」

二人『わ～！』（ぱちぱちぱち）

作者「と、いうわけで読者の方々、本当にありがとうございますっ！これからも私は誠心誠意この小説を書いていく所存でございます……」

剣也「前振りが長いわ！もっとスマートに行こうぜ？」

作者「いや～、ついうれしくってな」

剣也「気持ちはわかるが……で、なんでこんなことを？」

作者「有名な作者さんとか、ラジオ企画とかをやってるのを見てな？とくにラモンさんの「とあ新」ラジオは面白い」

剣也「確かにそれは言えてるなあ」

作者「だからそれにあやかっというかなんというか、記念と言うことでやってみたわけだ」

剣也「なるほどね。じゃあ魔法少女リリカルなのはDon't Forget Radio」

二人『始まりま～す』

OP：STRAIGHT JET（栗林みなみさん）

作者「えー、最近魚シンクロデッキにはまってしまった作者のポツキーで～す」

剣也「この人のせいでジャケット着るたびに女の子になってしまっ

た主人公の御崎剣也です」

作者「基本は俺たち二人でやっていくぞ」

剣也「ゲストでも来るのか？」

作者「ま、一人か二人はね。じゃあ始めにこの物語について語ってみるか」

剣也「おー・・・一体どういった感じで始まったんだ？」

作者「それは去年の9月・・・俺が部活の休憩中の出会いだったな」

剣也「部活って？」

作者「詳しくは言えないが・・・ヒントとして「全国大会は武道館」「去年のゲストは半田健人さん」「地区大会は大体10月ごろ」と言っておこう」

剣也「はあ・・・」

作者「太陽の光が鉄に反射して、めちゃくちゃ眩しかったんだよ。

まさに某大佐が「バ。ス！」って感じな」

剣也「出会いじゃなくてきっかけじゃん」

作者「まあそうなんだが、その時に5分ぐらい目がちかちかしたんだよ。うまく目が見えない世界・・・って言うので、この物語の入り口ができた」

剣也「へっ・・・」

作者「それから物語は始まったんだが・・・なかなかうまく書けないし、おまけに地区大会やらまさかの全国にまでいっちゃったもんだから話が進まないし、締めにはテストまで来た」

剣也「そりゃ災難だったな」

作者「で、書いたやつを冬休み前に投稿して、休みに入ったわけだ」

剣也「冬休み中は？」

作者「実際の話、BOA編まで出来てたんだよな。だがいろいろと投稿した奴と違う」

剣也「一体どこらへんが？」

作者「まずはバリアジャケット。本編ではリインフォースの改造版で、おまけに女になっていたんだが・・・もとはダブルオーライザ

「だった」

剣也「まじで!？」

作者「そしてBOA編では三体一だった」

剣也「勝ったのか？」

作者「勝ったが、その後三人を守るためになのは、フェイト、はやとと対決。おまけに弱体化したガンダムエクシアリペア?でな」

剣也「まず勝てないと思うんだがな・・・」

作者「勝つには勝ったが、逃がした三人は守護騎士たちにつかまった。それを知った剣也は絶叫」

剣也「報われない結末だなあ・・・」

作者「まあそのあと仲間になって、そして剣也が部隊を作ることになった」

剣也「9歳で部隊長って・・・」

作者「目的は違法研究所とかの摘発だな。三提督の後ろ盾も受けているという部隊」

剣也「いろいろとすごいなあ」

作者「そんなことがあって、今に至るってわけだ」

剣也「お疲れ様だな」

作者「さーて、次のコーナーに行くぞー」

魔法少女リリカルなのは Don't Forget Radio

作者「決闘コーナー」

剣也「え、なにこんな物騒な名前なのにこのゆるさ!」

作者「このコーナーは、主人公の剣也君に原作キャラと決闘していただくコーナーです」

剣也「怖いわ!」

作者「ちなみに内容は『遊戯王』だ」

剣也「ほっ、実際に戦うわけじゃないのね・・・」

作者「さーて、対戦相手は・・・この方!」

なのは「こんにちは」

剣也「原作主人公じゃねえか！」

作者「はっはっはっこれぞ作者権限っ！こういった夢のようなこともできるのだ！」

剣也「ええい、こうなったらやってやろうじゃねえか！デッキを貸してくれ！」

作者「はいよ」

なのは「じゃあ剣也君」

剣也「ああ、いくぞ、なのは」

なのは&剣也『決闘！』

で、結果は・・・

なのは「先攻は私、ドロー！一気に行くよ！『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！効果によりこのモンスターをリリースして、デッキからもう一体の『ローンファイア・ブロッサム』を召喚して、さらにリリース！いでよ、『ギガプラント』！そして『おろかな埋葬』！デッキから『ダンディライオン』を捨て、効果によりトークンを二体召喚！そしてカードを二枚伏せてターンエンド！」

作者「最初からずいぶん飛ばしたな・・・さて、剣也はどうするか」

剣也「俺のターン！『ハリケーン』発動！場にある二枚の伏せカードを手札に戻す。『おろかな埋葬』を発動！デッキから『超古深海王シーラカンス』をすて、さらに『死者蘇生』！さっき捨てたシーラカンスを復活させる！そして特殊効果発動！手札から『フィッシュボーグ・ガンナー』を捨て、デッキから『竜宮の白タウナギ』二体、『レインボーフィッシュ』、『オイスター・マイスター』を攻撃表示で特殊召喚！ただしこれらのモンスターは攻撃できない」

なのは「攻撃できなかったら、意味ないんじゃないかな？」

剣也「まだ終わらないぜ？白タウナギとオイスター・マイスターを

チューニング！いでよ、『氷結界の龍グングニール』っ！」

なのは「こ、後攻ターン目でこれを！？」

剣也「まだまだ行くぜ？オイスター・マイスターの効果でトークンを召喚、さらに白タウナギ、トークン、レインボーフィッシュをチューニング・・・こい、『氷結界の龍トリシューラ』！」

作者「あらま、魚シンクロのワントーンキル戦法が決まった」

剣也「効果により場にある『ギガプラント』を除外！さらに墓地の『ローンファイア・ブロッサム』を除外！そして手札をランダムに一枚除外！」

なのは「わ、私のモンスターが！」

剣也「グングニールの効果発動！手札を二枚捨て、トークン二体を破壊！これで場はなにもない・・・行くぜ、巨大モンスター攻撃、三連打あ！」

なのは「きゃあああっ！」

作者「剣也の勝ち」

剣也「ここまでうまく決まるか？」

作者「まあ相手の伏せカードによるからな・・・今回なら『ポリノシス』『神の宣告』があつたら確実にシーラカンスの時点で止められた」

剣也「『ハリケーン』が通れば楽に決まるからな。まあ『冥府の使者ゴーズ』が来たら厄介。『ゴヨウ・ガーディアン』があれば楽だが今は禁止だからなあ」

なのは「くやしい！」

作者「これにてコーナー終了」

剣也「実際にこのデッキ作ったのか？」

作者「残念ながらまだだ・・・ウナギと水霊術が足りない！あと埋葬も死者蘇生とかもな！」

魔法少女リリカルなのは Don't Forget Radio

作者「意外と疲れるな、ラジオって」

剣也「まあ話すのは結構疲れるらしいからな」

作者「まあもう少して終わるしな。では次のコーナー、「もしも。だったら」」

剣也「なんじゃそりゃ」

作者「日常生活にある何かがもしも。。。だったら、というのを想像してみるコーナーです」

剣也「普通のコーナーだ」

作者「いいじゃないか。ではまず最初は・・・」

「もしも、学校の授業に『ゲーム』があつたら」

剣也「学校崩壊するんじゃないね？」

作者「PTAからは苦情が続出だろうな。ちなみに授業ではカードゲーム、PCゲーム、家庭用ゲームなど・・・学年が上がるごとに難しくなり、はては実習としてカジノに行くことになる」

剣也「賭けごとじゃねえか！やめんか！」

作者「もしもなんだからいいじゃん」

剣也「そりゃそうなんだがな・・・では次」

「もしも、なのはの出演キャラクターが全員女だったら」

作者「禁断の方向にしか向かない俺の頭」

剣也「まあ、仕方ないか・・・」

作者「なの×フェイしか知らんけどな。だか夢の展開もありうるわけだ」

剣也「たとえば？」

作者「この作品なら、剣也×はやてとか」

剣也「やめい！」

作者「Strikersならまさかのグリフィス×ヴァイス」

剣也「やばい方向にしか進まんから次に行く！」

「もしも作者がリリなのの世界に行ったら」

剣也「一体何する？」

作者「自分が何か助けられることができたなら何かするけど、なにも力とかが無かったらまったり過ごすよ？翠屋でコーヒー飲んだり、士郎さんと知り合いになるとか。なのはたちとはよくて『親しみやすいお兄ちゃん』程度だな」

剣也「普通だなあ」

作者「普通が一番なのさ。普通に生きて、結婚して、子供育てて普通に仕事して定年退職して普通に死ぬ。とかいつときながら時々こういう世界に行きたくないんだよなあ。自分がチート能力で悲しい結末をハッピーエンドにするとか」

剣也「ほうほう」

作者「次回作とかでやってみるか？それとも番外編とかで」

剣也「それはあんたに一任する。じゃあこのコーナーはおしまい！」

魔法少女リリカルなのは Don't Forget Radio

作者「エンディングです」

剣也「Don't Forget っていうのに、絶対に忘れられそうなラジオだったな・・・」

作者「書いてるうちに薄々感じてたよ・・・せめて心の片隅にでも記憶していただくと幸いです」

剣也「だ、そうですので・・・こちらからもよろしくです」

作者「この作品はBOA編が終わったら一応完結させる予定です。続編を書くか、別の作品を描くかは...まだ決めていません。おそらくこの作品が終わるのは4月ごろになるかと思います。もうそろそろで春休みに入るので」

剣也「次は雷刃の襲撃者との戦闘だっけ？」

作者「そうだ。そしてついにあのファイの字のキャラ参戦！果たしてその正体は？」

剣也「おたのしみに」

二人『では、これから魔法少女リリカルなのは』Don't Forget Story』を、よろしく願います！』

ED: Beautiful Amulet (田村ゆかりさん)

剣也「ところでなんでOPがなのはのじゃなかったんだ？」

作者「最近この主題歌のアニメをよく見るから」

剣也「さいで」

祝！50000PV突破記念番外編：記念のR／トークって意外と難しい？（後

なんかものすごくはっちゃけた内容になりましたね。ものすごく書いてて『こんなの出して大丈夫かな・・・』と思いながら書いていました。

本文にもある通り、おそらくこの作品はBOA編が終わったら終わりにする予定です。結末は・・・まだ書いていません。続けるかどうかで決まってきますし。

では、これからもよろしく願います！

BOA編第三話（第二十一話）：雷光vs青の閃光（前書き）

やっと新キャラ参戦となります。番外編をはさんだので少し出すのが遅くなつてしまいました・・・では、その実力をご覧あれ。

OP: Just φ、s

BOA編第三話(第二十一話)：雷光vs青の閃光

BOA編第三話(第二十一話)：雷光vs青の閃光

「ちいつ！」

「ほらほら！遅い遅い！」

くそっ、相手の動きが速すぎてついていけない！瞬間移動でも使ってんのか！？

(「蒐集行使でも使える最大のスピードはフェイトだ・・・他のをまだ読んでいないから、それを使えば勝てるかもしれない。だが失敗すれば・・・」)

どこかの建物の壁にぶち当たって自爆。

「こうなったら・・・」

自分の周りに大量の魔力弾を形成する。威力はAくらいでいいだろう。

「オールレンジ、フェザーバレット！」

これなら防御しても削れる！避けられるわけがない。と思っていたんだが・・・

「ぬるい」

あろうことかほとんどかわした。来たのは障壁で防ぎ、あるものは魔力刃で切ったり。

「うそお！？」

「やっぱり素人だね！僕を倒せるはずがないっ！」

「あーっ！めんどくさい相手だこん畜生っ！」

さっきの相手がどれほど楽だったか。もしこいつが大威力砲撃を使えたらたまったもんじゃない。

「うーん、つまなくなってきたなあ」

そんなことを言うと、チャキ、とその魔力刃がついた杖を構える。

「だからさ・・・」

瞬間、

「ここで、サヨナラ」

「っ」

背後に回られ、首に刃が迫る。まずい、防御、間にあわ・・・

「shouting」

「っ！」

どこからか魔力弾が飛んできた。色は青・・・

「かわいい女の子いじめるのは、どうかと思うんだが？」

「レディには優しくしないと、相棒」

目の前には、黒を基調とし、胸や肩に銀色の装甲がつき、ひじやひざにサポーターがついたバリアジャケットを着た一人の姿。

ぶつきらぼうだが、優しい声。懐かしく、俺を支えた声。

「久しぶりだな、剣也？」

「な、なんでお前がここに？」

「お前に会いに来たら偶然立ち会った。ピンチっばいから助けに来たんだが、余計だったか？」

「いいや、むしろナイスタイミングだ」

水無月弓弦・・・俺が転校してくる前の最高の親友だ。小学校に入った当初、俺はいじめられていた。それを救ってくれたのが、弓弦だ。それから俺たちは親友になり、転校するまで仲良く過ごした。

「それにしても、なんでお前が魔法を・・・って魔力光はあの時から見えてたか」

「あー。あの時の疑問はやっとわかったのか。で、なんでお前は女の子？」

「ジャケットきたらこうなるの。なんでかは製作者にきかんとわからん」

「ふーん」

「僕をほおっておくなーっ！」

「すまん、忘れてた」

「ええい！こうなったらまとめて相手してやる！」

「こっちは俺が引き受ける。お前はもう片方の反応に行っておけ」
「オツケー・・・じゃあ、弓弦」

「なんだ？」

「死ぬなよ」

「そっちこそ」

握りこぶしをぶつけ、俺は空に上がった。

「さーて、行こうか・・・サンダーガール」

「お前なんか、僕が一瞬で終わらせてやる！」

「どうかな？」

高速戦闘が主体か・・・まああれのスピードほどじゃない。おまけに威力もそこまでないしなあ。

「初めっから飛ばしていくか？相棒」

「別にどうでもいいんじゃないか？あれを出せば一瞬だし」

「それもそうか」

「こないのなら・・・こっちから行くよっ！」

突っ込んできた。感情的だな・・・

「はあっ！」

腹に攻撃が当たる。だが・・・

「もうちょっと威力あると思ったが、それほどもないな」

「え、ええっ!？」

俺の体はきられることなくそのままだ。

俺のデバイス、『ファイ』は防御力が高く、並みの攻撃ではほとんど傷つかない。だからこんな真似ができる。そして・・・

「こんだけ近けりや、意地でも当たるな」

掌底についている砲口を向ける。相手の顔が恐怖に染まった。

「フィオキーナ・シュートツ！」

「か・・・はあっ！」

こんだけ近距離なら、ダメージは通る。おまけにあの薄いバリアジヤケットなら、ダメージは高い。

「この一撃で終わったかな？」

「それならうれしいけどな」

「一応まだジャケットは解かない。不意打ちに備えとく必要があるからな・・・」

「フォームチェンジ、『スプライトフォーム』っ！」

そう言うて出て来たのは、さらに装甲を薄くしたバリアジャケットをまとい、手には大剣を持ったさっきの子。

「しぶといな・・・お前、名前は？」

「レヴィ。レヴィ・ザ・スラッシャー」

「俺は水無月弓弦だ。こいつは相棒のファイ」

「よろしくな」

相手を見るからに、一撃食らったらそれが致命傷になりかねない・・・だが、スピードを極限まで上げればそれを回避することだってできる。まさにもろ刃の剣・・・ならこっちもだな。

「ファイ、俺たちもあれで行くぞ」

「撃ったら相手が意識不明になるんじゃないか？」

「死にはしないから大丈夫だろ」

「この一撃で終わらせるっ！行くぞ、雷光輪・追の太刀『極光』！」

「ッ、ホーミングタイプか！」

あの大剣から打ち出されたなら、威力も高い・・・障壁なしなら確実にダメージを受けるな。

「逃げてるうちに『アクセル』のセット準備！ファイ、頼むぞ」

「任せとけ！」

高速で飛んでくる雷撃の衝撃波をかわしながら、準備をしていく。それにしてもさむそうだなあの格好・・・この冬空であんな格好したら間違いない風邪をひくだろうなあ。

「準備完了！あとは近づくだけだ」

その言葉とともに、左手首に腕時計を少し改造したようなものがつく。横に少し伸びた板がつき、そこにはプレートがもう一枚セットされている。

「距離を50mまで詰める。詰める間にポインターをつけといてくれ」

「了解だ」

「いい加減、当たれえ！」

弾幕を張るように魔力弾を飛ばしてきたが、受け流すようにかわす。距離をどんと詰め――

「50だ」

ポインターはすでに取り付けてある。

「オツケエ！『アクセルフォーム』、発動！」

その言葉とともに、俺の胸の装甲が肩にスライドする。体に流れる青い光はすべて白く染まり、胸は機械製品の内部の様なものが付いている。

「10秒で終わらせる」

「僕をなめるなあッ！」

「start up！」

腕時計のボタンを押す。するとエンジンのような音が響き・・・相手の動きが、ほぼ完全に止まる。

これが俺たちの奥の手、『アクセルフォーム』。腕についている『アクセルギア』のボタンを押し、プログラムを起動させることで10秒間だけ通常の1000倍の速さで行動できるという秘密兵器だ。だが10秒を過ぎると使用者に多大な負担がかかるため、それ以上の使用はしない。

「はあッ！」

こぶしを何度もたたきこむ。残り時間5・8秒――

「6,7発たたきこんで意識を飛ばす」

「ready」

地面をけり、相手の頭上5メートルほど上に上がる。

「Exceed charge」

先ほど足につけておいたポインターから、三角錐が飛ばされる・・・その数、7つ。

残り時間、4.3秒――

「アクセル・デルタスマッシュ！」

瞬間移動のように連続でキックをたたきこみ…

three two one time out

高速の10秒が終わった。地面に着地する。

Reformation

肩の装甲が元の場所に戻り、白いラインも青くなる。相手は…

「きゅ…」

目を回してぶっ倒れていた。

BOA編第三話(第二十一話)：雷光vs青の閃光(後書き)

ほとんど仮面ライダー555の性能をつけた新キャラ、水無月弓弦君&デバイスのファイ。いかがだったでしょうか？

このキャラは元から考えてはいたのですが、その時はバリアジャケットが仮面ライダーWでした。(ユニゾンデバイス有)

設定はこの次のお話の後につけます。

いよいよ最後のマテリアル、『闇統べる王』こと『ロード・ディアーチェ』戦です。果たしてその結末は？

では、また次回・・・

BOA編第四話(第二十二話)：主vs白金&祝福の風(前書き)

マテリアルとの戦闘もついに終了！最後の相手は「闇統べる王」です。

今回は少し原作を入れてみました。リインフォース編のラストバトルの必殺技がわかる方なら理解はできるはず・・・

春休み前の更新はこれがおそらくラストです。次回の更新は1ヶ月後くらいになるかと・・・

では、本編をどうぞ。

BOA編第四話(第二十二話)：王vs白金&祝福の風

BOA編第四話(第二十二話)：王vs白金&祝福の風

「先ほどの男性は誰なんですか？」

「俺の転校する前の親友だ。名前は水無月弓弦、魔力光は青だ。思えばあの時から、ずっとあいつは青色だったんだよな・・・特に気にはしなかったんだが」

「マスターと違って防御力特化型みたいですが…勝てるのでしょうか？」

「あいつをなめてもらっちゃ困る。小さいころから剣道やらテコンドーやら合気道などなど・・・多種多様な武道をこなしてる。簡単に負けるはずがない。現に俺が魔法を使わなかったら負ける確率は8,9割だろうな」

「そんなにですか！？すごい方ですね・・・」

「そんなこと言ってる間に着いちやったな。相手は・・・」

視覚を共有して相手を見る。それははやての色違いっぽい人が腕組みをして宙に浮いていた。

「貴様があの闇を封じ込めた当人か・・・なかなかの面構えではないか」

「偉そうに話しやがって・・・名前は」

「我の名はロード・デИАーチエ。またの名は『闇統べる王』だ」

「あろうことが主の姿とは・・・少しむかつとします」

「ふん、人の体に入ることではか生きれない欠陥融合騎が、偉そうな口を「少し黙れ、この屑が」なっ・・・」

俺の中で、何かのスイッチが入った。

「確かにリインフォースは俺の体の中で生きているがな・・・決して欠陥なんて無い！俺や守護騎士、友達…そして、主を死んでも守ろうとした最高の融合騎だっ！それを侮辱したお前は、絶対に許さねえっ！」

「ただの塵芥が、そのような口を・・・いいだろう、気様ごとその大切な融合騎を殺してくれる！」

「来いよ・・・お前だけには絶対に負けないつ！行くぞ、リインフォース！」

「ああ。いくぞ剣也」

「ユニゾン・イン、セット完了、いつでもどうぞ！」

「「ユニゾン・インッ！」」

初めてのユニゾン・・・心と体が一体化する感覚がある。

「適合率80%…身体への有害な影響、なし」

「ああ・・・」

俺の髪は銀色になり、後ろの翼は片方が黒、もう片方が白になる。スタイルの方は、15歳くらいの女の子くらいか？

「さあ、お前の罪を数えろっ！」

右手をのばし、人差指で敵を指さす。

「罪など・・・いまさら数えきれるかあっ！」

「エルシニアダガーッ！」

「「ブラッディダガーッ！」」

白い短剣と、赤い短剣が衝突して煙が上がる。姿が見えないと厄介なので、一気に距離をとる。

すると案の定砲撃が飛んできたので、障壁で受け止める。

「ユニゾンしてるからかな？魔力量が上がった気がする」

「そうでしょうね。現に今の魔力量の限界はニアEXですよ」

「EX？」

「測定不能と言うことです。それほどまでに魔力があれば、全力で砲撃なんか打ったら国・・・もしかしたら星が消せるかもしれません」

「うわーお・・・」

恐ろしい力を持ってしまったもんだ・・・

「相手がはやての偽物なら・・・蒐集行使『夜天の主』」

実際にははやては蒐集されていないのだが、夜天の書の主ということと使えるようになっていいる。

「10秒間で一気にチャージする。リインフォース、その間の防御を頼む」

「わかりました」

足元に三角形の魔法陣が展開される。どれだけ威力を上げられるかが勝負だ。

「なにをしようとしているかわからんが…止まっているならここで倒すまで！」

あらゆる方向から魔力弾やら砲撃が飛んでくるが、すべてリインフォースの障壁に阻まれる。

「10秒たった！これでまず大ダメージを狙う！」

両腕を前に向け、そこからさらに魔法陣が展開される。

「響け終焉の笛…ラグナロクっ！」

はやてが防衛プログラムに向けて撃った大威力魔法だ。これなら・

「ならば我もいくぞ！永劫の闇に沈め、塵芥・・・エクス、カリバ
ーっ！」

黒い魔力と白い魔力がぶつかり合う。威力は同等・・・10秒ほどたち、お互いが放出をやめた。

「チッ、やはり『王』を名乗るだけはあるってことか」

「なめてもらっては困るぞ、若造が」

だがある程度のことは分かった。さっきの攻撃が通らないのなら、それを超える威力を出すだけの話だ。

（「シャイニング・ノア級の一撃なら倒せるが・・・いや、こいつにはあれで行く」）

俺の力と、リインフォースの力をあいつに見せつける。

「リインフォース、あいつに目に物見せてやるっぜ」

「一体どうやって？」

「こっやって、だ」

さつき考えたことを提案してみる。

「いけますね、今の私と剣也なら」

「だろ？」

「何を話しておる？」

「俺とリインフォースの力を、お前に見せつけるための作戦だよ」

「ふん…いいだろう。どれほどのものか見せてもらおうか！」

その余裕、今すぐに消し飛ばしてやる…

右腕に、白い円形の魔法陣、黒い三角形の魔法陣が展開される。

その二つは重なり、白い円の中で三角形が回るように見える。

「見せてやるよ…これが、俺たちの…」

自分の限界を、見せつける。SSランクオーバーの、星さえ破壊
しかねないその力を、教えるために。

「光だつつつ!!!」

Full drive mode

バチバチと何かがはじける音が体から響く。体はうすく光り、ところどころが何かのノイズの様に歪んでいる。外からはそう見えるだけで、身体的にはなにも悪いところはないのだが。

「なっ…!!？」

「お前が散々バカにした、俺たちの力を見せてやるよ。いくぞ、リ
インフォースっ！」

「ああ、剣也っ！」

腕に、バスケットボールほどの魔力球を作り出す。それを持ったま
ま…

「「はああああああっ!!」」

相手に突撃していく。

「来るな…来るなああっ！」

錯乱したように魔力弾を飛ばしてくるが、すべて無効化される。

そして、その魔力球を相手に押しつけ、飲み込むように巨大化させる。

「っ……？」

飲みこまれた球体の中は、白。何のよどみもない、ただの白だ。

「我は……生きているのか？」

「ああ。まだ俺たちの技は終わってないからな」

空中には、翼を広げ浮いている剣也の姿。白と黒の翼は、なんのけがれもなく広がっていた。

「今は眠ってる。お前は俺が……救ってやる」

少し悲しそうな表情を剣也は浮かべたが……一瞬で真剣な顔に変わる。

「白金の祝福！」「今、ここにっ！」

放たれたその一撃は、王を貫き、その空間ごと破壊した。

そして――

「ユニゾン・アウト」

そこには、白金の二枚の翼を広げ、優しく王の体を抱きかかえる一人の騎士の姿があった。

BOA編第四話(第二十二話)：王vs白金&祝福の風(後書き)

最後の技はリインフォース編ラストで出せるフルドライブバーストの技『夜天の祝福』の改造版です。威力は結構違いますが・・・
「俺たちの・・・光だっつっ！」の言葉は、この前のウルトラマンの映画のPVから拝借しました。なんか合う言葉かな…と思ったので。

この後はこの事件の後日談をはさんで、終わりにします。

春休み中に出来上がると思いますので、読者の方はすみませんがお待ちください。

では、また会う時に・・・

BOA編第五話（第二十三話）：罪の責任（前書き）

久しぶりの更新となります・やっと部活の方に戻れたので・・・
いつも寮暮らしなので、部屋に戻らないとインターネットが出来ないですね・
では、本編をどうぞ・

BOA編第五話（第二十三話）：罪の責任

BOA編第五話（第二十三話）：罪の責任

「これで質問は以上です。もう戻って結構ですよ」

「はい。ありがとうございます」

私はあの男・・・御崎剣也に敗れた。他のマテリアルも敗れたようだ。突然レヴィの前に現れた男も相当のてだれなのだろう。

現在は管理局の「アースラ」という船で事情聴取が終わり、艦長に終了を言いに行っているところだ。

（とはいってもどこにあるか教えてもらいませんでした…誰かに聞きましょうか）

と思い、誰かを探したところすぐに見つかった。

「あの、少しよろしいでしょうか？」

「？どうかしましたか・・・って」

その声は、つい先ほど聞いた声だった。

「シュテルじゃないか。一体どうしたんだ？」

弓弦をリンディさんに紹介し終え、帰ろうと思って歩いていたらしユテルに声をかけられた。

それにしてもリンディさんと話すときの弓弦は丁寧語だったな・・・あいつは身分や立場をすっかりわきまえるタイプだからな。

「すみませんが、艦長室はどこですか？先程用事がすべて済んだのでその報告にでもと」

「そうだな・・・説明するのも面倒だし連れて行くか。ちょっと時間食うけどいいか、弓弦」

「構わないぜ」

sonでもってシュテルをリンディさんのところに連れて行き、それが終わるまで外で待っていた。

「お待たせしました」

「いや、そこまで待つてないけどな」

「剣也、これからどうするんだ？一応親には今夜は帰るのは無理だとは言ったんだが・・・」

「つて、弓弦親に自分が魔法使いって言ったのか？」

「ああ、なつて一週間ぐらいたつてからな。なつた時は驚いたな・・・」

「おふた方、立ち話もつらいと思うのでどこか座れるところに行つた方がよいのでは？」

「それは言えてるな」

「サンキュ、シユテル」

「いえ、当然のことを言つたまでです」

助言を聞き、ベンチか何かを探しているとすぐに見つかった。

「じゃあ、弓弦が魔導士になつた理由を聞こうか」

「そうだな。あれはお前が転校してから一週間ほど経つた日だったか？偶然道端でこいつを拾つたんだよ」

「俺は別の世界から実験中に飛ばされちまつたんだ。管理世界で、魔法よりも技術が恐ろしく高い世界でな。そしてプログラムを入れる途中で装置に不具合が起きて、この世界に飛ばされちまつたわけだ。まあその世界の名前は記憶からぶっ飛んじまつてるが」

「それはまた・・・それ以外に、その時に大事なところなどが壊れたりしなかつたのですか？」

「幸いなかつた。基本のＡＩや戦闘プログラム、バリアジャケットは展開できるようになつてたからな」

「で、待機形態になつてたこいつを拾つて家に帰つたら突然話してな。そして魔法使いになつたわけだ」

「友達になつたところからずっと青色でおかしいと思つたら、原因が魔力があるつてことだからな」

「ほう・・・」

「この目は気持ちわかる以外に、魔力光がわかるようになっていたんだよ。まあ黒い魔力光の人は分からないからネクサスとリイン

フォース任せだけだな」

こいつとまた話せるときが来るとはな・・・正直ホッとしてる。

「はあ・・・」

「・・・」

隣でシュテルがため息をついていた。

「どうかしたのか？」

「いえ、少し気が抜けてしまったというか」

「今まで戦いにしか身を置いていなかったから、この平和な空間に慣れていないのでしょう」

「なるほどね」

リインフォースから聞いた話だが、俺が夢で見たあの三人がいたときはそれはもう戦乱の真っ最中だったらしく、血で血を洗うようなものだったという話だった。

「いや、あのころが懐かしい・・・というわけではないのですが、こんなところに自分がいていいのかと思ってしまっただけ」

「いいんじゃないのか？特に人的な被害もないし、危険もないんだろ？」

「検査中に私と同じ要領でプログラムを抜いたはずですし、その危険性はないはずですよ」

「それでも、今まで私たちがしてきたことに責任を感じてしまうんです。被害者からしてみたらすぐに殺してしまいたいくらいでしょうし・・・ね」

「ああ・・・」

確かに納得できる話だ。はやてと守護騎士たちもその話をしていたが、やっぱり今までとてつもない被害をもたらしてきたもんだからその償いとなれば相当なものになるし、被害者も『なぜこの人たちが生きているんだ』という話になるだろう。

ふと、弓弦が口を開いた。

「ある人が言ってたんだよ。『人は生まれながらにして罪を持っている。その罪は年を重ねるたびにどんどん増えていくが...そのすべ

てを数え切って、その重みをすべて知ることができたとき、ちゃんとした人として完成する』ってな」

「それは、おやじさんの受け売りか？」

「まあ・・・な」

こいつのおやじさんはものすごくかつこいい。弓弦の武道の師匠もやっていて、転校前は俺もお世話になっっている人物だ。今はどこかに行っているらしく、息子の弓弦でも行方を知らないとのことだ。

「だからさ、罪を犯したことに責任を感じるなら、そのすべてに責任を持って、今度は人として頑張ればいいんじゃないかと思うわけだ」

「そうですか・・・少し気が楽になりました。ありがとうございます」

「力になったのならよかった」

そして、俺たちは元の町に帰った。

帰る途中で、弓弦もこっちに引越してくることを知らされた。何でも母親の方の転勤らしい。

「これからよろしくな」と言われ、俺たちは固い握手をかわした。

「ただ今戻りました、レヴィ、ロード」

「遅かったねー」

「なにを話していたのだ？」

私たち三人は同じ部屋で保護されることになった。そのまま管理局に行くのかと思ったのだが、何でも御崎剣也の計らいで「闇の書の残滓ということが分かれば恨みを増やす原因になる」ということで、そのことを伏せてくれているそう。本当にお人よしな人だとおもう。

「罪についての責任の考え方ですよ」

先ほどの話を伝えると、やはりあの水無月弓弦という男の言葉が気になるようだった。

「その罪のすべてを数え切る・・・か」

「我々が犯してきた罪は数えきれん・・・だが一つ一つ償えば、どうにかなるのだろうか？」

「わかりません。ですが、私たちは今こうやって生きています・・・それならば、しっかりとやることをやっていけばいいのではないでしょうが」

本来なら私たちはプログラムで、そのまま消えるはずだった。だが、検査の時にプログラムを書き換え生きることができている。

「思ったんだけどさ、なんでぼくたちを殺さなかったんだろっね？」

「我もそれは思った。一体なぜだろうか？」

「そう言えばいい忘れていましたね。何でも二人揃って・・・」

『いつか友達になれる気がしたから』

だそですよ？」

「友達かあ・・・なってくれるのかな？」

「わからん。だがそう言ってくれるのならなってやろうではないか」

また会えるのなら、今度は三人で会いに行つて、友達になろうと決めた私たちでした。

BOA編第五話（第二十三話）：罪の責任（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は会話ばかりだったので、結構疲れました。

ちょっと話を変えて、震災で被害を受けた方々へ。

自分は影響を受けていないため、実際に被害を受けた方の気持ちをしっかりと理解することは難しいです。それこそこの震災の影響は大変なものだと思っています。

ですが、募金をしたり無事を祈ったりすることは出来ます。

ひとりの力は少ないですが、それでも頑張りたいと思っています。この小説を読んだり、または別の小説を書いている方でも被害をうけている人はいると思います。

同じ（私はずいぶん素人ですが）小説家として、応援のメッセージを贈りたいと思います。

頑張ってください！

今はコレくらいしか言えません。無駄に言葉を並べてしまうと私の言葉で傷ついてしまう方もいらっしゃると思いますので。

いち早くライフラインの復旧や原発の影響がなくなりますよう心より祈っています。

BOA編第六話(第二十四話)：名前と新部隊と部隊長？(前書き)

物語もいよいよクライマックスです・12月から結構長かったなあ…
最終話はおそらく4月になります・それまでちよつとの間お待ちを・
では、本編をどうぞ・

BOA編第六話(第二十四話)：名前と新部隊と部隊長？

BOA編第六話(第二十四話)：名前と新部隊と部隊長？

年が明けて、学校も三学期。弓弦も転校してきた（なおかつ俺たちのクラス）。

学校に俺が知るだけで4人（自分を含む）魔道士がいるというすごい状況となった。

来年になればはやても入学するから、5人になる。簡単な事件ならこの5人で解決するんじゃないか？

俺は今、学校の屋上で空を見ていた。クラスのみんなには目が見えるようになったことは伝えていないし、もちろん医者にも伝えていない。魔法がないこの世界に魔法の存在を知られたら間違いなく混乱に陥ると思ったからだ。

（「青いな・・・」）

（「雲ひとつない青空ですねー」）

弁当の飲み物用として持ってきていたコーヒーをカップに注ぎ、一口する。

寒さはまだ続いているので、この暖かさは身にしみる。

「やっぱり自分で淹れたほうがうまいな」

（「確かにコーヒーの味だけ母方に負けていませんからね」）

料理では負けるのだが、コーヒーだけは負けていない。そのうち料理の実力でも越したいものだ。

「なーに一人でつぶやいてるんだ？」

「弓弦か・・・コーヒーいるか？」

「いたどころ」

別のカップに注ぎ、手渡す。

「うまいな」

「だろ？」

手すりに寄りかかりながら、口を開いた。

「どうだ？この街は」

「空が青いし、人の笑顔も絶えないいい街だな。ここから高町や八神の様な魔導士が生まれたのは少しびっくりだが」

「確かにそうだな」

家族に魔法を使える人はいないらしく、リンディさんやマリエルさんに言わせると『突然変異の様なもの』らしい。

「あいつらに、『名前で呼んでくれ』って言われてたが、やはり名字で呼ぶのは変えないんだな」

「一種のこだわりだ。これだけは曲げん」

（「相棒も頑固だなあ。レディにはもう少し優しくするもんだぜ？」）

（「るせえ」）

念話で聞こえてくるやりとりに、少し笑ってしまふ。

「そう言えば、あの三人はどうなったんだ？」

「この前連絡があつて、今度の土曜か日曜に来てほしいとのことだ」「そうか」

なにがあるのかは分からないが、とくに用事もないので了解しておいた。

「俺も行こう。ちょうど俺も用事がない」

「なら土曜の１０時に学校集合で」

「了解した」

「「お邪魔します」」

「いらっしやい。あの子たちも待つてるわ」

「来てるのか？」

「ええ。何でも『話したいことがある』って。すぐにでも会いたいらしいわ」

「ふーん」

フェイトの家でもあるマンションのリビングに入ると、桃色と水色、そして少し薄くなった黒色の姿があった。黒でもこのくらいなら見

える。

「こんにちは。御崎剣也、水無月弓弦」

「こんにちは。で、話したいことってなんだ？」

「それは我から話す」

いいだしたのはロードだった。一度聞いた名前はなかなか忘れないのであっているだろう。

「先日シュテルに我々を殺さなかった理由を「いつか友達になれると思ったから」と言ったそうだが、本当か？」

「「本当だ」」

「今まで大量の罪を犯し、数多の人の命を奪ってきた我々をか？」

「「うん」」

「そうか・・・」

？なにを確認しているんだろうか。二つ質問をして、納得したように何回か『うんうん』と首を振っている。

「めんどくさいから僕からズバツといっちゃうと、僕たち三人は君たちの友達になりたいってこと」

「なっ、我が決めるところを先に言うなバカ者！」

「そうです。私も自分の口からいいたかったです」

「ご、ごめん二人とも！」

大体見てわかったが、レヴィが三人の末っ子的な存在で、ロードが高飛車なリーダー的存在。それを裏でまとめているのがシュテルと言った調子だろう。

「話を元に戻しましょう。二人とも、答えを聞かせてください」

「「別にいいぞ」」

『即答！？』

すぐ返されたのでびっくりしていたが、そうびっくりすることかと思っただ。

「だって・・・なあ？」

「男に二言はなし。ってことで、これからよろしく頼む・・・って、あの名前で名字はあるのか？」

「ロードは簡単に出せるが、シュテルとレヴィは無理じゃないか？」
つまりこういうことだ。

ロード・デИАーチェ↓デИАーチェ

シュテル・ザ・デストラクター↓デストラクター

レヴィ・ザ・スラッシャー↓スラッシャー

「二人物騒な名字で呼ぶはめになるな」

「それは俺もいやだ」

つまりは名前を考えることになるわけだ。ちよつとしたものなら考えたためしはあるが・・・

「ちよつと時間をくれるか？名前を考えたノートを持ってくる」

「別にかまいません」

どこら辺に置いたかな・・・

家に帰って探してみると5分ほどで見つかった。そのまますぐにマシヨンに向かう。

「ただいまー」

「そこまで待つてないですよ」

ソファに座り、点字で書かれたノートを広げる。勉強の合間でほんの少し考えただけだから、気に入らないかもしれないが。

「剣也、俺たちには読めないから自分でよんでくれ」

「あ、ああそうだな。まずはシュテルから」

「はい」

「考えた中で一番いいと思ったのは・・・『ひかりせいな光星菜』って名前だ」

星光の殲滅者から取った二文字と、それに合う文字をくつつけてみた感じた。

視覚を共有して、漢字でも書いてみる。

「漢字かけたのか？」

「練習した」

「『光星菜』、ですか・・・そこまで悪い名前ではないですし、これでいいです」

「ならよかった」

次はレヴィだが・・・

「ちよっとお願いがあるんだけどさ」

「どうした？」

「僕の名前は、僕を倒した…こいつに決めてもらいたいんだ」

そう言っ指差したのは、弓弦。

「俺がか？」

「そう」

うーむ、と言っ腕を組む弓弦。いきなり名前を決めてくれっ言われたらそれは悩むわなあ。

「雷刃・・・雷・・・襲撃・・・」

名前から探しているっばい。

「刃・・・剣・・・スピード・・・早さ・・・」

特徴も入れる感じだな。

「なんとなく決まったが、それでもいいか？」

「とりあえずいつてみて」

「つるぎちはや剣千早。漢字で書くと…こうだ」

俺と同じ剣の字。名前は千の早さという字だな。

「雷刃の刃という字から剣。名前の千早は、動きの速さから取ってみたんだが…どうだ？」

「うん、すごくいいよっ！気に入った！」

まあ少しの時間で名前が決まったところで、最後はロードだ。

「我の名前は、お前が決めるのだな」

「まあ倒したの俺だしな」

「ふん・・・早くいつてみてくれ」

そう焦るなよ・・・

「ロードの名前は、『じざい十六夜美妃^{みき}』。漢字でこうかく」

闇統べる王、ということ闇をイメージする夜の字を。美妃は王、という字から軽く連想してみた。

「ふむ・・・なかなか良い名ではないか。気に入った」

特に問題が起ることなく、あっさりと三人の新しい名前が決まった。よかった・・・

「で、艦長の用事というのは？」

「用というのは、今後のあの子たちの処遇についてよ」

「やつぱりね・・・」

「普通にいけば、守護騎士たちと同じように奉仕作業になりそうですが、どうなるんですか？」

「そうなんだけど、あの子たちは闇の書の残子であることは伏せてあるでしょ？」

「まあ、俺が言ったからな。その点についてはそれを行ってくれたことに感謝してるが」

よくできたものだと思う。もし知られたら退職処分ものだろう。

「これを行ってくれたのは、グレアム元提督なんだけどね」

「そうか・・・」

よりもよってあの爺が。艦長よりもくらいが高い役職なら、簡単にできそうだ・・・ん？元ってことは・・・

「やめたのか、あの人」

「ええ。責任をとってね」

自分の最後にやったのか・・・まあ感謝しておこう。

「でも、あの子たちは償いたいと言ってる」

「一体どうするんですか？」

「そこでものは相談なんだけど、あなたたち、部隊の隊長と副隊長をやってみない？」

「「は？」」

隊長と副隊長？9歳の子供にか？

「無理を言っているのは分かってる。剣也君が管理局に絶対的な信頼を置いていないこともね」

「当然だ。やった本人が言うセリフか」

「自分も話を聞いてますので、こっちも信頼はあまり・・・」

「そう・・・」

できるならそんなことの根源をたたきつぶしたいが、今の年齢ではむしろたたきつぶされるのが落ち…

（「剣也、たたきつぶす気持ちがあるのなら入る方がいい」）

（「どういうことだ？」）

いきなり弓弦から念話が来た。

（「考えても見ろ、管理局に入っていない俺たちが何かをしても簡単に握り潰されるのは理解できるだろ？なら入っておいて位を上げれるまで上げて、そこから何かをすればいい。それなら情報も入手はできるようになるだろうしな」）

（「相変わらず頭が回るねえ、弓弦」）

確かにそれなら入ってもいいだろう。

「ちなみに三人は？」

「話はもうしてあるわ。入らなくても守護騎士たちの支援をしないとやっているけど」

うーむ、むしろそれだと危険が増す可能性があるな。守護騎士の間と言うことで巻き添えを食いそうな気がする。

「なら・・・やってみるか、弓弦」

「お前がそう言うなら」

「本当に！助かるわ。こっちも支援中に巻き添えを受けそうで心配だったのよ」

「同じこと考えた」

「すみませんが、条件をつけさせてもらってもいいですか？」

条件？何を入れるつもりだろうか。

「こちらの部隊は、どのような事態にでも動ける遊撃部隊であることを了承してもらいたいんです」

「なぜ？」

「こちらには昔から戦闘に長けている人が3人、そして高魔力を持っている人が一人、そして自分・・・まあ戦闘員ですが、こんな状態の部隊を動けさせるようにしておけばある程度の事態には対応で

きると思うのですが」

「確かに・・・そうね。遊撃部隊のことは了承します。だけど人数が8人と制限されてしまうけど、それでもいいかしら？」

「構いません。むしろ人数が多いと動かしづらいので」

「あなた、部隊が何かに入っていたの？」

「いや、そういうゲームをやっているだけですよ」

俺は目が見えないのでゲームの類は全くしないが、弓弦はそういうゲームを結構やるという話は聞いたことがある。

「そしてもう一つ、一回だけでいいですので、そちらの最高司令官のような立場の人と話してみたいのですが」

「！？」

聞いているこっちからも爆弾発言だった。

「弓弦！？まだ部隊を作ってもみないのにそんなことしたらやばいんじゃないのか？」

「こっちとしてはどのような人につかえてるのが見てみたいんだよ。それが信用に足る人物だったら、俺はこの部隊に入る」

「っ・・・」

こうなったら弓弦はおそらく止まらないだろう。仕方ないか・・・

「艦長、こちらからも頼む」

「そうね・・・わからないけど、一応相談してみるわ」

「よろしく頼む」

さて、ちゃんとできるのかね？

BOA編第六話(第二十四話)：名前と新部隊と部隊長？(後書き)

えー、勝手に名前を作ってしまった。変な名前を付けてしまつてすみません。

感想のほうに『守護騎士になつてくれたらいいのに』とのコメントがありました。それは反映しませんでした。すみません。

まあ部隊を作つたら守護騎士並みに死ぬ気で守りそうです。：

番外編も少し書いています。あげられるようになったら最終話後に
出そうかな？

では、また次回。

P・S：神崎はやてさん、コメントの返答ありがとうございます。
設定画も少し書いてみましたが、正直下手です。あげるかどうか迷つてます。

そして剣也のことですが、女の子の服になるのではなく、本当に女の子になります。リオス君よりかなしいみちをたどるかも・・・

BOA編第七話(第二十五話)：三提督の一人との会話(前書き)

久しぶりの更新です！まあ時々はバトンなどをやっていましたが・

・

今回はStrikersに出てきた三提督の一人との対談です。果たしてどうなることやら・・・

では、久しぶりの本編をどうぞ。

BOA編第七話(第二十五話)：三提督の一人との会話

BOA編第七話(第二十五話)：三提督の一人との会話

1月も終盤となったある日の土曜日、俺はネクサスからの通信連絡で目を覚ました。

「なんじゃらほい」

「弓弦だ。朝早くにすまん」

「早すぎるだろ…今は5時だぜ？俺はあと30分ぐらい寝てるのだから…」

「まあとにかく話だけ聞いてくれ。あの艦長から連絡が来た。何とか15分程度だが、本局統幕議長と言うところの一人にコンタクトがとれたらしく、話ができるらしい」

「本当か」

「ああ。日時は今日の午後1時。時間厳守で、最低でも30分前にはあのマンションに来てくれとのことだ」

「了解」

通信を切り、俺はもう一度眠りについた。

「正装とはいっても、こんなものしかないが」

着て来たのは、俺用に作ってもらっておいた真っ黒のスーツ。ネクタイも締め、少し大人になったような感じもする。

「ちよつと待ったか？」

「いや、全然」

やってきたのは弓弦。あっちも黒いスーツだが、頭に帽子をかぶっている。

「親父さんみたいだな」

「別にいいだろ」

今は・・・35分前。ちょうどいいくらいだな。

フェイトの家のインターホンを押すとすぐに出てくれた。

「あれ、剣也に弓弦？どうしたの、そんな格好で」

「ちよつと艦長に用があつてな。いれてくれるか？」

「わかった」

入ると、あちらもすでに準備をすませていたようだった。まあ当然だが。

「こつちはすぐに出られる、そつちは？」

「こちら大丈夫よ。すぐに出ましよう」

転送ポートを使っていったのは、時空管理局の本部があるという第一管理世界、ミッドチルダ。フェイトの故郷らしい。

「あの子たち三人はすでに部屋に入っています。話はそこで行うわ」「了解」

通り過ぎる人が驚いた様子だったが、まあ気にしないようにして部屋に向かう。

「ついたわ。話が終わったらまた連絡を」

「わかりました」

部屋に入ると、話の通り三人が控えていた。

「待っていましたよ、隊長、副隊長」

「まだ正式じゃないけどな・・・この話が終わったら決めるさ」

話に使う部屋はちよつとした会議に使う部屋らしく、少し大きかった。

入ってから10分ほどして、一人入ってきた。

「こんにちは、みなさん。私の名前はミゼット・クルーベル。本局統幕議長です」

「こんにちは。自分の名前は御崎剣也、このたびはお忙しいなかありがとうございます」

「あらあら、まだ9歳とは聞いていたけど・・・よほど慣れているのねえ」

「いえ、当然のことです」

相手の声からしておそらく年配の女性・・・話をするまで正体は分からないな・・・

「リンディ艦長からある程度話は聞いているわ。闇の書事件、本当にお疲れ様」

「自分も魔法は初心者でしたし、このデバイスのおかげです」

「そう。では、話を聞きましたようか・・・水無月弓弦さん」

「話をする人を名指しとはな、確かに話したいのはこいつだろう。」

「今回この場を設けてもらったのは、私たちの部隊を作る上でお願いをしたいと思ったからです」

「お願い？何かしら」

「自分たちの部隊の、後ろ盾になっていただきたいんです、あなたに。できればあなた以外の友人二人、ラルゴ・キール武装隊栄誉元帥とレオーネ・フィレス法務顧問相談役にも」

「あら、あの二人のことも知っているのね」

「いえ、事前に聞いていただけですよ」

「っ・・・」

ミゼットさん、弓弦を除く俺たち全員が絶句した。

管理局員でもないただの魔法使い、相手は最高ランク・・・簡単に消すことだってできるはずだ。おそらくそれを承知でこの話を持ちかけているのだ。

「なぜ、後ろ盾になつてほしいのかしら？」

「御崎剣也の方から話は聞きました。管理局のほんの少しだけですが、闇の部分を。私たちが部隊を作る理由は、それらの解明と、できるならその根絶なんです」

「・・・」

よく言ったな・・・盗聴とかされてなけりゃいいんだが。

「ふふっ、そんなことを言う人は久しぶりに見たわね」

「？」

「いいでしょう。力になります」

「ありがとうございますっ！」

腰をしっかりと曲げ弓弦は頭を下げた。

「質問ですが、あなたたちは闇があることを知っているんですか？」

「知ってはいるわ。だけど私達直属の部隊なんて無いし、つぶしてもすぐに復活してしまうのよ。正直あなたたちの様な部隊は心からほしかったの」

「ちなみにこの部屋に盗聴器などは？」

「ないわ。それは安心して頂戴」

「助かります」

それから承認の時の書類などにサインをしてもらい、その話は終わった。

「ふう・・・終わった」

「緊張した・・・」

「びつくりしました、まさかあのような話を持ちかけるとは」

「下手すれば消されるような状況だったのに、なんであんなことしたの？」

「俺にも『正義』ってもんがあるからな。それを貫くのが男ってものだ」

「聞いてあきれるが・・・まあその度胸は素晴らしいな」

「ま、それがこいつのいいところだよ」

近況も取れ、気軽に話す。

「そう言えばさ、部隊名って決めたの？」

「それならもう決めてある。闇を払い、破壊し、未来に闇を残さないように・・・」

一つ区切って、こういった。

「No Future Darkness。略してNFDだ」

「未来に闇を残さないですか、いいですね」

「まさにぴったりだな」

「なかなかかつこいいね！」

「悪くないな」

「じゃ、決定で」

部隊の正式設立は3月。春休み中に行うことになっている。

今から少し緊張するが…ま、大丈夫だろう。

この仲間なら、なぜか何物にも負ける気がしないから。

「どうだった、あの子たちは」

「なかなか良い子たちでしたよ。私たちの願いもかなえてくれそうですし」

「そうか・・・ならよかった」

話しているのは、ミゼット・クルーベル本局統幕議長、ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥、レオーネ・フィレス法務顧問相談役。その顔には少し笑顔が見える。

「闇を解明し、それを根絶するか…まだ9歳だというのに、よく世界を知っているような口ぶりだな」

「家族の中にそれを知っている人物がいるのか・・・いや、詮索するのはやめておこう」

「そうね、今は彼らを信じましょう。新しい時代を切り開いていくであろう若者たちを・・・ね」

三人の老人は、はるか先の未来を見ているようだった。

BOA編第七話（第二十五話）：三提督の一人との会話（後書き）

我ながらださい部隊名をつけたものだなぁ・・・と思う今日この頃。
まあこれで剣也も管理局入りしたことになりました。

ですが目的は本編にもある通り内側からの変革。もしかしたら：抜ける可能性もあるかもしれないということです。

まあこれはi fのことなので確証ではありませんが。

ついに、次回いよいよ最終回ですっ！（その前に今日水無月弓弦君の設定を出しますが）

12月から続いてきたこのお話、ついにラストとなります。

「お前みたいな駄作が終わると思うとすっとするわ」

と思う方はそのまま構いません。自分だって他の作者様から見ればミジンコみたいなものですから。

では、最終回でまた会いましょう。

最終話：未来への順風

ドライブイグニッション！

水無月弓弦の設定&デバイス設定（前書き）

今回は新しいオリジナルキャラクター、水無月弓弦君とその相棒であるファイの紹介です。

最終回前になって公開・・・すみません。

水無月弓弦の設定&デバイス設定

水無月弓弦：男

年齢：9歳

血液型：A B型

魔力数値：A A +

魔力光：青

転校する前の剣也の大親友。1年生のころいじめられていた剣也を助けたことから親友になった。幼いころからいくつもの武術を父親から教えられており、本編にもある通り魔法なしでは普通に剣也に勝てるほどの実力。

容姿は髪は茶色がかったショート。目の色は青で、見た目は仮面ライダーダブルの左翔太郎。

同年代や年下にはクールに、時折明るく接するが、年上や身分が上の人には丁寧に接する。

ランクが上であるレヴィに勝てたのは、持ち前の運動センスとファイの性能を把握していたため。

こだわりとして男の友達には名前で呼び、女の友達には名字で呼ぶというこだわりを持つ。

デバイス設定

・ファイ

どこかの世界から飛ばされてきたインテリジェントデバイス。基本AIなどが壊されていないため普通に会話をすることができ、戦闘もできる。

ただプログラムを入れる途中だったため、そのプログラムがあれば更なる戦闘力があつた可能性もある。

待機形態は中の文字が刻まれたプレートにチェーンを通したペンダント。

管制人格は男で気さくな性格。助けてくれた弓弦を「相棒」と呼び、弓弦もファイのことを「相棒」と呼ぶ。

バリアジャケットは仮面ライダーファイズの仮面を無くし、フォトンストリームを青色にした感じ。防御力が高く設定されており、並大抵の攻撃では通らない。

この状態ではファイは腰のベルト部分についている。

魔法陣はミッド式でもベルカ式でもなくただ二重丸のなかにΦの字を入れただけ。

ただ発動シークエンスからするにミッド式に近いらしい。

魔法

・フィオキーナ・シュート（威力A+）

掌底にある砲口から魔力を打ち出す。遠距離用だが、近距離での不意打ちとしても使える。

・ストライク・インパクト（威力A+）

本編未登場技。腰にあるデジタルカメラ型パンチングユニット『ストライクショット』をつけ、パンチ力を強化して相手を殴りつける技。

・フィオキーナ・ブラスター（威力AAA-）

本編未登場技。周辺の魔力を集め、自身の魔力と合わせて放つ集束砲撃。

・インパルススラッシャー（威力AA-）

本編未登場技。腰についている警棒型エネルギーブレード『インパルスセイバー』を振り、衝撃波を相手に飛ばす技。

・デルタスマッシャー（威力AAA+）

トーチライト型ポインター『デルタポインター』を足につけ、目標となる相手に三角錐を飛ばし、とび蹴りを放つ技。魔力集束を先端にかき集めているため、威力はスターライトブレイカーより低い。貫通力ははるかに高い。

・アクセルフォーム

ファイに搭載されている『アクセルギア』の能力を使用し10秒間のみ通常スピードの1000倍の速さで行動できる形態。（変化直後のアイドリングモードだと40秒間持続）アクセルギアのボタンを押し、*「Start up」*の声とともに10秒間が計測され、10秒たつと*「Reformation」*の声で自動的にモードが解除される。但しリミッターを解除することでその限定時間を超えて活動することもできる。ただしその場合使用者に多大な負担がかかり、最悪の場合死に至る場合もある。よほどのことがない限りリミッターをはずすことはないので、めったにこの状態はないと思われる。

・アクセル・デルタスマッシャー（威力AAA×放った数）

デルタスマッシャーをアクセルフォームの時間が続く限り連続で放つ大技。スマッシャーの威力が落ちているのはアクセルフォームのスピードに回しているため。

他の基本技も技の前に『アクセル』がつき、威力が落ちた技を連続でたたきこむようになる。

家族設定

水無月総司

弓弦の武術の師匠であり、父親。帽子をいつもかぶっている。

剣也も武術を教えてもらったことがある。

性格はハードボイルド。現在はどこかに旅に出ており、家族のだれもどこに行ったかは知らない。

（噂ではあらゆる悪徳業者をたたきつぶしているらしい）

水無月奏

弓弦の母親。凄腕のキャリアウーマン。

夫がいないことを少し不安に思っているが、弓弦がカバーしてくれているので特に気にはしていない。（ただ魔法使いになったと言われた時には心底びっくりした）

実は武道を少し学んでおり、「親としてこの家を守る」ということで弓弦にも少し相手をしてもらったりしている。

水無月弓弦の設定&デバイス設定（後書き）

いかがだったでしょうか？

ファイの技は仮面ライダー555から多く取っています。設定もほぼ同じですし。

オリジナルを考えている最中に、結果として出来上がってしまったデバイスがこれだったため、新しく考えてもいいのが出ない・・・という理由で、この設定となりました。

ファンの方、申し訳ありません。

本編の方でも申し上げましたが、次回はついに最終回です。

どうか、暖かい目で見えていただけると、とてもうれしいです。

最終話：未来への順風

ドライブイグニッションッ！

最終話：未来への順風（前書き）

あれから、いろいろなことがあって、ここまでやってきた剣也たち。彼らの行く先には、どのような未来が広がっているのか・・・

魔法少女リリカルなのはA、s } Don、t Forget Story
y s }

最終回、始まります。

最終話：未来への順風

最終話：未来への順風

「あー・・・緊張する」

「確かに・・・」

3月、3学期も終わり、今は春休みだ。

今俺たちは、新部隊設立の簡単な式を行うためアースラに来ていた。
「二人ともそこまで肩に力入れなくてもいいよ？もう少しリラック
スしなきゃ」

「仕方ないだろうエイミィ、この年で隊長、副隊長を務めるなど前
代未聞のことなんだから」

着付けを手伝ってくれたクロノと、そのサポートであるエイミィさ
んが話していた。

「クロノもこの年で執務官なんだろ？それもそれですすごいことだと
は思っんだが」

「確かにそうだが、君たちの方がもつとすごいさ」

「二人とも準備ができたわ。こっちにこれる？」

「了解だ」

「じゃ、行つてきます」

「ああ」

「頑張つてねー！」

二人の声援を受けつつ、俺たちは部屋を後にした。

「えー、ではこれから、新部隊設立式を行います。部隊長、副隊長
は前へ」

「「はいっ！」」

おごそかな雰囲気の中、式は始まった。

「ではまず、部隊長のあいさつから」

まずは剣也がマイクの前に立ち、一礼した。

「部隊長の御崎剣也です。このたびは我々のためにこのような式を行ってくれたことに感謝します。最初設立の話を聞いた時、自分の様な素人がやってよいものか……と思ったのですが、心強い友人たちのおかげで決めることができました。その点は心より感謝しています。これからは部隊員ともども、協力して任務にあたりたいと思っています。では、次は副隊長に渡します」

また一礼し、拍手が起こった。

「部隊の副隊長であり、隊長の親友である水無月弓弦です。正直まだ緊張していますが、今回は誠にありがとうございます。アースラの艦長であるリンディ・ハラウンさんの協力もあり、三提督からのお力添えもいただくことができました。感謝しています。副隊長として、部隊長をしっかりとサポートできるよう頑張りたいと思っています。これで、挨拶とさせていただきます」

今度は二人揃って礼をし、拍手の中元の席に着いた。

「次は、友人代表挨拶です。フェイト・テストロッサさん、お願いします」

名前を聞いた瞬間、剣也が「え？」とびっくりした表情を浮かべていた。

「友人代表の、フェイト・テストロッサです。初めて会った時、質問の嵐から救ってくれた剣也には、感謝しています。そのあとも、すごい魔力量を持っていたことにはびっくりしましたが……そのおかげもあって、闇の書事件も解決して、はやてやリインフォースを救うこともできました。正直な話、初めてバリアジャケットを着て戦っている剣也の姿は、かわいくて、かつこよかったです「そこは言わないでくれよ……」いや、正直に言っただけだよ？」

溜息とともに剣也の声が入った。

「私たちと同じ年で、部隊長、副隊長になるのはすごく大変なことだと思いますが、これからもがんばってください。これで、挨拶を終わります」

再び拍手が起こり、次は書類の手渡しとなった。

「読み上げます。三提督直属特別遊撃部隊『NFD』、部隊員5名、御崎剣也、水無月弓弦、光星菜、剣千早、十六夜美妃。ここに設立することを決定しますが、異議は？」

『ありません』

「では、部隊の設立を正式決定します。これが書類となるので、この後ランクの試験などに使うので無くさずに持っていてください」

『はい』

「これで、設立式を終わります」

盛大な拍手が起こり、式は終わった。

「お疲れさまー！」

「はい、これ私の店のケーキ！お父さんとお母さんが差し入れにつて！」

「私も！お祝いに作ってきたで！」

式が終わっていきなりフェイト、はやて、なのはがやってきた。

「ちょっと待ってくれ、こっちは少し疲れてんだ」

「全く、これがオリジナルかと思うと気分が悪くなります」

「もう少し静かにできないのか？この塵芥どもが」

「十六夜、さすがにそれはいいすぎだと思う」

「もうちょっと仲良くしようよー」

まあ良くやってきてくれたもんだ。フェイトのあいさつには少しびつくりしたけどな。

「そう言えばそっちも進む道は決めたんだろ？」

「うん、私が執務官で」

「私が戦技教導官で」

「私は特別捜査官やね」

「夢があるというのはいいことですよ、おさん方」

「ラインフォースも、一応部隊員なんやろ？」

「そうなんだが、デバイスはやはり『もの』として扱われるから、正式の扱いではないがな。一応部隊長補佐として動いてもらうこと

にはなる」

「補佐って言えば、守護騎士たちは「呼んだか？水無月」シグナムさん！」

やってきたのは守護騎士四人。ザフィーラも今日は人間形態らしい。

「あれ？制服が違うんじゃない？」

「武装隊用のアンダースーツだ。局の女性用制服は窮屈でな」

「こっちの方がしっくりくるんだよ」

「湖の騎士は、医務官用の制服ですか？」

「医療用白衣もついているので、なんか本当にお医者さんになった気分ですよ」

「ザフィーラさんは？」

「自分は戦闘員だがあまり役職というのは決まっていない。主なことと言えば主の守護だな」

「『盾の守護獣』だからね。僕たちの友達なんだからしっかり守つてよ？」

「いわれずともわかってる」

「・・・ユーノとアルフは？」

「無限書庫の方でお仕事中。昼には終わるって」

「そっか。ちよつと顔でも見たかったんだが」

昼までちよつとあるな・・・手伝いにでも行くか。

「顔見せついでに手伝ってくる。弓弦、あとは自由にやってくれ」
「了解だ」

書庫の場所を聞き、そちらの方に向かった。

「お邪魔するぞー」

「剣也！部隊長就任おめでとう！」

「サンキュ。仕事があるって聞いて手伝いに来たんだが、何かあるか？」

「助かるよ。僕とアルフ、あと二人手伝いがいるんだがあまり進まなくてね」

「調べるデータに夜天の書と同じものがあれば、調べることもできますが」

「そっちも使う時があるかもしれないから、剣也、セットしておいてくれ」

「オッケー」

仕事と言っても本の整理のようで、そこまで調べるようなものはなかった。

長年使われていないから、こういうのから始めていかないといけないらしい。

「ユーノは司書になるんだって？」

「まあね。この前の事件での功績が評価されて」

「アルフは？」

「私はしばらくフェイトの手伝いだけど、中学生くらいになったらもうサポートはいらなくなるからね」

「魔力を食わないようにしないと、執務官になった時全力で動けないからな」

「そういうこと」

ふと、ネクサスに通信があった。

「剣也、少しいいか？」

「どうかしたか？弓弦」

「ちよつとしたチームでの模擬戦をやるようなんだが、出るか？」
「相手は？」

「守護騎士4人&はやて、ユーノとアルフの都合がつけばなのは、フェイト、クロノが出るらしい」

「どうする？二人とも」

「仕事ももう少して終わるから、それが終わったら行くとってくれるかい？」

「だ、そうだ」

「わかった、よろしく伝えておく」

「えー、では、これから八神家vsミッド式魔道士vs新部隊NF Dでの模擬戦を行います」

なぜか仕切っているのはやてだった。

何でもデバイスの調整が終わったとかでフェイトとシグナムさんがバトルしようとして、それに誘われる？ようにしてこんな感じになつたらしい。

「ルールは局の戦闘訓練に準拠で、非殺傷設定は当たり前。武器持ちの人はバリアジャケットに注意してな」

ま、当然だな。

「作戦は？」

「人数は十五人、訓練場の大きさから見て混戦になるのは当たり前だ。なるべく一対一で相手して、視界を広く持つてくれ。いざという時は俺がアクセルで出る」

「千早にはスプライトフォームがあつたな。俺もフェイトのソニックで出る時もある。なるべくミッドにはクロスレンジ、八神家にはロングレンジであたつてくれ」

「わかりました」

「オツケー！腕が鳴るよっ！」

「久々に暴れられるな・・・」

弓弦は剣を構え、俺もこぶしを構えている。

「じゃあ、レディ・・・ゴーっ！」

「若い子たちは元気ねえ」

「それがいいんじゃない？」

別の部屋で、リンディともう一人の女性が話していた。

「あの部隊、もう噂になつてゐるわよ？魔力量SSSランクの部隊長と、戦闘力抜群の部隊員が4人。そして3提督の後ろ盾までついているんだから」

「水無月君の努力のたまものね。よくミゼット提督に掛け合つて、おまけに了承をとるなんて思つてなかつたから」

もう一人の女性の名前は、レティ・ロウラン。時空管理局の提督のひとりであり、リンディの友人だ。

「あの若い子たちが、未来でどんな活躍を見せてくれるのか、楽しみね」

「そうね・・・あの訓練場、ちよつとまずいんじゃない？」

「フィールド形成&チャージ完了っ！お待たせしましたおっきいのが行きますっ！」

『げっ！？』

なのはとフェイトはチャージを完了し、空間攻撃に移るようだ。

「N&F中距離殲滅コンビネーション、空間攻撃『ブラストカラミティッ』！」

「ところがぎゅっちゅんこちらも詠唱完了やっ！広域攻撃Sランクの意地があるっ！」

「ユーノ、俺たちもでかいのだすから最強の結界よろしく」

「すでに張ってある。訓練室以外に被害は出ない」

「俺たちも行くぞ！」

「オツケーっ！」

「Exceed Charge」

「Full Charge」

「ダブルMコンビネーションアタック技！フィオキーナ・インフエルノっ！」

「全力全開！」「疾風迅雷！」

「閃光一撃！」「一撃必殺！」

『いつけーっ！』

直後、大爆発が起こりました。

「けほっ、けほっ・・・」

「派手にやらかしちまったなあ・・・」

『はははははっ！』

みんな気が狂ったかと思うほどに笑っていた。服もぼろぼろ。ユニに至っては軽く目を回している。

「あーっ、畜生引き分けかつ！」

「くーやーしいー！」

「勝てると思ったんやけど…残念やなあ」

「もうちよつと威力をあげりやよかつたかな・・・」

「私、もう限界…」

激しい戦闘が終わったというのに、なぜかみんなの顔は笑顔だった。これが、今の俺たち。

転校してきて、ヴィータにあつて、なのはやフェイト、はやてに会つて。

プログラムってことに号泣して、お偉い方殴つて、女の子になりながらリインフォースとはやてを助けて。

残滓三人と戦つて、弓弦と再会して、部隊を作つて。

本当に、たくさんの思い出ができたと思う。

俺は、この思い出を一生忘れないし、忘れるつもりもない。

「これからよろしく頼むぞ、大切なもう一つの主」

「ん？どうかしたか、リインフォース」

「何でもないさ」

「？」

小声で何か言つた気がしたが、なにを言つたのだろうか？ま、いいか。

「これから、よろしく頼むぜ？みんな」

「当然だろ？親友」

「もちろんや！」

「改めて、よろしくね！」

「一緒に頑張ろう？」

この思い出をくれた神様に感謝したいな。

「あなたたちの未来に、順風が吹きますように」

『？』

何かが聞こえた気がした。

「なにか聞こえなかったか？」

「確かに・・・」

「なんて言ったのかな？」

「一瞬だったから、よく思い出せない・・・」

「記憶力が言い剣也でもわからないとはな・・・」

「未来に順風を、と言っていましたよ」

「リインフォース？」

「おそらく、どこかの誰かさんがみんなの幸せを祈っているんですよ」

「ふうん・・・」

（「ですよね？アルトリア」）

（「やっぱり作者の声は覚えているのね、夜天の書」）

「誰かわからないけど、ありがとな」

順風・・・俺たちが歩く未来に、その風が吹くことを心から祈りたい。

「さあ、新しい俺たちの話の始まりだっ！」

魔法少女リリカルなのは Don't Forget Story
S } 完

この作品を読んでくださったあなたの行く先に、祝福の風が吹くことを心より祈っております・・・

作者

最終話：未来への順風（後書き）

終わりました・・・ここまで長かったような、短かったような感じがします。

感想もいただいて、お気に入り登録もしていただいて、評価もしていただいて・・・本当に、感謝しています。

この後は、ちょっとした番外編をはさみ、Strikersへと進みます。

番外編を上げるのは一週間ほど後になるかと思っています。

では、また会う時まで・・・

祝！完結記念番外編：これで、本当の終わりです（前編）（前書き）

今回は、私一人でこの物語について語っていく感じですよ。

特に面白いことはなにもないので、見たくない方は次回予告の方をご覧ください。

では、本当の最終回・・・スタート。

祝！完結記念番外編：これで、本当の終わりです（前編）

さて、前回の50000PV記念では、この物語ができるきっかけと、ジャケットの違いなどを語りましたが、今回は各ストーリーについてのお話をしようと思います。

長くなりますが、どうかお付き合いください・・・

（前編では、本編最終回までを語ります。設定についての話はありません）

プロローグ

初めて書いた作品なので、内心ドキドキしながら投稿したのはいい思い出です。

主人公がどのような障害を持っているかというのは、やはり初めに一気に語ってしまおうか・・・ということで、ちょっと長めの紹介になりました。

第一話：翠屋

なのはとの出会い編。とはいっても全然話はなく、コーヒーとケーキを頼んでまつたりするという普通のお話でした。ひねりも何にもないので、普通にかけました。

第二話：深夜の出来事

ヴィータとの出会い、この事件の始まりのお話です。剣也君の優しさが垣間見える会でもあったりして、少し力が入った回でもありました。

今でも読み返すと、「このころから剣也ってすごかったんだなあ・・・」と思うこともあったりなかったり。

第三話：new friends

学校に入るお話。アリサやすすかも登場して、原作にも結構入ってきたか？と思ったりしました。名前で呼んで、というのは、少し無印のことを意識していたりします。

第四話：図書館にて

はやてとの出会い、闇の書のことについて少し剣也が触れるお話。障害者同士気が合うのかな・・・？とか思いながら書いていました。目が見えない少年と、歩けない少女。このころからはやてと剣也は仲良しになるといふのは決定していました。

第五話：フェイト・テストロッサ

フェイトが転校してきた時のお話。フェイトが言葉をかんでしまうのは、転校してきた時の女の子は緊張するところなるのでは？という思いで書きました。

このお話から、物語が少しずつ動き始めます。

第六話：夢

リインフォースとの夢の中での出会いです。「。。。。」は、「夜天の書」が入ります。

剣也が気づかぬうちに魔法を使いますが、それはのちのデバイス設定の時に明らかにしました。

第七話：剣の将と湖の騎士

シヤマルとシグナムとの出会いです。特にひねりはなく、普通のお話。

最後にちょこつと不安な空気が流れますが、それは次のお話への布石だったりします。

第八話：漆黒の夢と最悪の事実

剣也がリンディさんに対してキレるお話。ちよつと力を込めて書き

ました。

管理局の闇というか裏の部分を少し書いてみた感じです。

第一期からありましたが、「またきてください」というのは、完全にこちらに引き込むための言葉だったのでは、と思っています。小学三年生で、あんなに正義感のある少女ならば、引き込むのは容易でしょうし。

フェイトに対する夢のお話もありました。これは続編のお話で回収することになるかと・・・

第九話：まさかの来訪者

剣也とフェイトの対話です。剣也の知識があつたからこそその提案ですが、正直これでよかったのか・・・？と思う時がありました。最後の夢の中で、この後の予知夢の様なシーンを書きました。このシーンの時は、剣也はグレアムさんとの対話で、あの人を殴っていることになっています。なので、このシーンをあの時に合わせられませんでした。ここで書いてみましたが…大丈夫だったかな？

第十話：受け止めるべき事実

守護騎士たちの本当の姿を知ることになり、剣也が大号泣するお話。書いている最中に、自分も心が痛くなりました。（自分の作品なのに・・・）

このこともあり、剣也は決断を早く決めたいと思います。

原作も、最終回に近づいてきたころですね。

第十一話：その運命を変えられるなら

自分がやろうとすることを、剣也が両親に告げるお話。

ここまで子供の意見を素直に聞いてくれる親は、なかなかいないのでは？と今でも思ったりする時もあります。（読み返すたびに）

ネクサスとウィーグルさんも初登場しましたね。（出番はほとんどないですが）

第十二話：俺自身の正義

ギル・グレアム提督との対話です。題名は少し「仮面ライダーカブト」を意識していますし、言葉の中にももじったものが入っています。

目上の人に対して、あれほどの言葉を言える剣也は、まさに主人公だと思いました。
殴ったりするなんて・・・ねえ？書きながら少しスカッとした自分もいたりして。

第十三話：守りたいという願い

原作での第10話にあたりますね。スターライトブレイカーを撃つシーンです。

どのようにしてセットアップさせるかは、バリアジャケットがまだダブルオーガンダムだった頃から変わっていません。（その時の言葉は変わっていますが）

「闇の中に生きてる」というのは、剣也が見ている世界をそのままに表した言葉です。

決して裏社会に生きているわけじゃないですよ？

余談ですが、はやてが闇の書の意味に取り込まれて変化するときのシーンは、なかなか好きだったりします。

第十四話：女物は似合わないと思う

剣也、初セットアップの回です。女の子になるというのは、自分の中では「これはなかなかないだろう・・・」と思っていたのですが、まさかのほかのアニメとのもろかぶり。まだ自分の世界は狭いなあ・・・ということ、改めて痛感させられました。

スターライトブレイカーを受け止められるだけのシールドを張れるというのは、結構なチート性能なのでは？と思っています。

少し、「仮面ライダーオーズ」の言葉が入ったりしていますが、シ

イン的にはぴったりなのではないかと思います。

第十五話：戦闘、開始

初めての戦闘シーン。書いていて「自分は文才ないなあ・・・」ということを感じました。結構頑張っています。

魔力光が黒、というのはこの戦闘が剣也にとつてどれほどきついかを表現するために少し変えました（原作では紫に黒を多く混じらせたような色）

闇の書の意味は、本来こんなあくどい性格ではありませんが、雰囲気を出すために変えさせてもらいました。ファンの方、すみません。

第十六話：夢の中で

原作とは違い、剣也が闇の書の中に入るようにしました。

ゲストとして、古代ベルカの三人の王様たちにも来てもらい、場を盛り上げるためのゲストとして登場していただきました。

「主人公って、かつこいいよね」というのを感じました。

脱出方法は、とにかく衝撃さえ与えればどうにかなるだろう、という自分の考えです。

（ちなみに、この回が一番一日のPVが多い回でした）

第十七話：Tの終わり／ファイナル・アタック

原作第十二話の「夜の終わり、旅の終わり」の回です。ちなみに題名のTは、「trip」と、日本語での「旅」（tabi）のローマ字読みの頭文字をそれぞれ取りました。

アルカンシエルの地殻津波は、本当に起こる可能性があります（アンサイクロペディア参照）。

この全員でのフルボッコシーンは、A、sでもお気に入りのシーンです。シグナムさんの「駆けよ、隼！」のシーンは、グツとくるものがあつたりして。

シャイニング・ノア・ブレイカーの設定は、自分でもやりすぎたの

ではと今でも思います。

本編最終回：Tの終わり／闇の終焉？

本編最終回です。原作では最終回ですね。

剣也がリインフォースを取り込んで、暴走プログラムの破壊をするというのは、無茶苦茶なことか・・・と思いましたが、そこは管理局の方々に頑張ってもらうとして。

視力もほんの少し回復（見える）して、結構いい終わり方になったと思います。

題名の最後にある「？」は、BOA編への布石です。

最後に出てきた弓弦とファイは、「仮面ライダーディケイド&仮面ライダーW movie大戦2010」の最後に出てきた照井竜を意識しています。

祝！完結記念番外編：これで、本当の終わりです（前編）（後書き）

これで本編最終回まで終わりました。次からはB O A編を語ります。
そのまま読み続ける方は、「次の話」をクリックしてください。
疲れたな・・・と思う方は、一度休憩してから次に行くのを勧め
します。

祝！完結記念番外編：これで、本当の終わりです（後編）

では、後編のスタートです。BOA編の第一話からスタートです。（設定の話は飛ばしています）

BOA編第一話（第十九話）：リインフォース、考える。

事件が終わり、少しのほほんとした感じを書きたかったので、こんな感じに。

今までこんなことをしてきたリインフォースが、自分のことについて考えるお話です。

起きるときの「ふみゅう・・・」というのは、少し意外性を狙ってみました。

寝言であんなことを言う男の子って、どこにもいないと思います。

BOA編第二話（第二十話）：星光vs白金

まだ星光の殲滅者だった星菜との対決です。短期間でここまで自分の魔法や使える技術を理解しているというのは、なかなか書いてすごいな・・・と思いました。

最初のころにもありましたが、剣也の通常での感覚は、ものすごく研ぎ澄まされています。

だからこそあの戦闘術ですが・・・やりすぎた感が否めません。

BOA編第三話（第二十一話）：雷光vs青の閃光

弓弦&ファイ、初登場にして初戦闘の回。雷刃に向けていった「さーて、行こうか・・・サンダーガール」というのは、「仮面ライダージョーカー」が、映画の時ヒートド・パントに向けてはなった言葉を少し変えただけです。

いつも見るたびに思いますが、「仮面ライダーファイズ」のアクセルフォームの描写は、何物にも負けないかつこよさがあると思うん

ですよ。

「早さには早さ」というのを考えて、ソニックフォームの様にハイリスクハイリターンのことなら・・・というわけで、こうなりました。

BOA編第四話(第二十二話)：王vs白金&祝福

剣也&リインフォース、初ユニゾンにして初戦闘の回。思いつき「仮面ライダーW」の言葉を使わせていただきました。この言葉、かつこいいです。

「これが、俺たちの・・・光だっ!」というのは、「ウルトラマンゼロ」が映画で「ウルトラマンベリアル」に向けて言った言葉です。PVで見たのですが、気に入っている言葉です。

ニアEX、が今の状況ですが、StrikersのころにはユニゾンしたらEXレベルになっているのでは・・・恐ろしいです。

BOA編第五話(第二十三話)：罪の責任

ちよつと哲学?みたいなお話。

自分なりの言葉ですが、生まれたときの罪と言うのは「なくなった生物が、人として元の世界に戻る権利を奪ってしまった」ということだと自分は思っています。

あとの罪は、人それぞれによって変わりますが、その一つ一つに責任を持ち、重みを知るといのは重いですが、せめて覚えておくだけでも自分のためになるのでは?と思います。

自分的に、マテリアルでお気に入りなのはシュテルです。

BOA編第六話(第二十四話)：名前と新部隊と部隊長?

自分でも『変な名前を付けたのでは?』と思いつながら書いていました。ファンの方、すみません。

この年で部隊長と副隊長と言うのは、無理のある設定かと思いましたが、話を進める以上ここでやらないといけない気がしましたので、

こんな感じにしました。
それにしても弓弦君、あくどい。

BOA編第七話（第二十五話）：三提督の一人との会話

正直無茶がありすぎるだろう、と思いながら書いたこの話。

三提督は管理局の黎明期から活躍していたというので、使えると思
ってこんな感じに。

三人の口調がどんなものかわかりませんでした。大丈夫だったか
な？

最終話：未来への順風

最終話です。終わり方は漫画版のA、Sを見ながら書いています。

全員で戦って、最後笑顔になるという終わり方は、自分のにも好き
なので。

これを書き終えたとき、

「よくここまでやってこれたなあ・・・」

と思いました。勉強の間で書いていたので、結構きつい時もありま
したし。

これで、すべての話について語りました。結構読み返すと「自分っ
て、何やってんだか・・・」と思うこともしばしば。
では最後に、この作品について自分から。

主人公を障害者にする、というのは、正直きつかったです。

なにせ、知り合いにもそう言う人が全くおらず、霧の中をさまよう
ような感じでした。

その点で、『ものと魔力光が見える』というのは、自分の中で保険
だったと思います。

自分の今までの世界を超え、魔法の世界に足を踏み入れ、そこから
成長する・・・

こんなことができるのは、やはり『魔法少女リリカルなのは』の世界だからこそやれるような気もしました。

こんな感じの作品ですが、最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。

次回作は、おそらく1ヶ月くらい開く可能性があります。

それまでどうか、お待ちください。

では、また会う時まで。

2011年4月12日

作者：ポツキ

祝！完結記念番外編：これで、本当の終わりです（後編）（後書き）

最後まで読んでいただき、誠にありがとうございます。

ここまでかけたのは、やはり読んでくれた読者様の力だと思っています。

お気に入り登録してくださったユーザの皆様、本当にありがとうございます。

では、また会う時まで・・・

次回作予告

魔法少女リリカルなのはA、s Don't Forget Storyのお話から一年、剣也たちは、表では普通の学生、裏では三提督直属特別遊撃部隊として過ごしていた。

彼らの戦いは、ちょっとした噂として管理局の間でうわさになるほどだった。

「さーて、お仕事開始だ！」

『白金の騎士』、部隊長の御崎剣也。

「面倒なことは、さっさと終わらせるに限る」

『青色の閃光』、副隊長の水無月弓弦。

「誰かを守れる力が、私にはありますから」

『星光の守護者』、光星菜。

「今日も、張り切っていこうっ！」

『迅速の雷光』、剣千早。

「私も、変わってしまったな」

『夕闇の王』、十六夜美妃。

彼ら五人は、めきめきと実力を上げていった――

そんななか通達された、一つの任務。それが、物語の始まりだった。

「生態調査、ねえ……」

「特に問題のある個所ではないから、すぐに終わるんじゃないか？」

出撃せよ、NFD――

「僕の力は、役に立たないかもしれない・・・だけどいつかは、誰かの役に立ってみたいんです」

そう言った、心優しき少年。

「私は、いつも誰かを怖がらせたり、傷つけたりするばかりだから・・・」

その身に宿した力のせいで、家族からも見放されてしまった少女。

「理想、つてのはあまりにもはかないかもしれないけど・・・それをかなえるために努力するつてのは、いつだってできる」

星を見上げながら、こうつぶやいた一人の少年。

彼らは一体何を思い、選択し、どのような未来をつかみ取るのか・・・

今はまだ、だれにもわからない――

「じゃあな、みんな――今まで、世話になった」

魔法少女リリカルなのはStrikers No Future
Darkness 始まります。

その身に宿せ、未来をつかむ、その力を――

次回作予告（後書き）

と、言うわけで次回作の題名は

「魔法少女リリカルなのはStrikers No Future
Darkness」

です。ただ単に原作の名前に部隊名くっつけただけという簡単な形。
この作品の第一話はいっていますが、まだ調整中なので投稿できません。

少しの間、お待ちください・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5391p/>

魔法少女リリカルなのはA`s ~ Don't Forget Storys ~

2011年7月21日21時00分発行